夕霧里

二十三

哥を名とせり

[v.39]

PL788
.4
.G4
1654
vol.39
Copy1
Asian
Japan
Cage

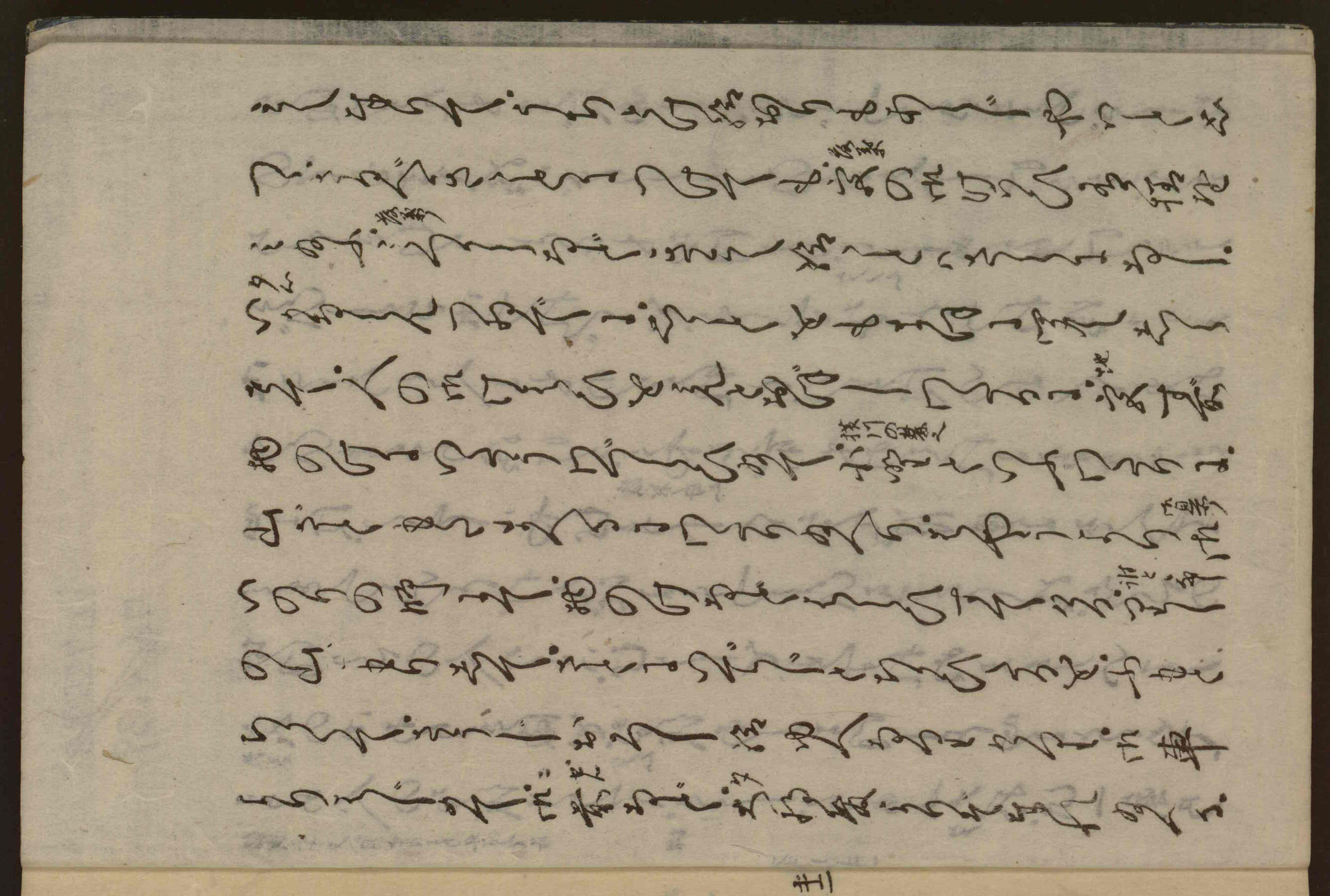
THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

44

[illegible]

まめ人のなほかりて、さしがりぬふ大将、此一条乃
家のれありさ夜となほ[タム]あしまほしと心にとぐめて、
なほかるの人かにはむかしをますれぬよういかり
こきつくいとわんにまとふしひきそして給、たるの
心にはかくてはやむまじくなん、月日にそへて
たひまさり給けるこそやもしまゐ[家ノ母ム]もおもれにまがうさ
れこころぐ人にもあかれといまはいにくもれ
さびしされつれぐを、こゝずをとづれ給ひ
なぐさむかことぐもなほかりたじめ[タノム]りけさう
びても罪て給はざりしにひきへしけさうだらこ
なほめんもまばゆし、こゝかきこころざしを



中くまうとの心うしれらうさゆりの志ぐらハ。（柏ノ衛門ノ督）
ことわざしげきどのがたてのつとめこまかれ
つきそしもおひいでこえて給ひず。（紅梅大臣）弁の君ちうて。みふ
心あさきうしもあらで父きさだくてけりまことの（薫ノ）かう
あるうれしきをてなしあるりけりこ。（紅梅ノ）きみおそえとなつくひ給
もずるりまつり。此君ハ（夕）つとりしこてう。さりげなく
ずみしうれ給ふこなり。ずほう（匂兵部卿ノ）あるべきをこせ給ときふ（夕）て
給のかたぐ。おやう（浄衣）えちがやうの。こ御たちすね抱ぞきへむまれ
給ふ（匂兵部）やこ給へバえ見し給ひずちがへて（人ノ詞）のせんじげきさハ。
抱しとあげしぬべくこまくきこされ（夕ノ大将ノ君ハ）こ御あなりと。
人ぐこうしめれバ。（薫）宮ぞれなくりくさこえ給。此てハつく

さてこちらていて給ひ前ことくしかしでおる
しさ恨(うぎり)め六人ぢうりかり衣(ぎの)まてさふらふことる
かうさこちなるもどまけ(ひえの山の基く)がさ紀のをやまのつろ
などもさうつきかなるもどおされ色づさて都
にまるくとけりしかる歌ねまはなる代表もけうも
まさりてぞこゝゆるやさうなるさこ業がさもゆへあり
さ海まもるしてかりそめなれどあてちる住居(すまい)
なしぬへりもん歌とおぼしさひんがしのちなち
いでに浴法(ざおり)のぶんぬりてさるのひさしにおも(此息不ノ)
すれがましおもてに家(蔵業)はおりしまもてれものくけ
じつしとてとぐめまり給れどいでうもなれ

なんとしたひつりたまへるを。人(地のけうす)りうつり
ちりをぶちて。すこしのへぶそぢりは。(仙息不ノ仙也)つゐるゝは
つゝしまり給ひず。まゝ(タ)うとのゐゆべきごころの
なければ。(彦東)いやのれうるのすれまへはいれ(タと)なりて。
よらうぶつんぶれせうそこさてつゝふいとる(仙息不ノ詞)
じけなくううまでの給ひをつゝしせたまへるを
なん。もしかひなくなりたて給ひば。これしこ
ありをぶる。さてさきでやとせゐるなん。いま
しばしかけとぐめまほしきうろつさ給ぬると。
さていぶしのへり。つゝ(タ詞)しを給しれをくりす
もとせ給しを。六(源)条院はうけ給りさしたること

物し程まてなん。目にもそこはとなくまぶすなと
と物て。ふひかゝるこゝろのほどよりハ。こよなく
をろかなれんぞしらんことの。くるしう物など
こゝろ給。こやハ（蔵業比）おくのくるまいと志のびており
まをどこゝとくしりしぬるびのれ志けしひ。
おきさやうなりなましの程まて。人のれけりひをの
けしきなしいとやりしうちこゝろさなど
志給。れぞのをとなひ。（夕ゑ）さげりなるまとさてね給
へり。こゝろもそしるおぼして。おかゝれれせうそこ
なよふ程。すこしとをうへぐるかひまる。例のかねの（蔵業といとこと）
志などさふしふんぐる物語などしかて。（夕詞）かう言りさ

いでんはぢぐしうなどつきしちひて、うゝ(女ぞう詞)なれ
うれへきこしめしたるぬやうなりと、(落葉)宮は宮ゆれば、
月(詞 賞和ノ)づゝし宮ゝ給はざめるうゝはしいさまにうゝり
ゆるべき紙、いとおそろしきまでも此志給めりし
(賞和ノ抱のけ)
をこゝあつかひ給し程に、いとゞあるかなさも此心ちは
なりてなん、え宮ゝぬとあれば、こは(ケメ)(落葉)宮のれをうそこ
うとゐなをりて心(詞)ぐるしきれなやこ紙ゆへ
ぢうりなげき宮しさせ給りもなまのゆへにかゝる
ぢけなけれど抱紙見しきりれなほなどなれぐ
志きうゝにもこまりなをし給までは、女いうゝに
すぐし給りんこそ、こゝがれしめりしもこれもしさ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

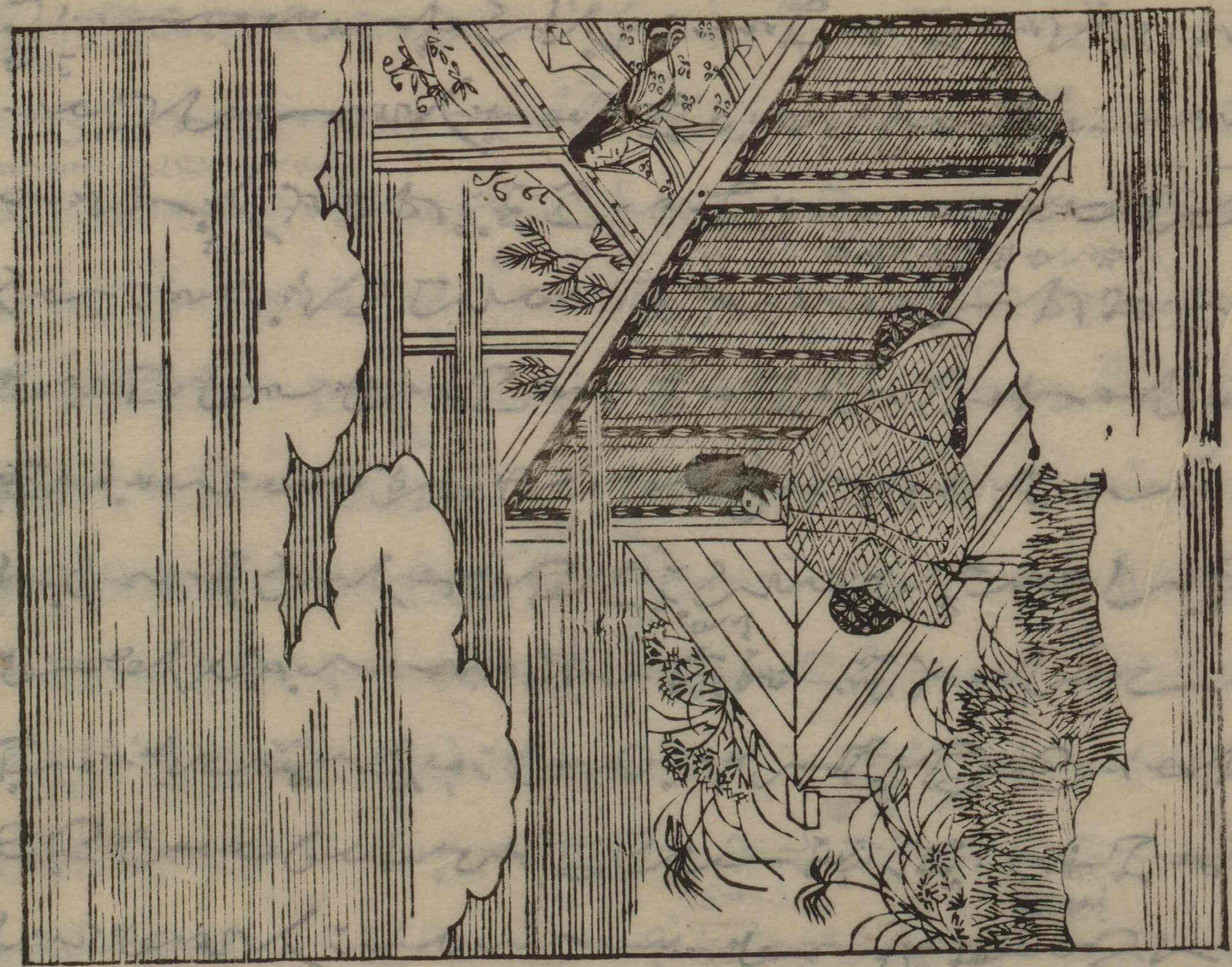
ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

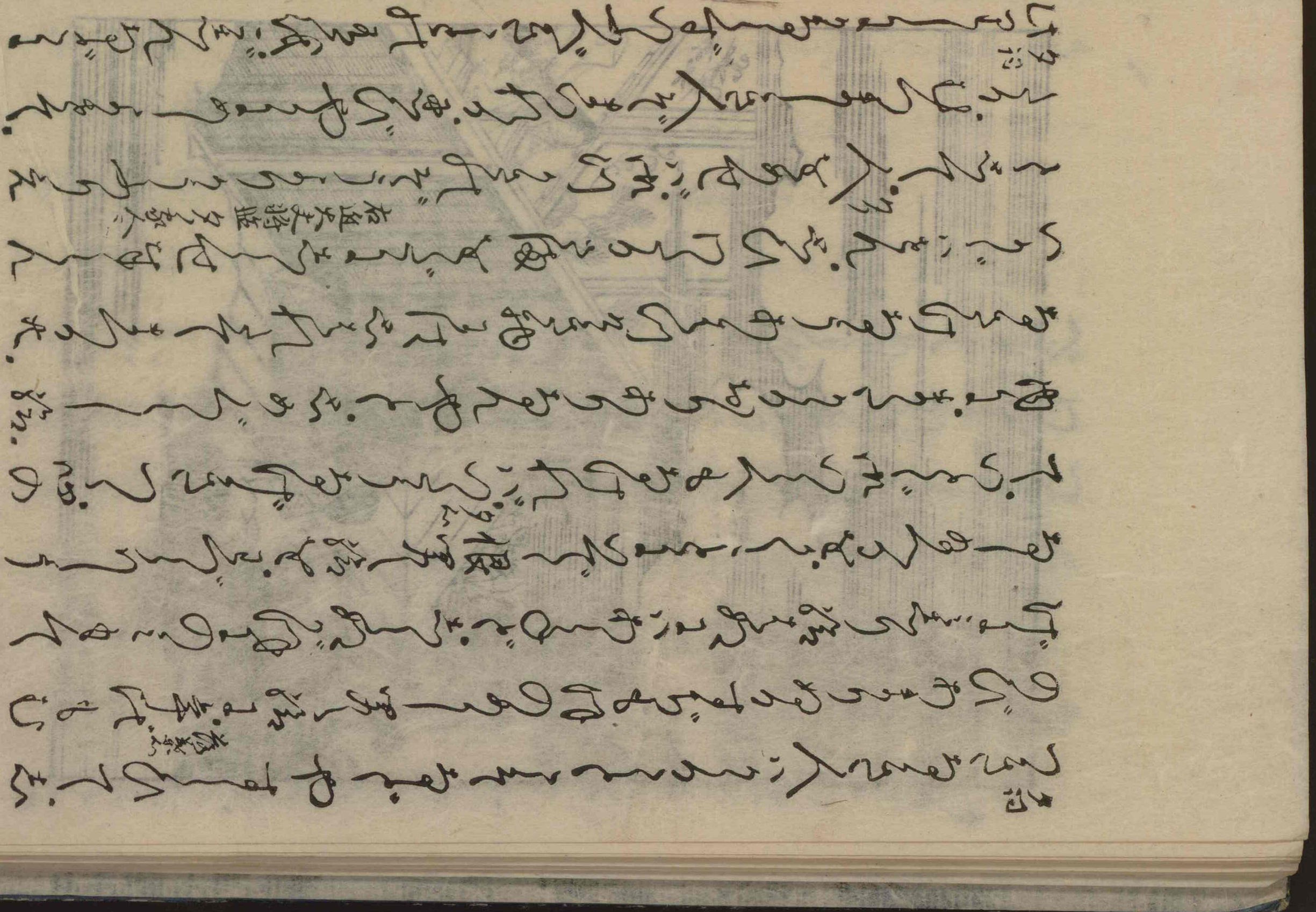
ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

ことはゆゝしくこそ
なんどあるべし
ゆゝしくつもりは
ぬる心ぞ
なんと男
なげとく人
なりゆくこそ
山のげハとゞ
ぎこそ
けるいろも
こゝろまこと
すゞしげそや
まゝぶくこゝ

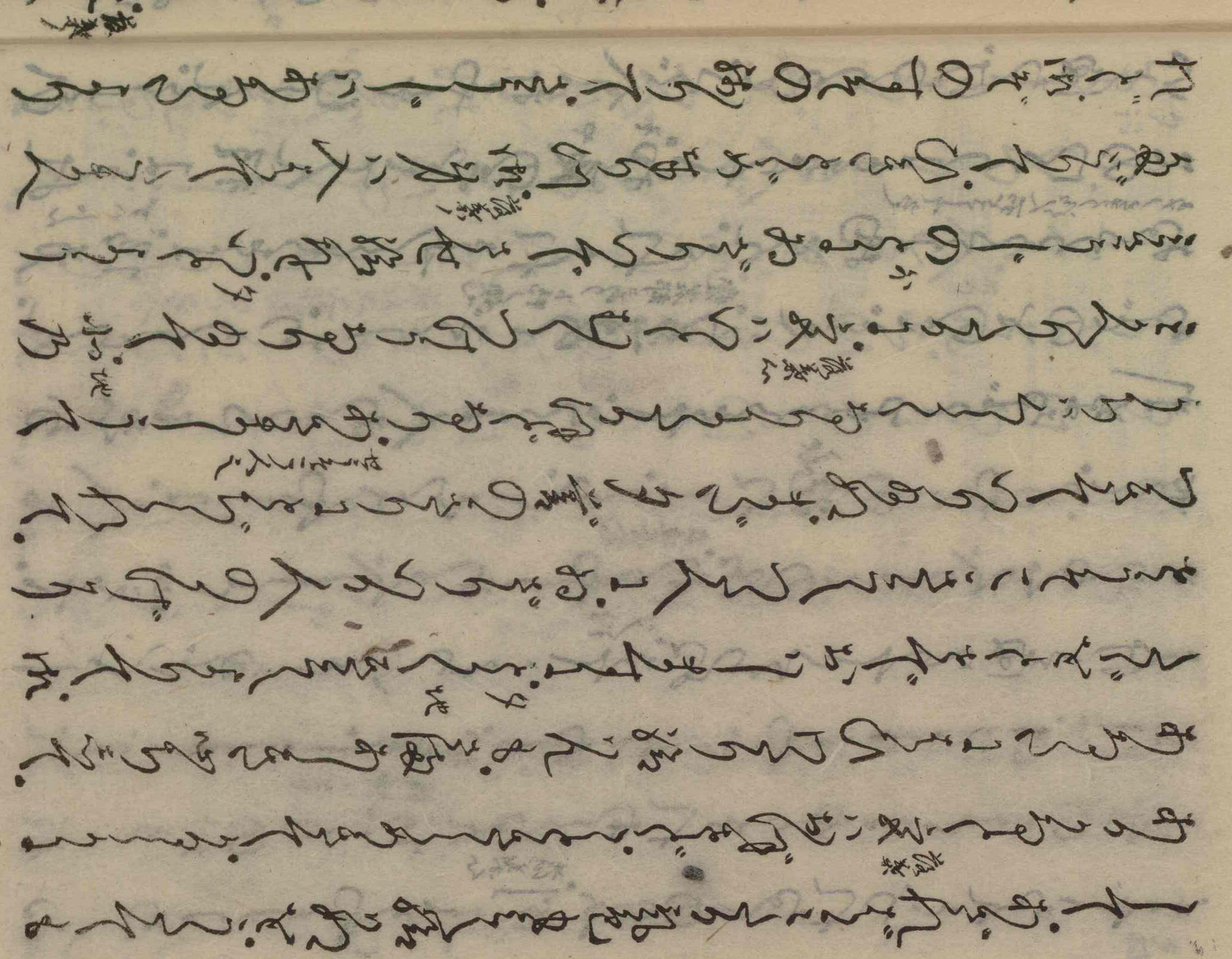
ときゝまりて、かゝうちなるすゝ、こけこゝ思もね
かゝりもひとろにあひて、いと(夕ゑ)こゝとく男也、取りこ
よろげのこと心ぼそうこゝなさるゝも、衰に抱おもひ
つゞけろいで給へん心ちもなし、(地)ぼしもかぢする
(そと)書きてぞこゝにいとこゝとくよひやいと(仇息不ノ)ろしげに
志給ありとて、人ぞもそなるにつどひて、おほかるも
かゝるびどころに、おまる(如ぞうりうす)気しざりけるに、いとぞ
人ずくなるまて、文(落葉)はなぐめなへりおもめやかまてぶふ
こともうちいでけべきおりかれと、(夕ノ)ぶねなへるに、
ありのくぐ此(のさ)行のもとまでこちつれば、(夕同)まるぞん
かゝもこゝぞなりゆくはいかゞすべきとて

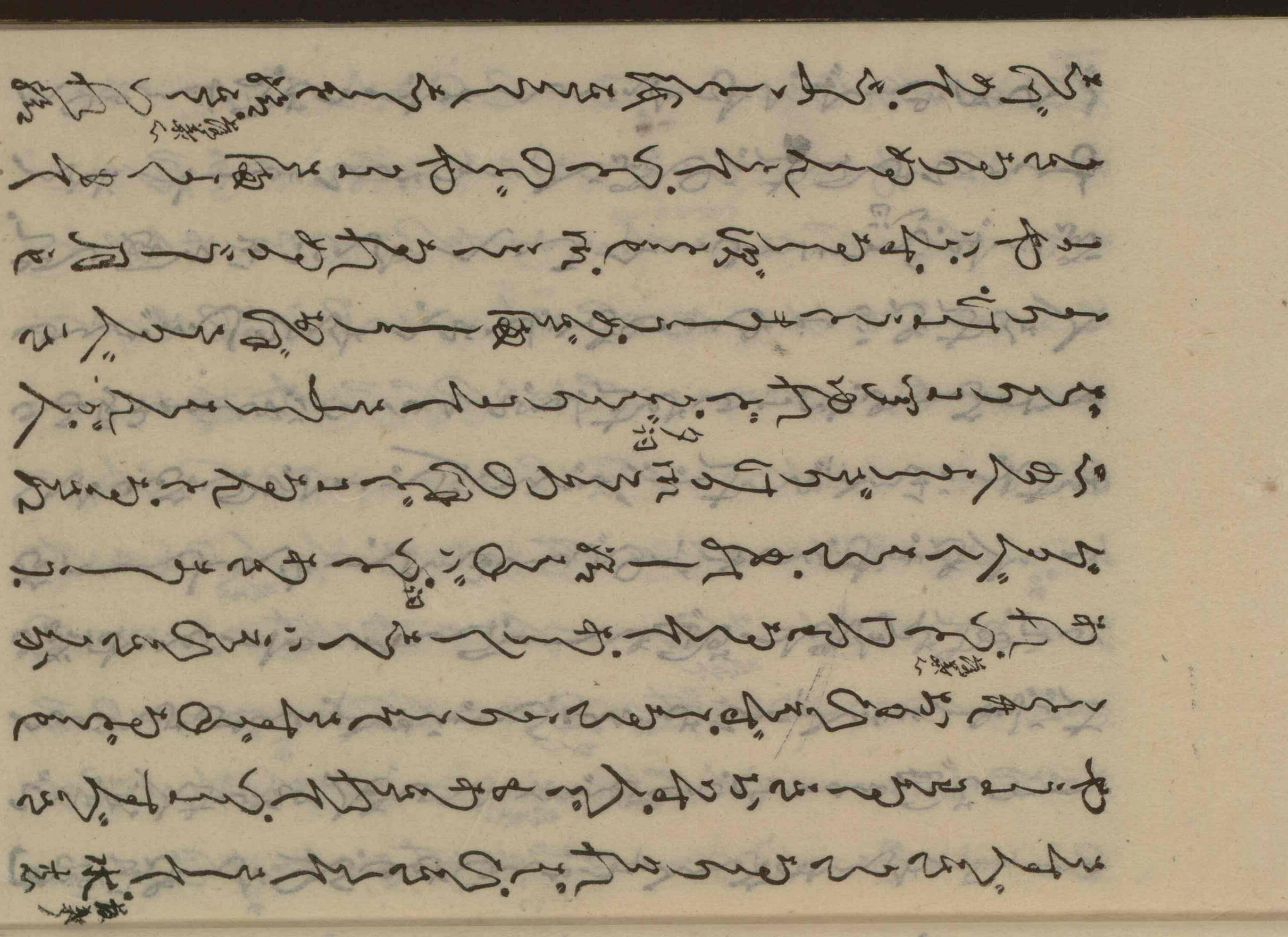
夕　山里の哀をそふる夕ぐれはまちいぞん花をも
あかさらん花してとちとしくまへば
蓬莱
山ぐ川のまぐさをこあてしる事も心をある
人いとうめずばのこまをしめかれけりひまあぐさあ
つまぬこよくまふくるさわすれもそぬあすかぞくらある
わざくれいるぢいこゝずごろりの庭がさい立とまる
べうもあし深やしまゝも給



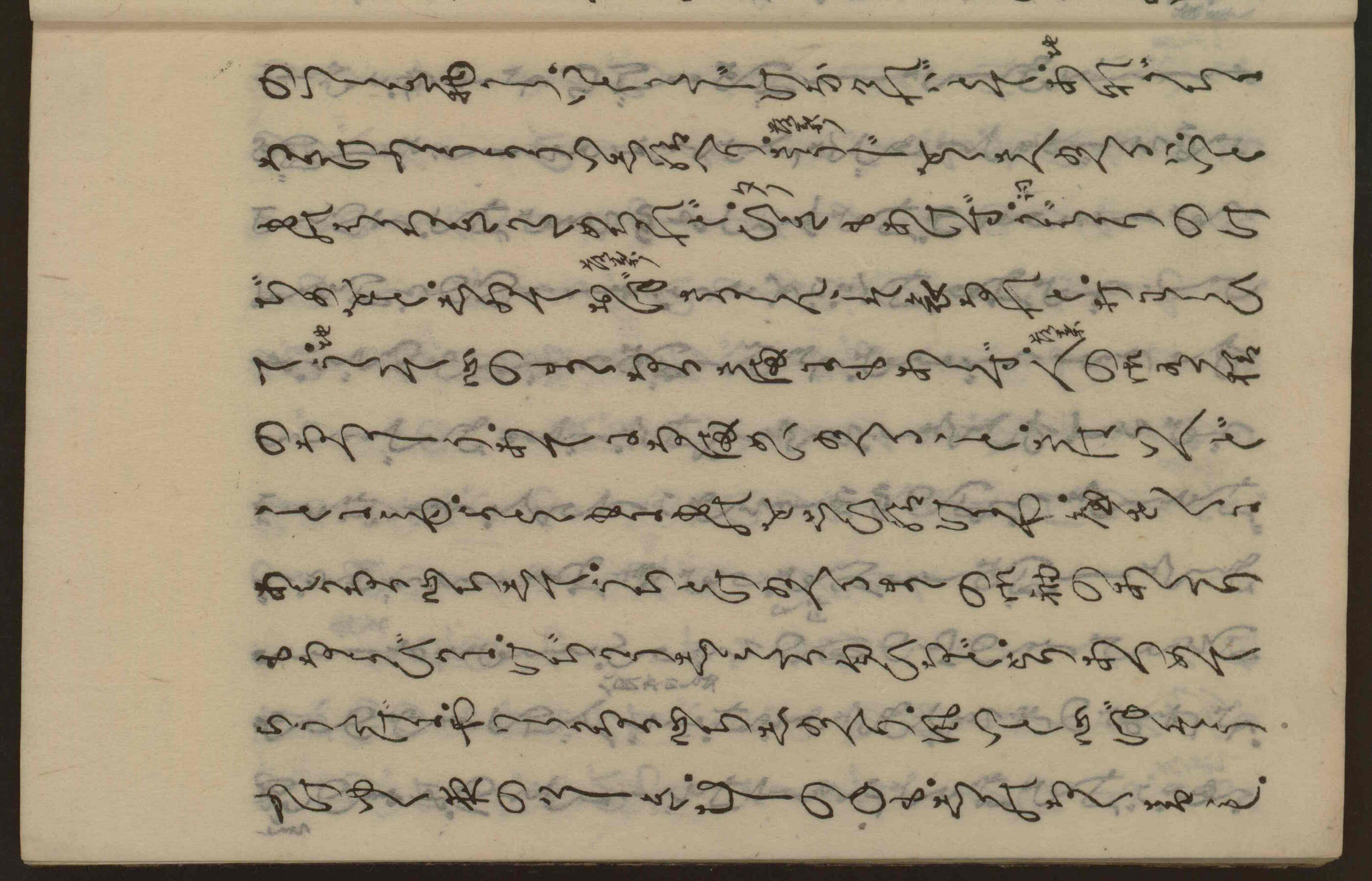


いと面なげなめりと。こゝで今ハ打やもむしん。こゝよひ
このつゝりまとまりて。初夜（そや）のしきてん程にかれ
（タノしまり語ハ面とさして也）
ねたりかたに抱きん。これかれさふしきもよ。隠男（ずいじん）
などのそのこどもハ。（愛岩郡ニあり下略ノ領也）ゝのくざうぢりくらん。
まゝ菓などゝ里うまとて。こゝに人あまるゝ思な
せそ。かうやうの挑（こび）れも。かゝぐしきやうに。人も
とりなすべしとの語。（左近大夫ん）あるやうあるべしと心えて。
うけに面りてこゝちぬ。（夕羽）さてこゝちいと毎どくし
されバ。此つゝりまやどりのおなじうも。これ
こゝのもとにゆりされあるん。（律師ノ事）つぎりのおりし程
までなんと。つれなくのゝふ。（落葉ん）例もかやうにあるぬ





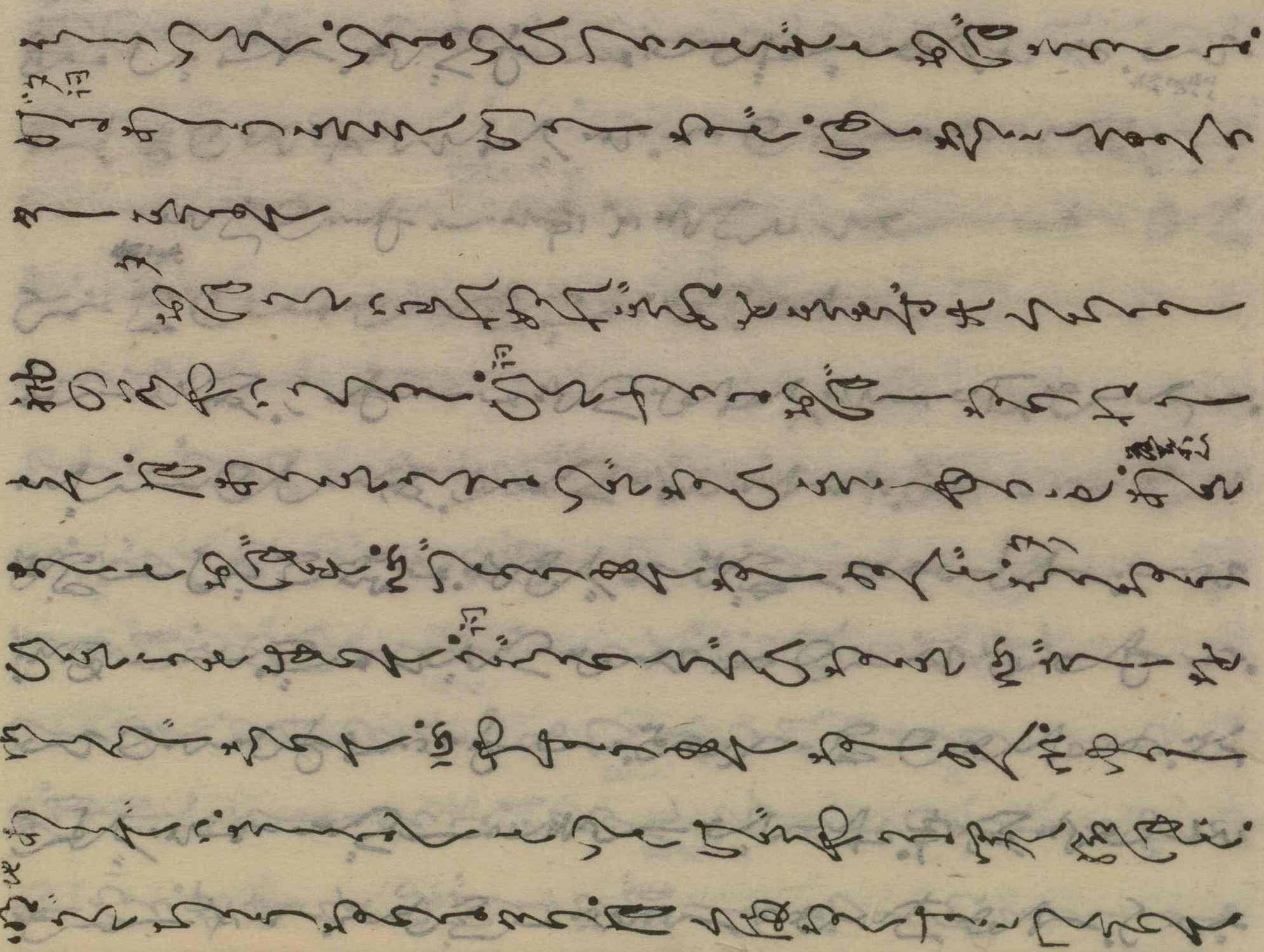
べくもあらず。くやしうくまでとおぼするのこ
やうくなければ。の給ひんこともくまして覚え
給ふず。いと(夕羽)こころうくわかくしきれさ海れ。
人しれぬ心まあまりぬかすさぐしきつこだらり
して待しめ。是よりなれすぎたることはさしまれ心ゆか
されでハあらんどられじいかだりちぐまくだけ待りしひ
まゝへぬぞや。さりしをのづからしきりしを待
らんもれを。しぬておぼめしうけうとうもてなさせ給め
れば。寄しさきんうなさまいぐハをん。こうちなくなく
しとおぼさうともかうなぐくらぬべきうれへをさぐ
くまでしきくを待しんとだりなりいひしらぬれ部色



のつしき抽ゝしいとゝしげかれがとて（地）おれがちは
なさけかうよりいさ給へり（茂素ノ）さうじをさへかへるいと
もれちろきくめなれど（タノ）ひきもあけず（詞）ぐちりのけ
ぢめをとゝしぬて（茂素ノ）おぼさるしんこそ衣なれと打ましひ
て（地）うしそて心のまゝなるさ海ともあらず（茂素）人の山まゝ格
のちつしうおてはなる海めいかへることさはいへど
ことにこゝろよとくもはもれをさひ給けるや屋をくま
あくなる心ちしてうちとけかへるまゝの山袖のあくり
もなよびかにけぢかうしこゝろ匂ひなどとりあつめて
らうしげにやりしかなる心ちしかへり風いと心ぼそう
かけゆく夜のかしきむしのひもしれなく着も

渋の書もひとつまうぐれてえんなる程なれば。今ぬぐ
ありのあそつけんぐま。ねぎめきぬべき光の気色を。
うしもさるぐらいりぐさの自の山のもちうきは
どどめぐさうもれ長なり。ゆ汐ぐうぬぼしきぬ
はる程こそくりていあさう此心のほどきしられ。
うよづゐまできれぐきさうきろやすきなど
もさぐひあらじとぬぼしゆをなまごとまもりや
すきほどのひとこそ。かうをばきれもれなどうち
けひてつれなき心もつふなれ。あまりこよなく
ぬぼしおとしうよ。えるんきづめもつまじき心ち
しゆる世中をむげしきぬぼしきしぬりしも

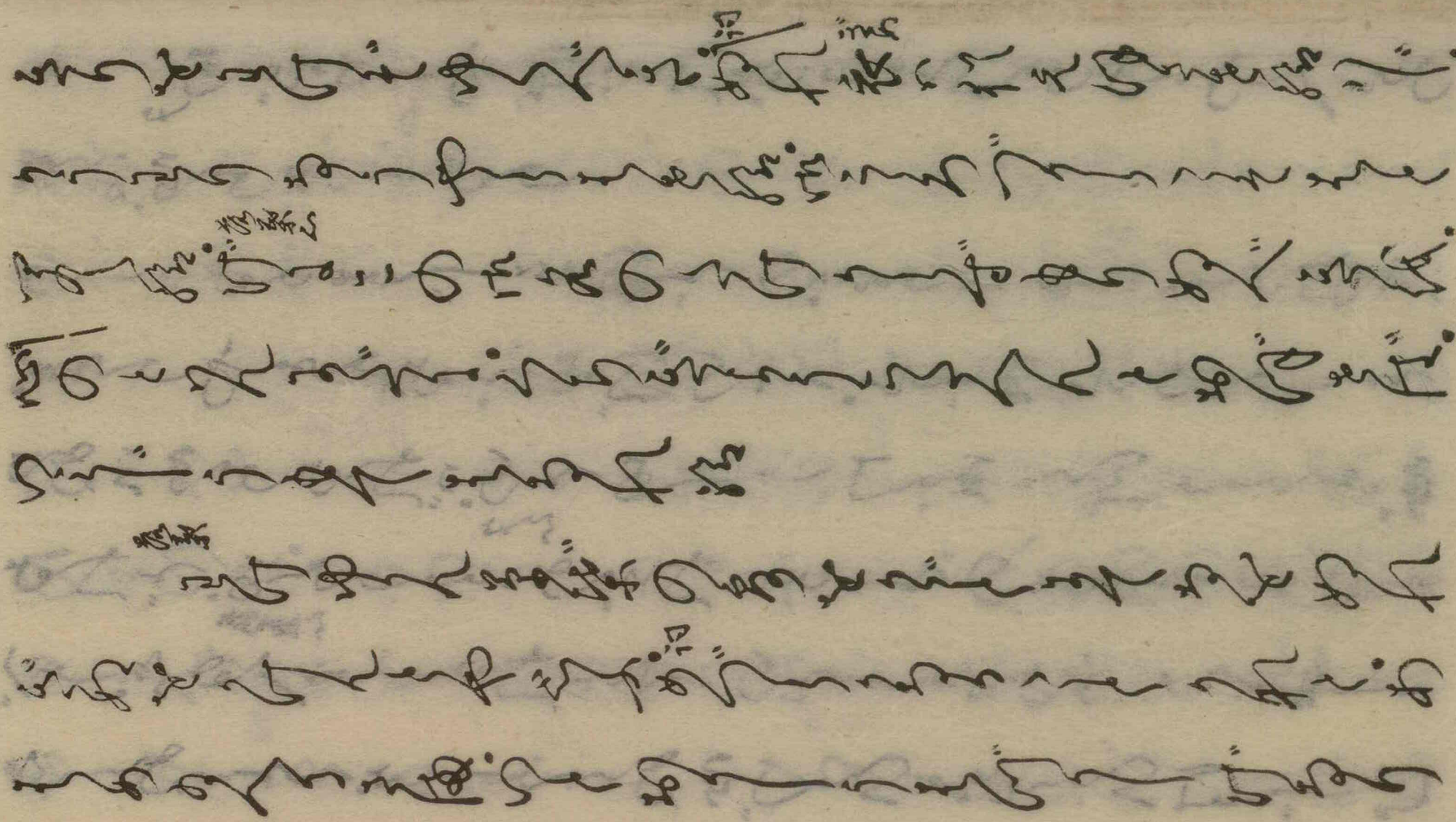
あらじをとよろづよ[illegible]をめられぬて[illegible]
いふべきとまびしうそしめづ寸世後しりうる
りるのころやすさやうよ[illegible]りくほのめ寸を[illegible]
ぶ面しうげよこぐひなき身のうさなりやと
おぼしつゞけ給ふ[illegible]めべくおぼしまふて[illegible]
こづしのつゝ後おもひしろとてもいとかうあさ
ましき後いやうよしひなすべきよかはあんと
いとほのよあられげよなひぬて
[illegible]れのこやうさ世をしれるゝかしまてぬれ
そふ袖の名をくるすべき[illegible]との結ともなさ後[illegible]が
心まつゞけて[illegible]びやうようちずじぬへるもかく

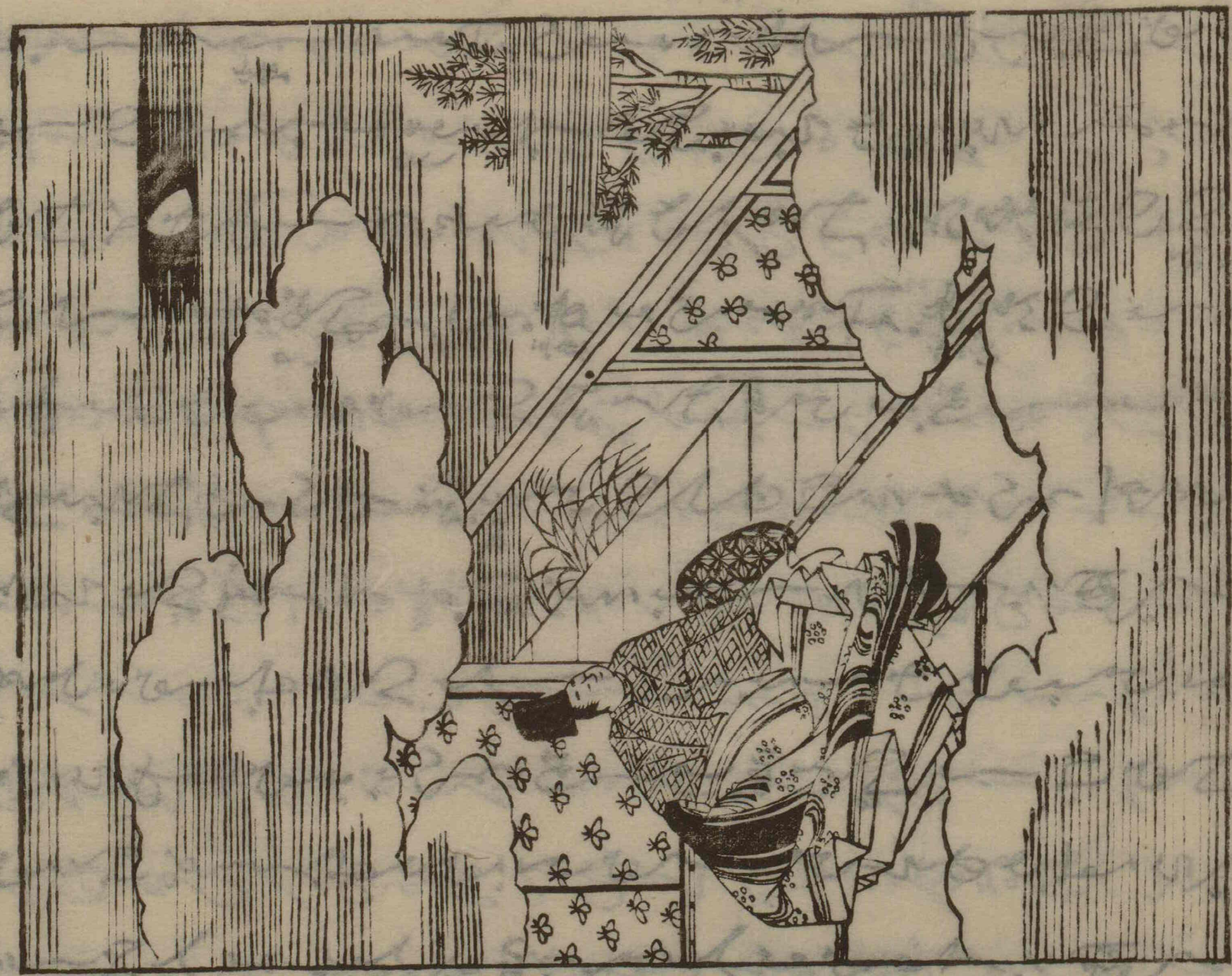


きりまもまぎれずさしいりたり。おきもうかす
ひさしの形はほどもなき心ちすれば。月のほか
むかひたるやうなり。おやもうちしたるて。まぎさう
りしぬへうもてなしなど。いもんなくなまめき
ぬへり。こ[柏]志の所ともすうしきて[タノ]出て。さ海たり
のどやかなる物語をぞきて語。さすがに私[柏ノ事]ゆ
ましかたに笑しおとすなをばうしめしげにうしこ
きて語。所[言葉ん]うろのうちにも。[柏ノ事]れはうらぬなども
まぎをよばざりけるほどなどしられもくれゆし
まけるにをのづしもてなされてこれ語ましを。
それぞまいとめぎ海しさうろの女なりしさ海に。

まして、うわかまじきことよ。よそまきくあたり
まざまあらず。おほ(れ)ほ毎ちどのきくせひ給はんことよ。
なべての世のそしりはさらにもいまず。僥(朱)にもいうま
さしめしおもかされんなど。もなれぬ家りしこの
ゆこころをそしめぐらすよ。いとくらおしう我心
ひとりよ。うつうおもふとも。人の地いひいう
なんん。家もどころのしり給はざんもつこえがま
しうぐこさくなて。こころおさなくとおぼしの給
りんもまびしかれば。おさでぐるいでこまへと。
やらひ家し給よりほかれことなし。(夕詞)おさましや
ことありがたまはけ給ん。おさ家のぬりん所よ。

なほさしがおぼしたれよ。かうをこがましきさ海を
こしまりて。うしうすいやりつとおぼしたれ
れんこそ。おものきけこころもえおさめあふまじう
ぬゝとく。そしかゝぬ心づかひもなゝひけじむ
べう。心ぬへゝしかれとて。いとうきろめくく中と
なれど。ゆくりかまあざれたゝことのまことまなら
ぬれ心ちなれば。いとおしう口がれこげかしも。心
ととりやをんなどおぼいて。こがれたゝめりこと
あらはなるまじきほどの。さりまたちかゝれて
世話。心ちそゝなり
おぼつかや行ぎれ家まきほちつやへたる

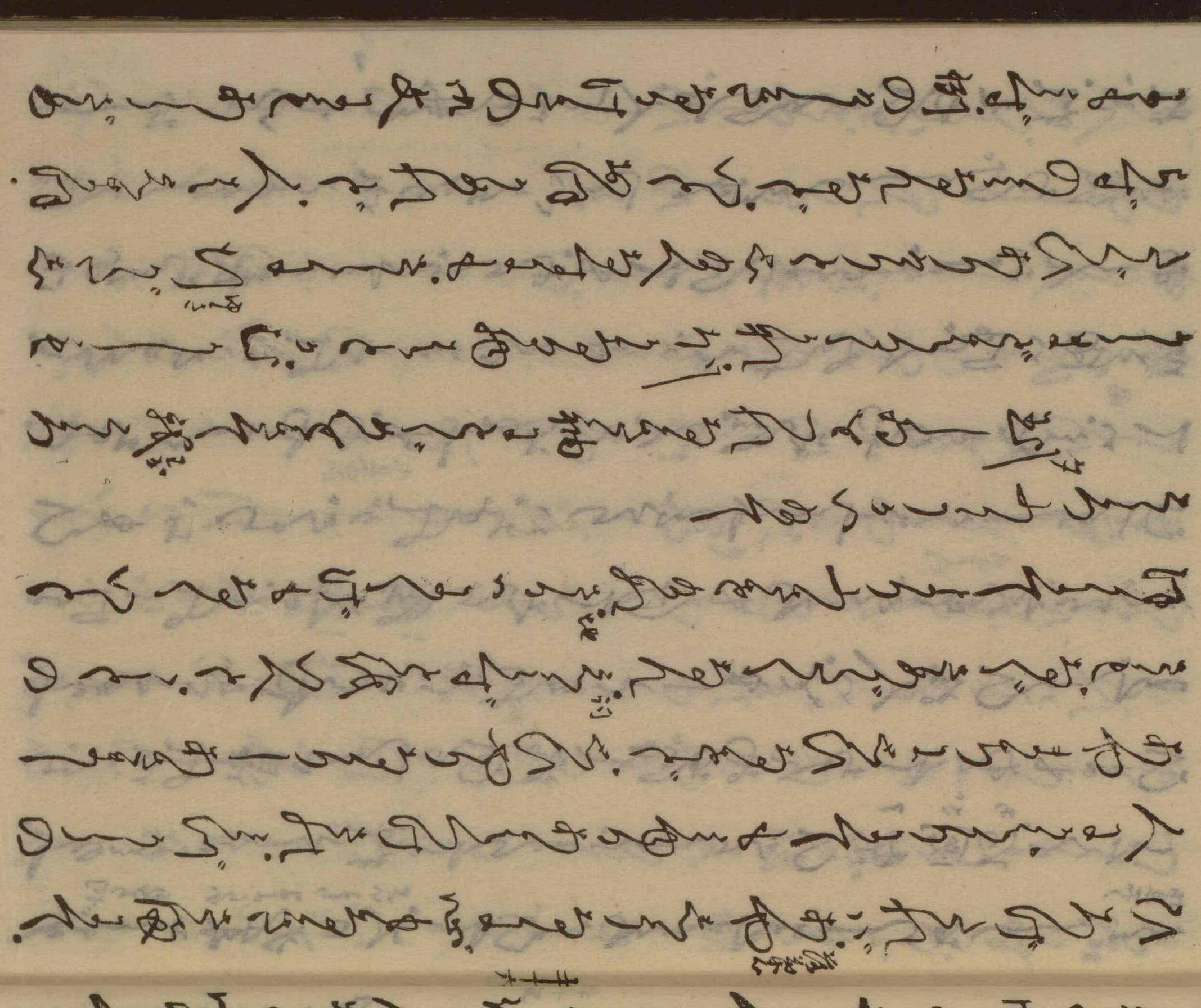


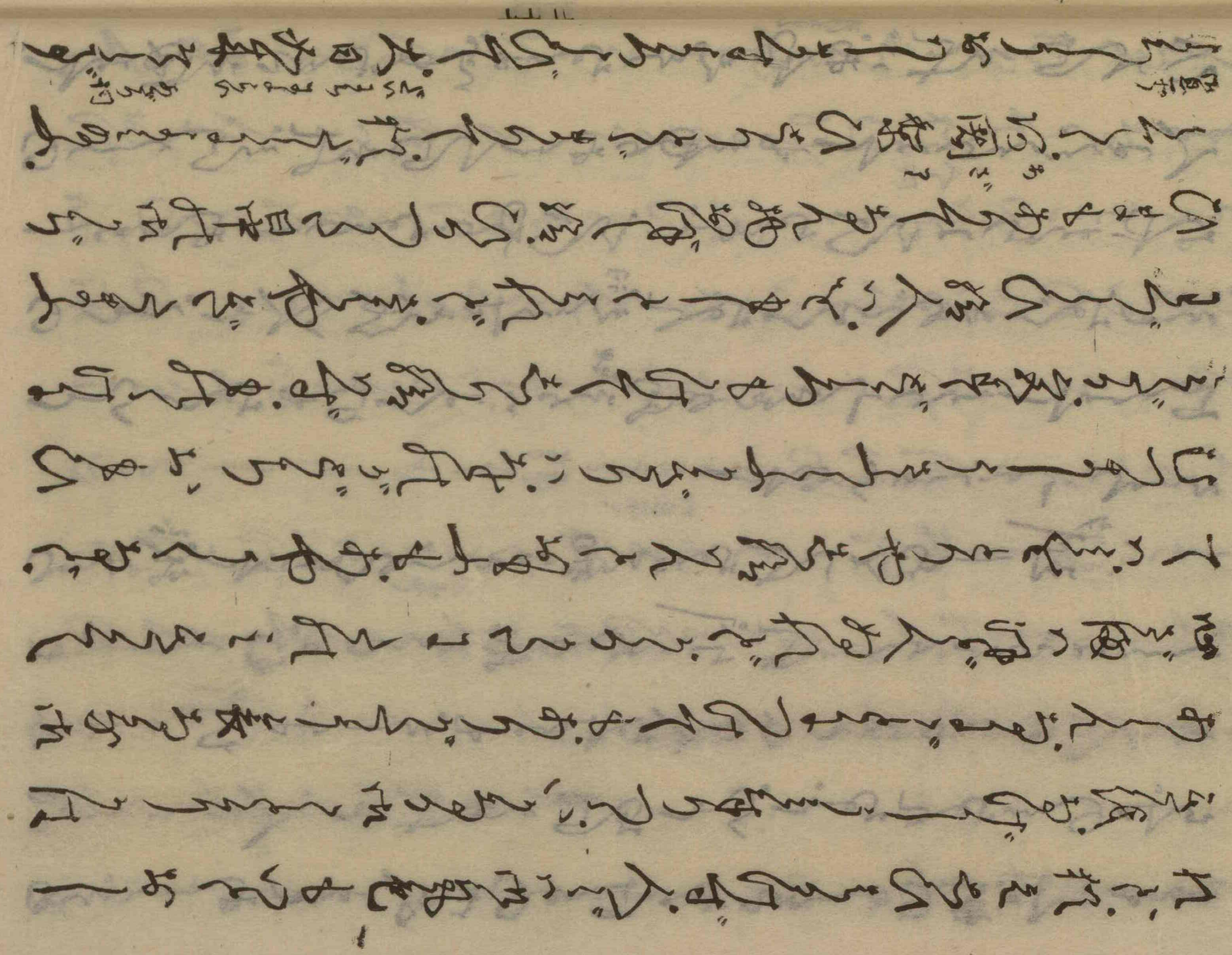


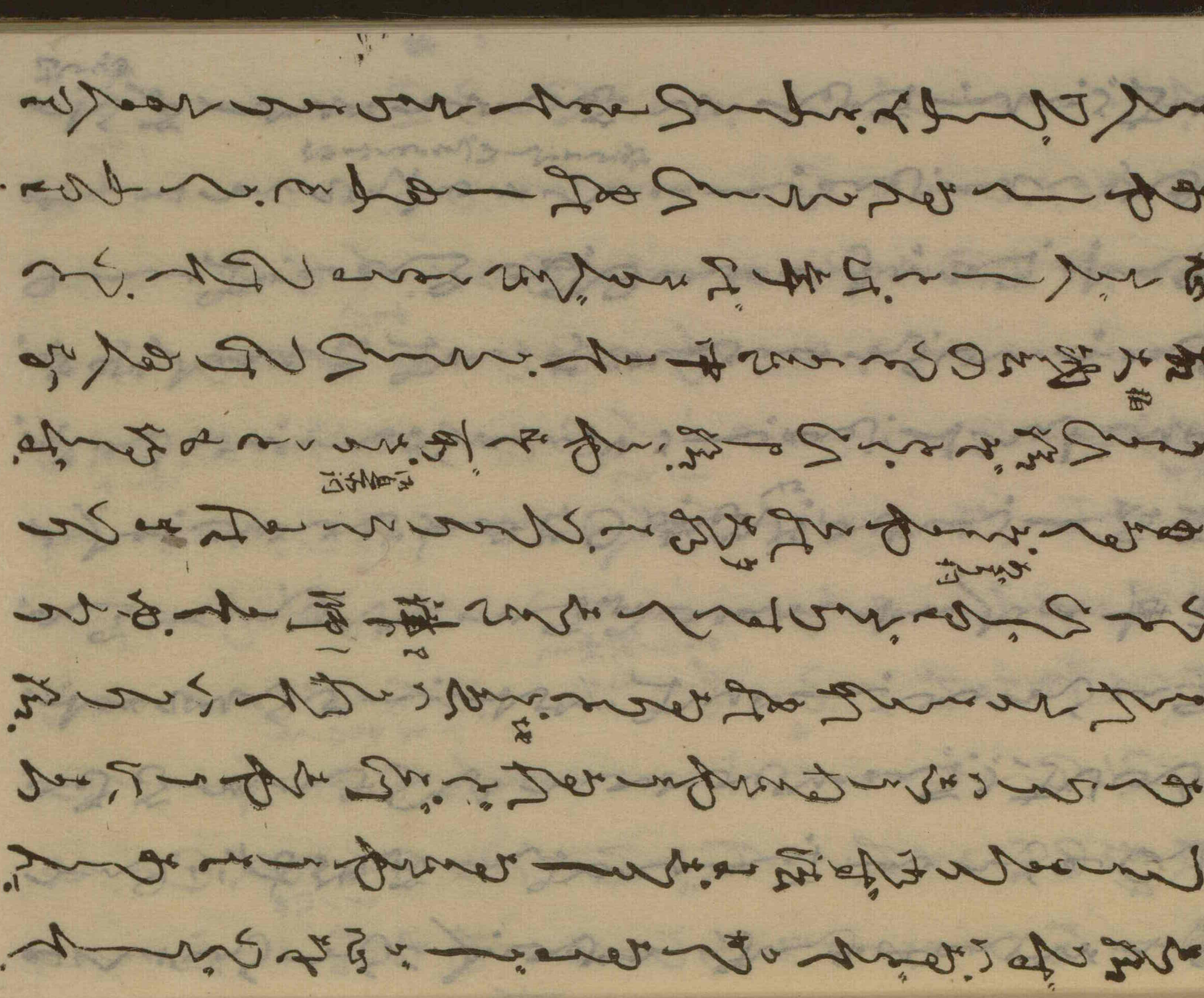
うしろ人はこゝろざしくはゝりてさう㒵ぐは
すさけさましきまゝなりとゝもあるすさぐ
ちうきやうあるかいと切ひしう心ちかげりしげれば
なかゝりずもひ久しいらうしあまりずちり
むかひ見えても後をとがましくやと思ぐる
へまかつれつゝぞ結ばちの○げきもいと云もし。
人やうのおうさるしひ結もぬ心ちにおりしうも心
ばうしまも抑げしつ。三条ま切くをば。女君のうつ
ぬれをおやしとらぬ結めへるれば。六条院のひん
がしのおかさまうでぬ。まるへわさざりもられ
ず。ましてかしこはいつことなしやる。例なれ

れありきまかりと、人ぐいさしめくまぼしうち
やすこまて、れぞぬぎん給つゐに夜冬といと
きよらにまさきまへれば、かうのれうしひ川よりも
とうでゝなり給ひ、れもなど来りて、れ前に来り給。
タ
りしるれ、ふゝなりまへれど、れんじもいれぞ。
まはかるあさましかりしを程、めぐ雨しうもちげ
しうもおぼする心づきなくて、宮も前のまりきく
給へんこともいとしたづしうまゝかうことやと
かけてしり給いざらんよさじなしかしまても
こうけのひ、人のまれいひかれなき世なれば、その
づらきゝあまきてべぐてけるとおぼさんがいと

ふしきれがへておりしまて まことしあきらん。
うしとおぼすともいふがいなきとおぼしめさ(比)やこの
世中とさうゆう中にも家へかへずそもひうし
めへるよりも人はもりさけ代おやまうくすくひ
こそはむし地獄まもあはれどさちる地ばかれぞ。(落葉)
人ごはあるうさはのまこと路てもことしもあ(地獄)
おほなくおほしそぶれんまふさる心ぐし
あだいひおさそいうあんとなどうちこの流
ちうそこのゆうし紙ひきもあけるを路ちる心
まとめくて代(今詞)むげることく きを路わざらんもおば
つかさくワくもなかやうしまぞ路しんなど申して。



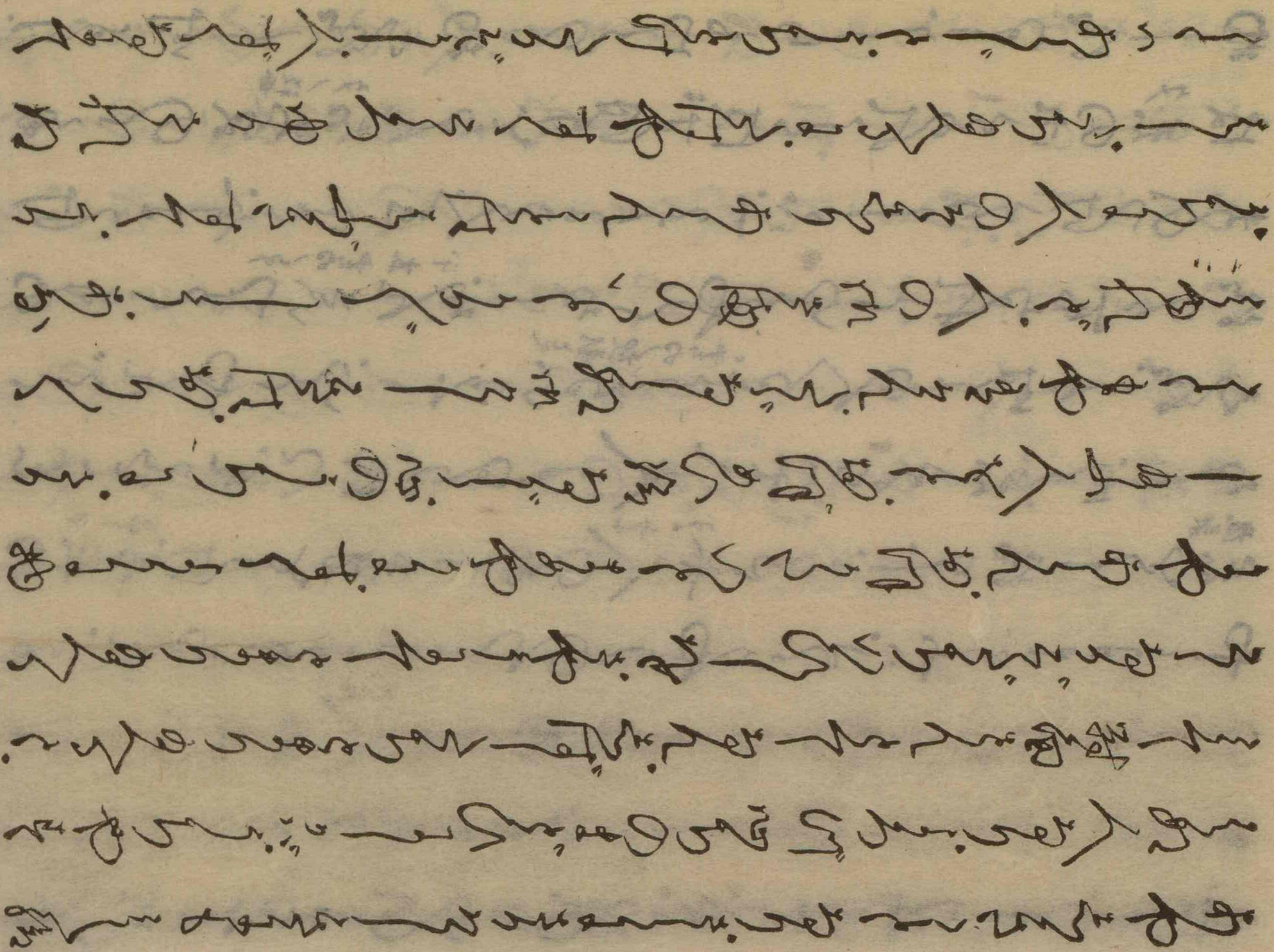




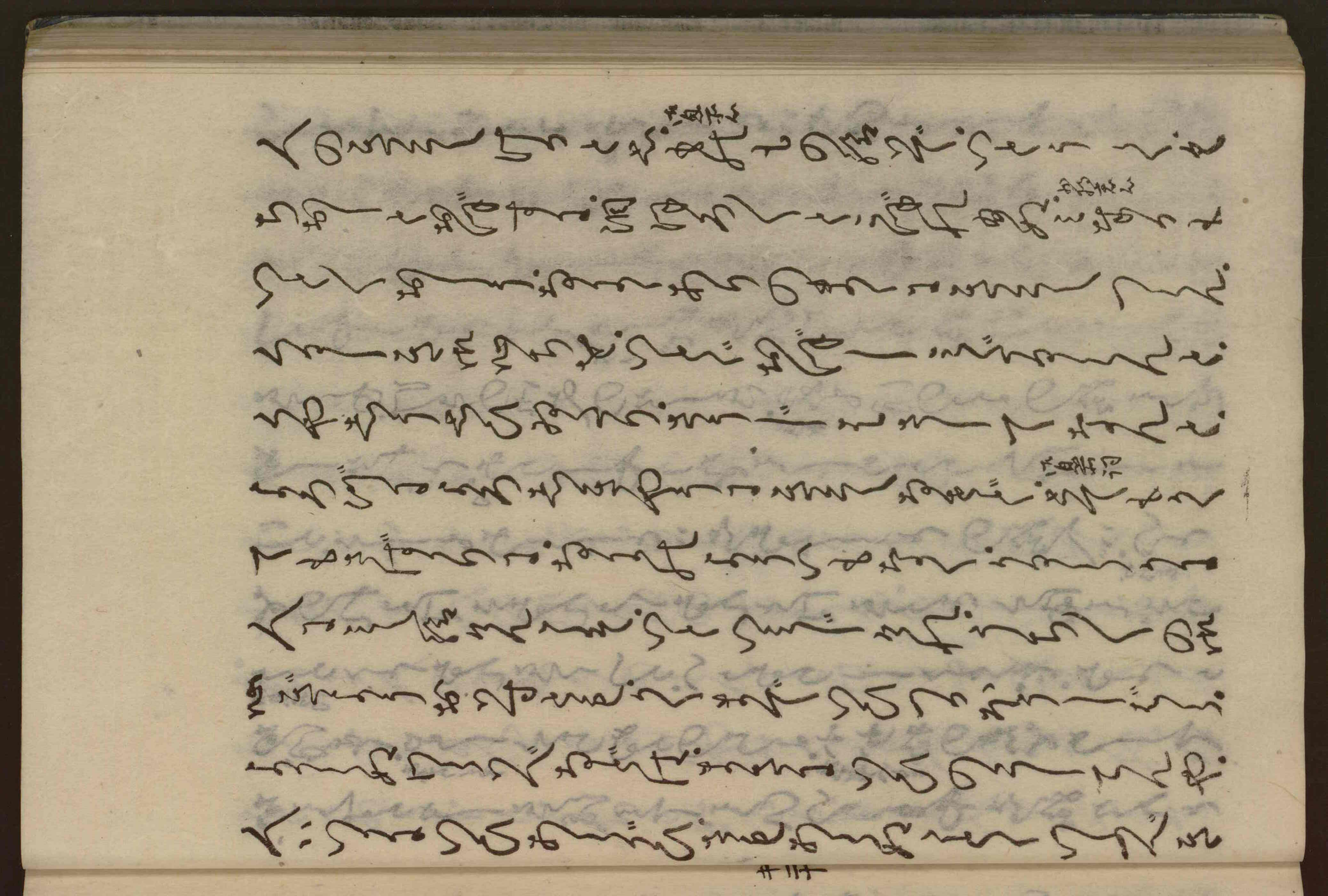
志給ひずはなどてかかくなるまがしが心をいぐしてて
つゝまつる仏ず法よ志りしなるやうもあらん
あくらうはしうねさやうなれどぞ志やうにまゐ
れたるとうれ其なりとぞ也いかれていかり給
いとひじなぐらすくて志き律師まてゆかり
まなくぞとやこれ大弱もいつかりこゝまはまいり
うよひ給ぞとぞひ申給こゝやまで所さうことも給ず
右大納言のいとうき中までかたらひつけぬへな
心ぐべしとぞ年ばさるべきことなつけていと
あやしくなんかたらひ其しぬふもかくふる
ぞへいづしふをとふしひまとてたちよりたまへる

抱し給ふなるがしらもワらゝる抱き給し時より
皮衣(タ)の此ことあれことは、すほうをなんなる(タノ袋母)女のゝ女
まひつけたりしかば、一ゝうまさうべきこと、今まうけ
給ひ事なれど、いとやくなしなん(ゆ表 雲ゐノ事)さいつくまの
志給ふ時まあへるぞうゐ(雲ゐノ親戚とこ)いまて、いとやんごと
なし、ワゝ衣たちは七八人まなり給ぬ、えんこ志
衣(表紙)とし給ひじ、まゝ女人(まゝみん)のあし三男をうけ、長兵(じやうや)の
やこまゝまどふはこゝかやうのつゝまよりなん、さう
いうじきむかひをもうろ抱なり、人(雲ゐ)の此いかなる
むさながおなげきほどしとなりなん、もちしうけひ
なぎとうしらふりて、ふゝいひまいひもなてがいと(此見不詞)

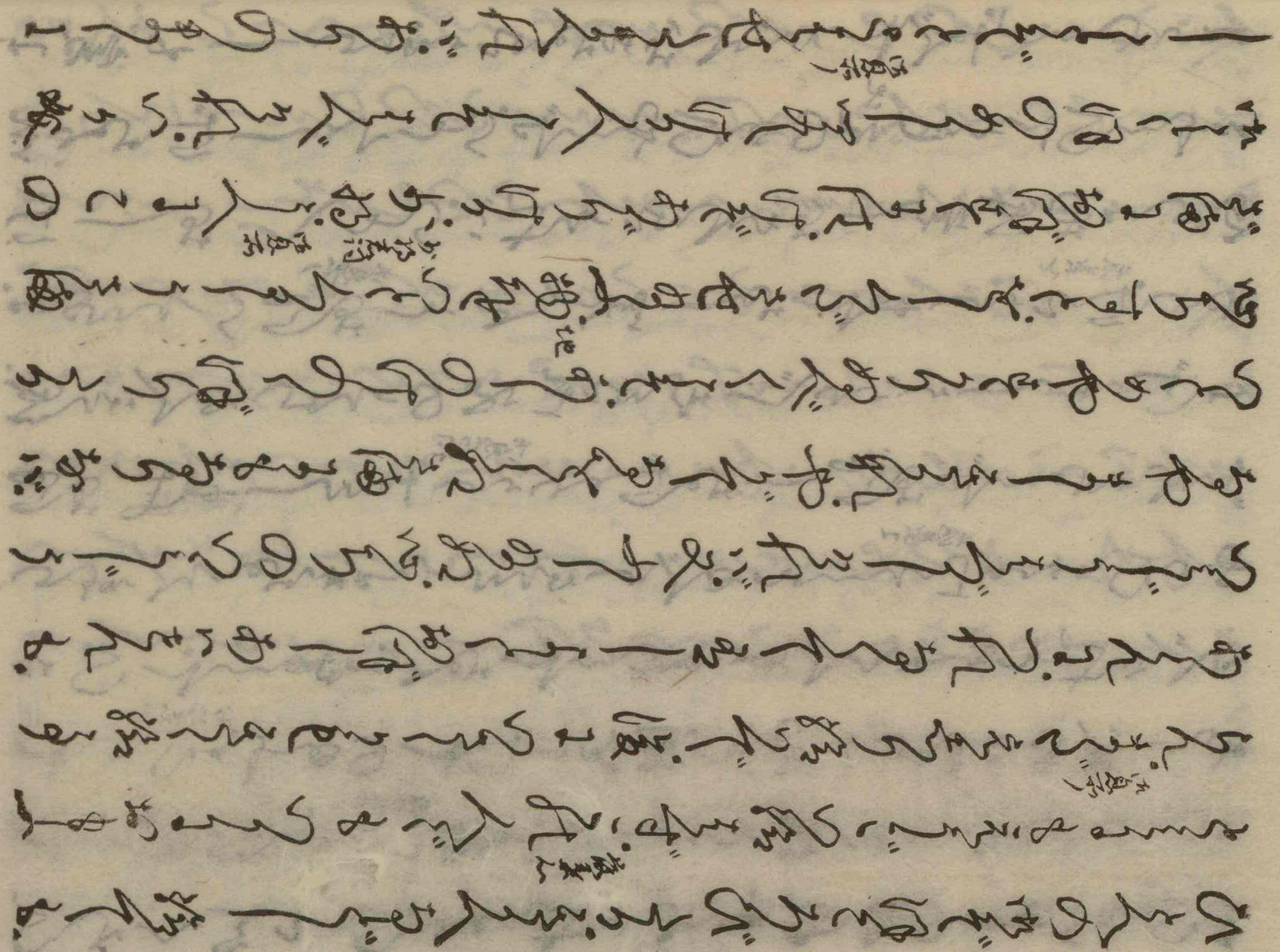
あやまきことなりさしまさりそしまさもこし給
ふぬ人なりよろぶ心ちのまどひましかバうちやせ
こそ對面さんとてなんさぼしこちとまりぬへるこ
そなりぞぞちいひしなさやうまてとまりぬへる
まやあらんおほうくいとまめやうまずくよるは也
しぬふ人をとおほめの給ちなし心のうちまさう
ことまやまさんぞぞなしぬれかしさはおりく
こゝ
ふれど人のれさ夜のいとうぐしうおか
ぶちま人のそまりあらんことはもぶきすてうち
もしぞちぬへるまさはやすくころゆりされぬ
ことはあらじとうちとけこうぞこし人ずくなまて

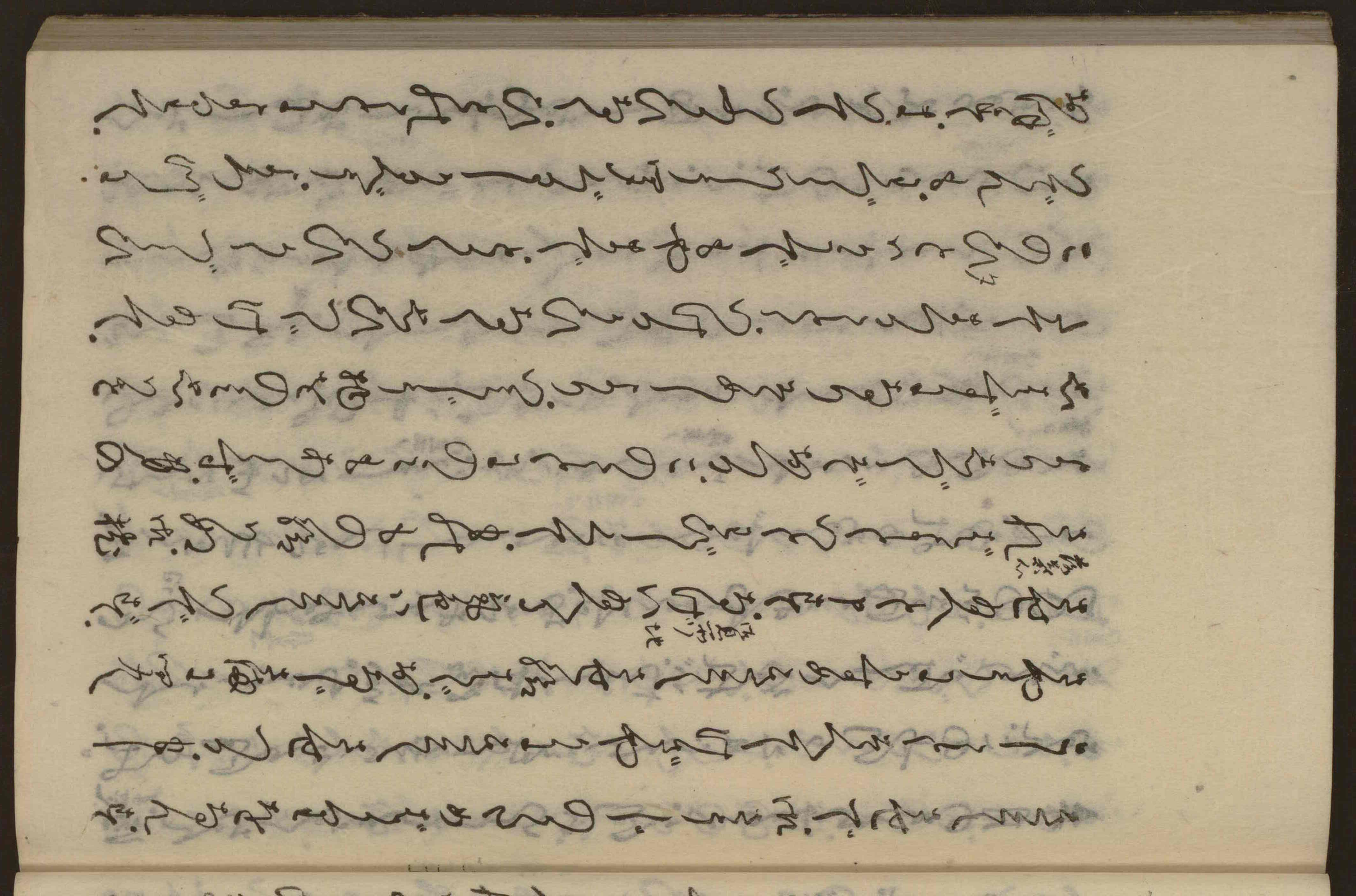


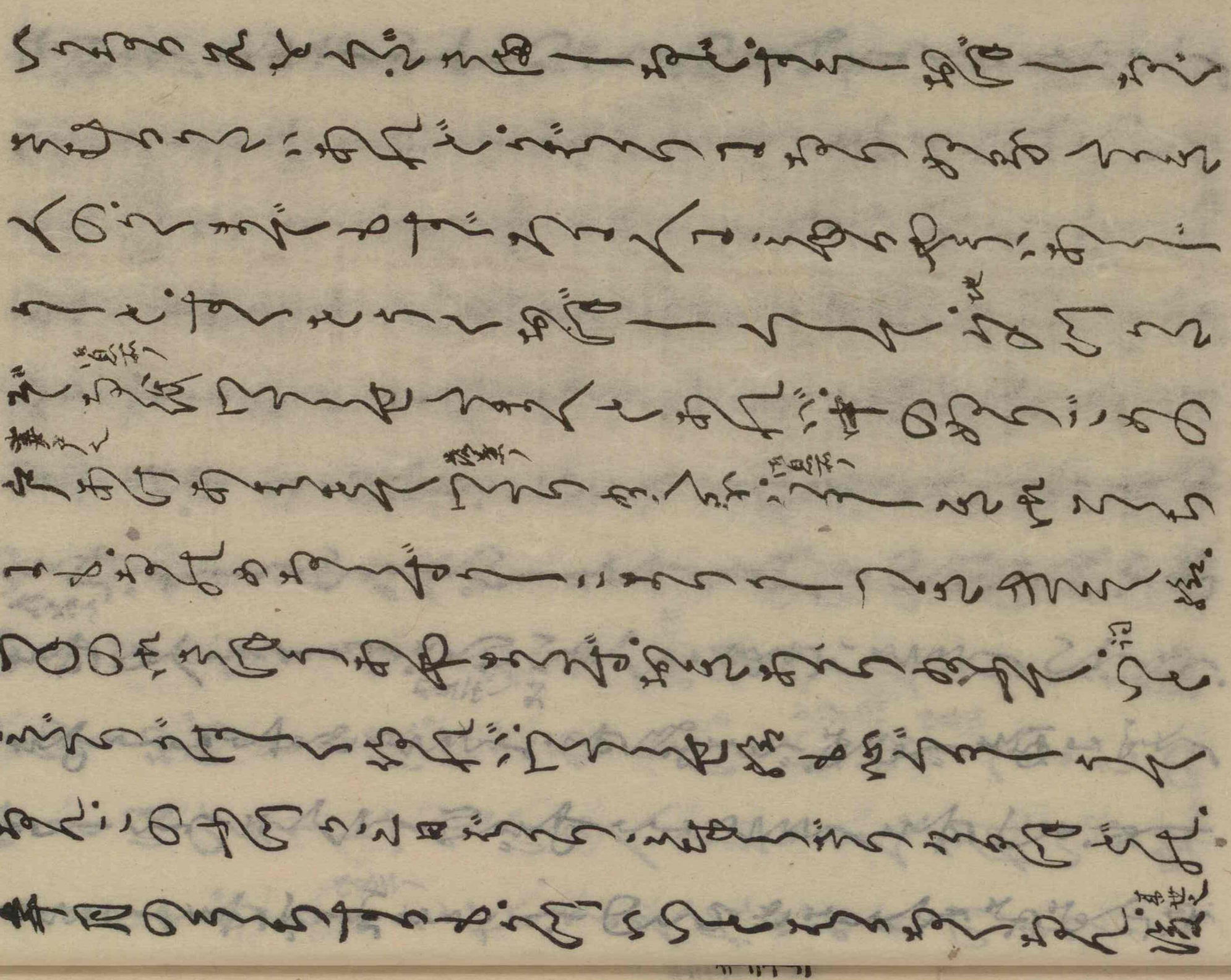
かまくすりかしき紙にて、たひいりもやしき給かんと
おぼせて、あぎりくす まし、こちぬりのちゐ、小かね（後藤人とこ）の君をめして、
（貴重本詞）うりことなんきこつゝいかなりしことぞ、なとゝ
をのれまは、さなんかくなんとはきゝきゝ海をざり
けり、さしもおしじとハしちなぐしとの給へば、いと（お物君ニ）
おしかれど、（詞）ありしやうをたじめよりくはしう
きこゝも、けきの此文のかしき、（後藤）家もほのかの給をせ
つゝやうなど、罪し、（タノ）こしば悪びつゝり給けりこゝろの
うち紙、罪しきしきんとぞかりまや給かん、をぐこう
よういありてなん、おしもまてぐ出給ぬりなを、人ハ
いる罪し給りまか、（此）まし、といしひもよしで、悪びて

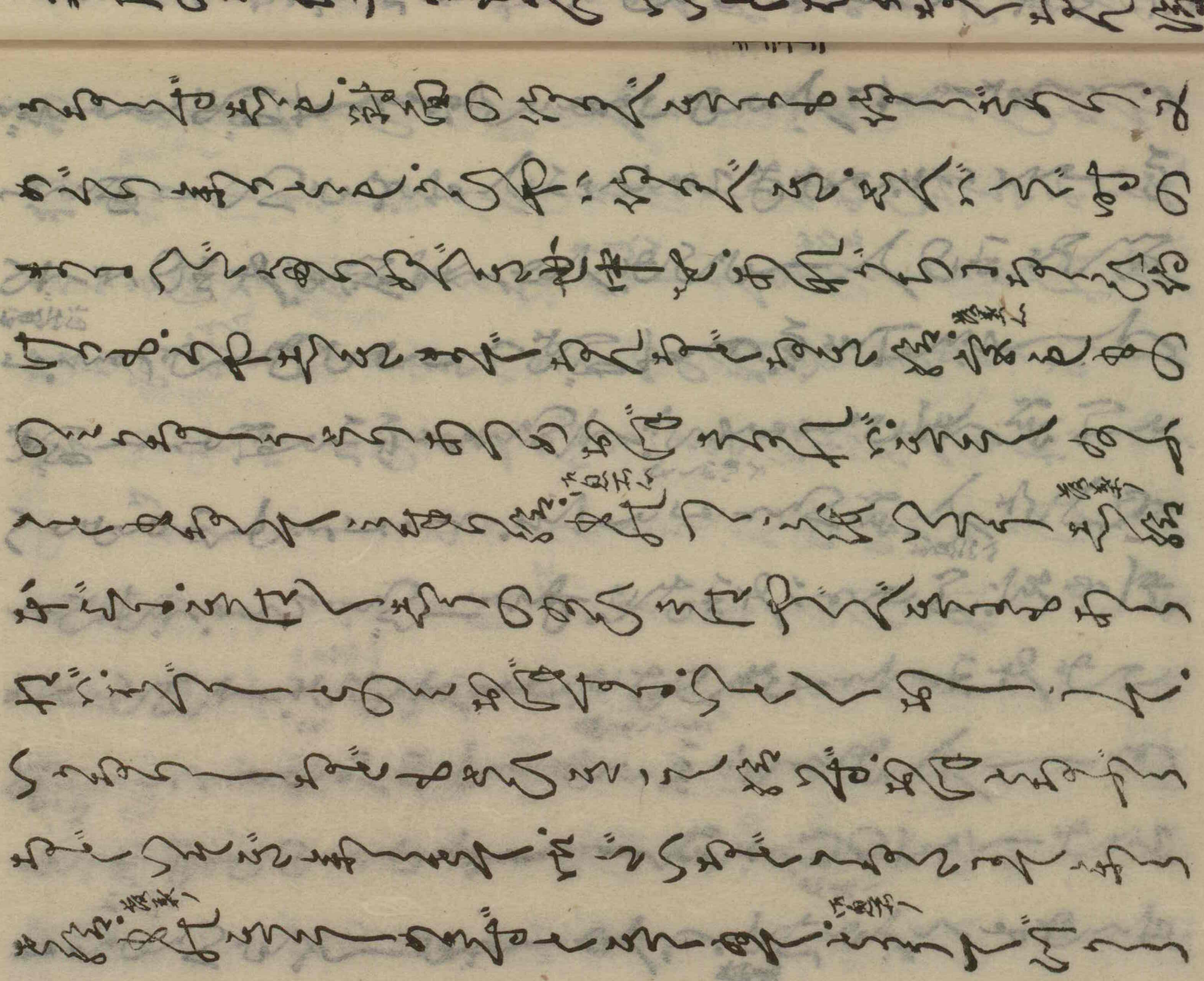


まゐらんずべてこゝろはさながらかぎりしも。霰ま
まうしひてとし地えのなひやらず。いとゞはすげながれ
心ちま。拙消にしおぼろげなれば。いとゞくもしげ
なりけるかうしもてなし男しんとおばいふかま。
よげらさらしうらびこゝ志されし名のうちぬべき紙。
ぞろうなすずおばしあげりう。すこしまかおば
ゆうひまゐま。つくしをぬべうこゝろよぞなすくへまり
らべなれども。うごくべうまあそびであんとまでひさ
志う給ぬゆう心ちすやと涙をうけてのなみ。まつうて
えうなん男しさを給とぞうり男かつくりゆりんとうて。
ねのさいげゞのぬれまろうれくろ。ひさとめくろひ。



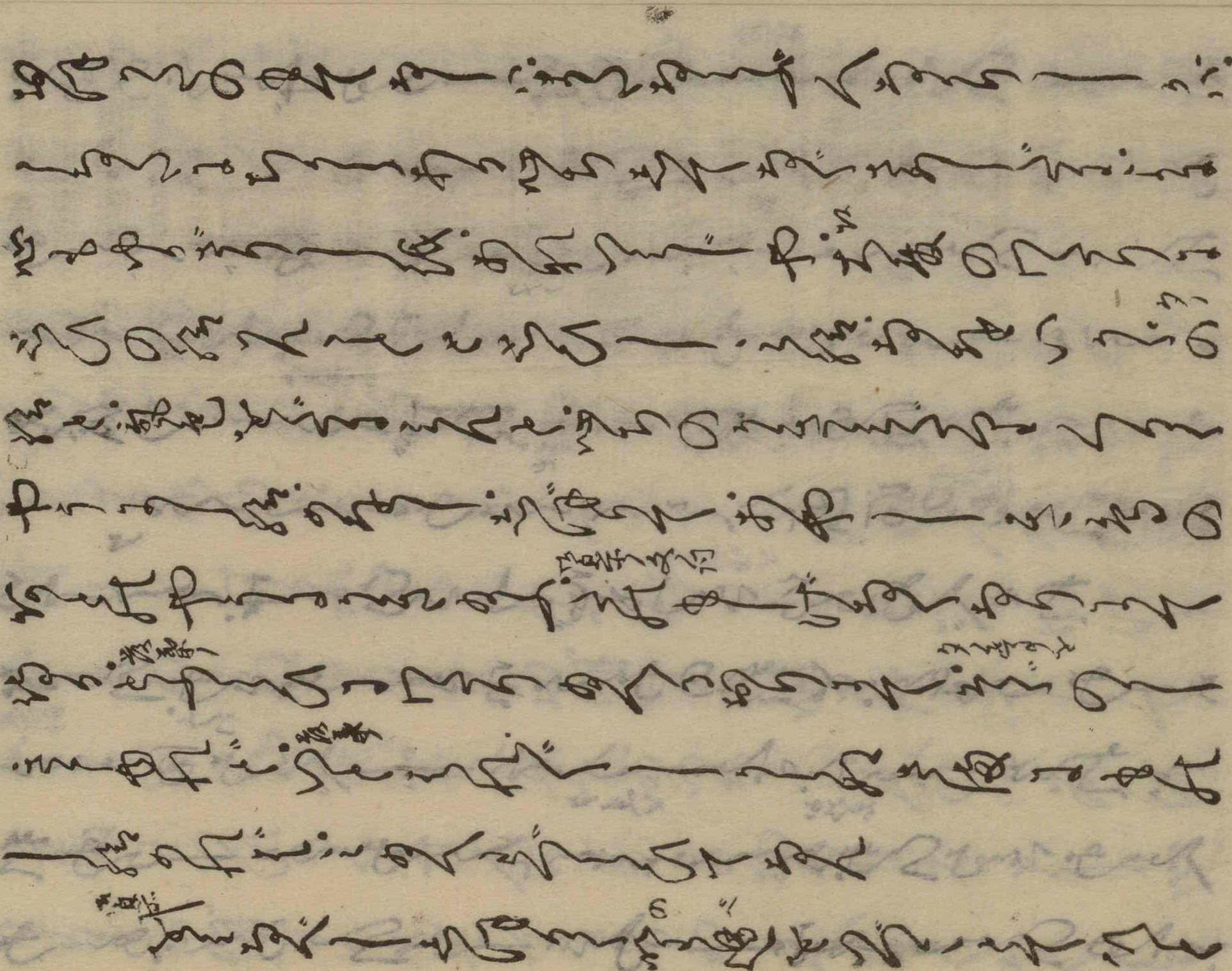






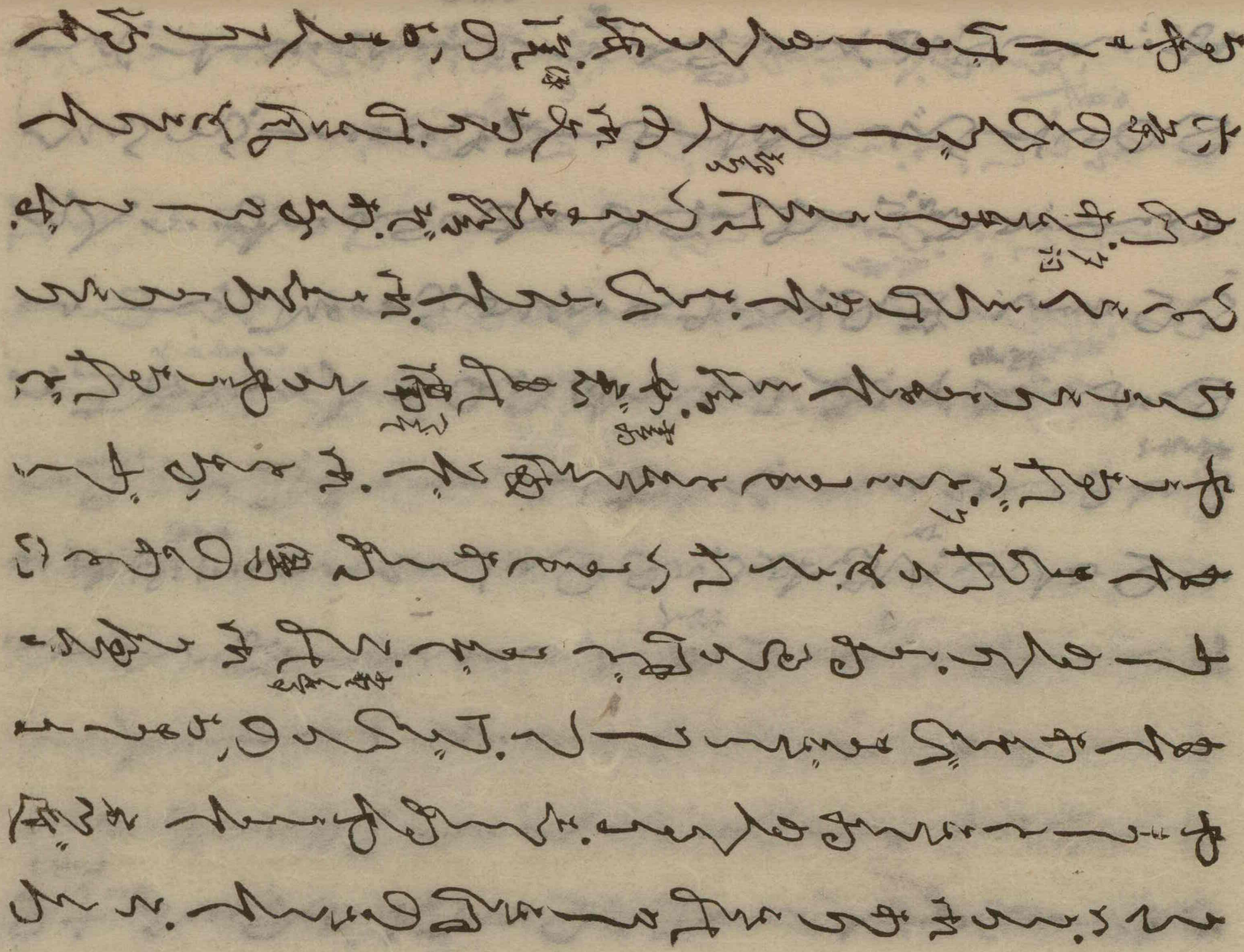
まうちひなをしなどしぬへど。ふれ(落葉)ぬべくもあらず。
たゞれ(賀茂ノ)心ちのよろしうこゝ給ぞ。むすこ(落葉ノ)しあき
給うし(地タ)こより又れふこあり心しらぬ人しを
とりいれて。ちね(タ)ぎよりかね(落葉ノいとこ)の君にとそれ文あり
といふぞ。まるまぐしきや。かね(タ)れ文いとり川。家を取
いかなるれふこまうと。さすがにとひ給。人(賀茂ノ)しれど
おぼしよけるれ心もそひて。しるまち(タノ法師と)男給けり
ま。さもあらぬなりとおぼすも。心さけぎして。
いぞ(賀茂詞)その(れ)文なれ男しぬへ。おいなし。人の(れ)名紙
よさ面にいひなをす人いかゝき抱なり。そこゝり心
ぞよりおぼすとも。しるもちゐる人にすくなくこと

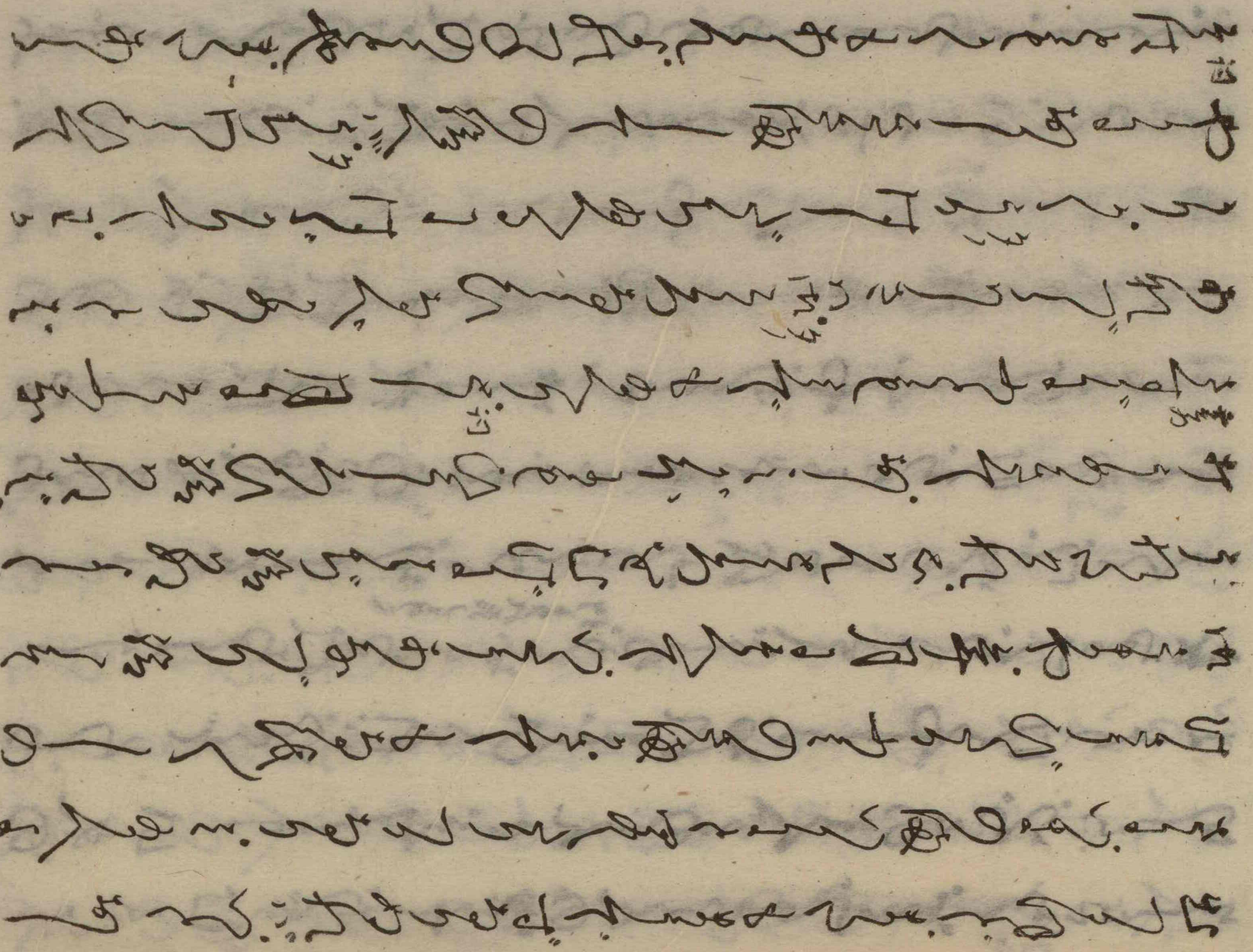
あらめこころうけくしきやうは罪をうらひぬて
れありしまゝなるんこそよろしめおひなきおもん
こゝろさ後なるべしとてかしよす（夕夏と）くらしかれど
なりけ（文ノ行）おさましきれこゝろの程とこゝまりおしれ
いてこそ中々ひとゝ心もつき侍りぬべかれ
（夕）きくうしるあさゝぞこえん山河のながれての
名低つゝまてずは（地）とこと紫もなほれどこゝも
もて給ひず（此息ぬん）この此ゝもけぎやなりそしてもも
あしでめざ後しげる心（タノ）ちよがれまことゝひもれ
なき低いとゝいとじとおぼまかん（柏）の元の此こゝろ
ざ後のもゝぞなりし時いとうしとせひしうど



東だうりの岩をりけんどこゝうきさしてぞし
ひゐりていぐしまて小し給ぬるまゝにいとく
くるしがり給ひもれしけのこゝめけるまやと人ぐ
いひさはぐ例のがんあるうぎりいとさはがしう
のたゞ家をば狂ひてゝせ給ひと人ぐ字ゆれど
此月のうきまゝにとくれ事しじとぬげをば何と
そひ申へり大将殿はこのひるつゝより三条殿に
おりしまけるこゝよひ立へりまうで給ふんり
ことしもをがみにまゐぐさまさゝぐらしうんし
ちどわくじまていとちかくとしばのうろもと
ちきこゝろもちへにもれたひかれてちげき給ふ小の

うたいぐられありきれけしきほのさくて、ぐらろ
やましとさくねぬへるまゝ、志しぬやうまて 元遅
もてあそびまぎらりつゝ、げぐひらのおましま
かしぬへりぐらねゐらほどまぞ、これ（重ノ長ヲ）れ、ゆ風ま
もてまゐれるせうくれいまもあしぬ 鳥のあとの
やうなれば、とこ（タ）ともとさ夜ぞ、れとなぶし
ちうとりよもてこ給、如（雲ぬ）ぞ、もれ偏（へぐて）うやうなれど
いとくしけなてぐらひよりて、れうしろよりとり
ぬれ、おさましうらはいるまし給ぞ、おなかしぬ
六条のひんぐしのうへ（おちる）の、れ文なり、けさ風とうて
なやましげましぬへる紙、俣（係）のおまへりゆて

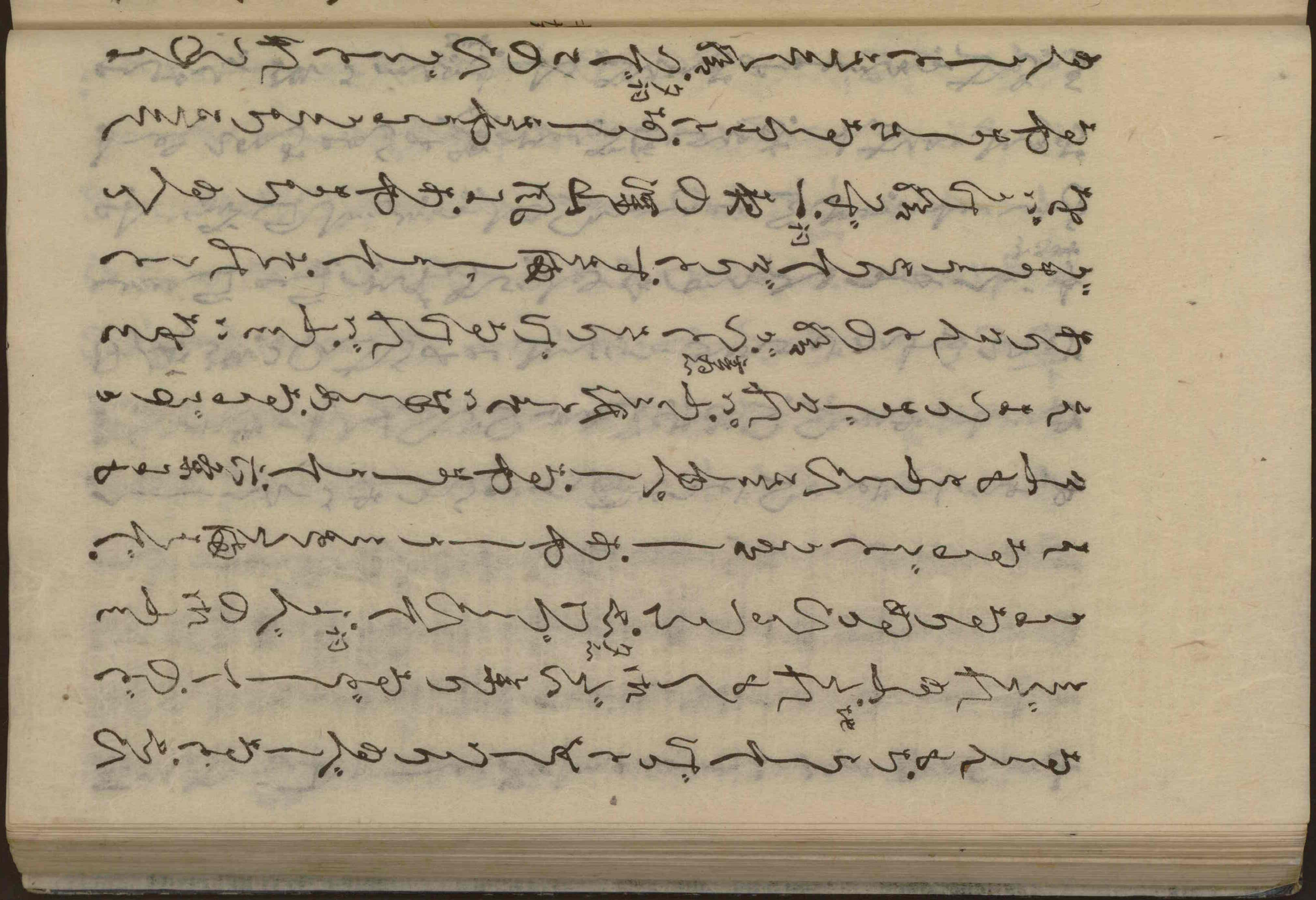




夕べだにいとゞほのひやゝまちちワしひて地のもん
たんしさつろりむのよほどかりぬる人ゝしや
いといまあしくありてはれるひ気色のすゞまじ
さもごろあるしかずあらまけろしとあれがいとあん
なりしゝかねてよりありし給ひでとうこち
給もよくまおしらずいたうまとおぼそぞりはゝ
行すうころもんづいとうそあれころの御かな
あらしずあれこそしとすゝ人ぞおゝべき、おや
しうまとちまろとゝゆゝさぬぞうしおぼえれ
みどりの袖のあづりおほづうしこゝとつけて
まてあしまんとさつやまあつまや、なめく こさく

まくはことぐもほのめくめり。おいなき人（若輩）のれこあ
まもいとおしうなどのたまへど。つねるありんべき
ことにおぼせばことるあらがなず。大輔（雲ゐノあれと）のめれと
いとうしとなくて。もれもきくしず。とくいひ
しろひて。このれかしこいひきくし給つれば。せあ
てもあ（求）さりそしで。つれなくおほとれごもりぬれば。
むしきしるそ。いでとりてしがれとこやまぎの
れ文なめりなるごとありつゝんとめもおいぬ。心
かしなへり。如（雲ゐ）君の。こまへるまよべのおましの
しるなどさりけるてさぐりなへどなしかくし
なへしんほどもなければいとうろやましうて。

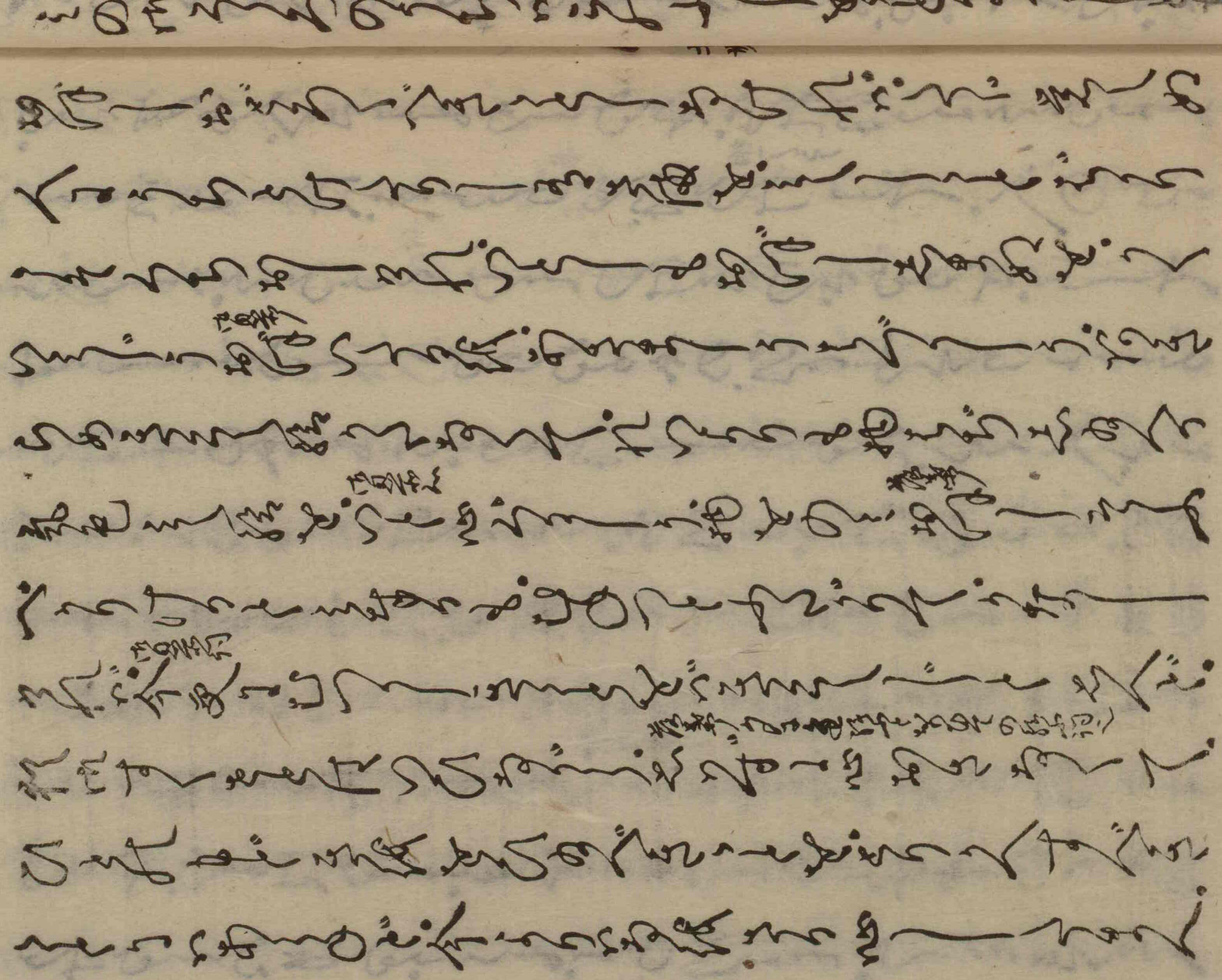
明ぬれどとこゝもおき給りず。かぎこゝに君ぐうちは
おどろかされて。ねざり出給まぞ。我(タ)もいまおきぬふ
やうにて。よろづまうぐひぬへどえこゝろけ給もず
女(書ぬん)いかくもとめんともしぬへらぬをぞ。げまけさう
なきけふこなりなりと。こゝろまもいれ日が。君遅の
あまてあそび。ひねなりひろひすへてあそび給。
文よこてなくひなどさ海ぐまいとあはしく。
ちいさ紀ちごもひかりひきしろへがとりしふこ
のともも出給ず。おとゝ(タん)はことるもおぼし給
もずかしこまさく罪をんとおぼすり。よべ志れ。
ふこのさ海もえてしかまこず收ましうば。こぬさ海

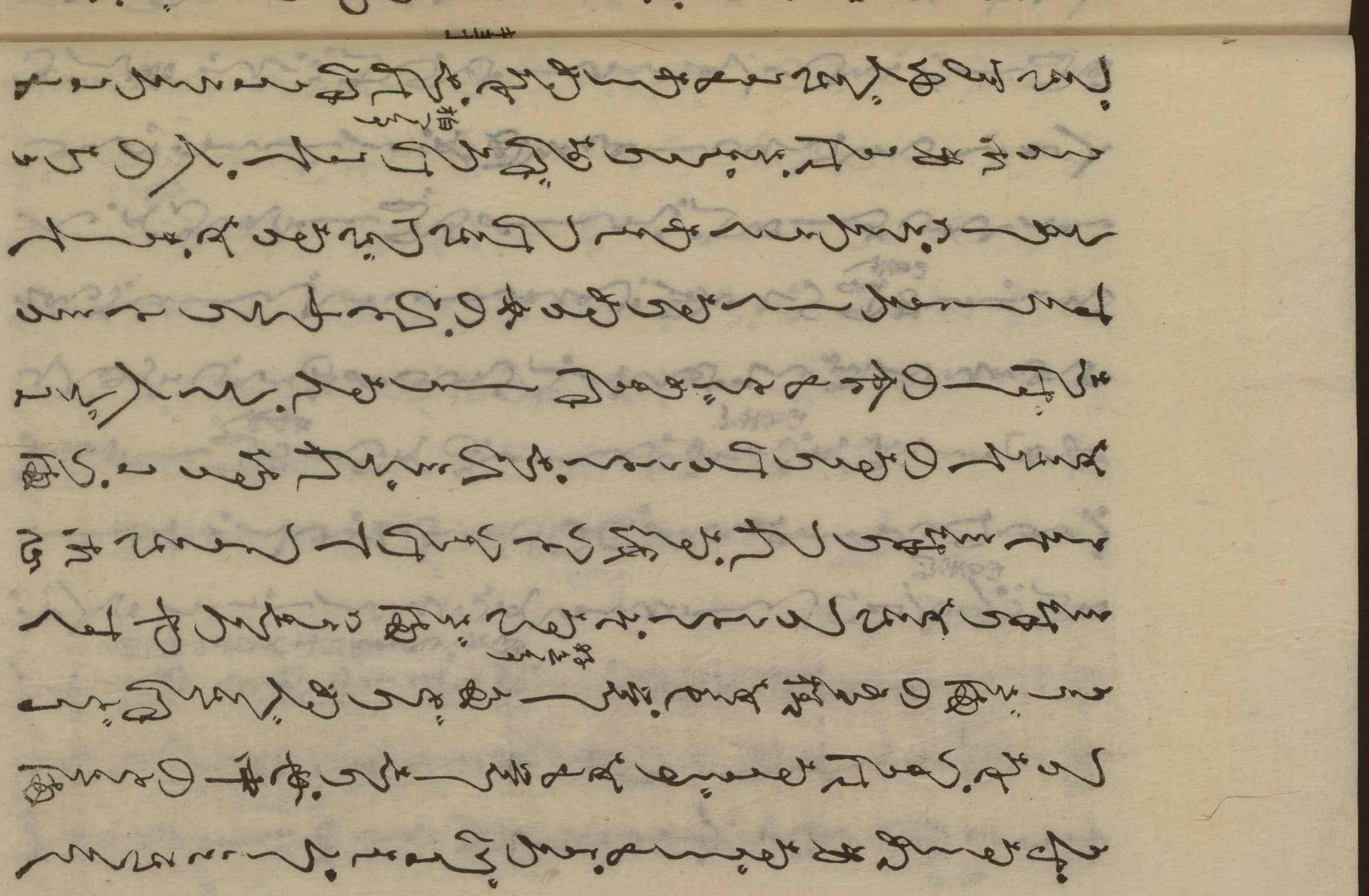


の給ひおなるのおしきやうかあり世人にあずらん
給ひて中くもづしかれどの如所たちをかけた
おやしきまめざ面をかくの給ひ給ひしむらんもれ
ととらはかれどとまいひるしてその文よいげらと
のたまへどどみ（雲ぬ）にもひき出給ひぬ程に粗（タ）抱従なと
まてしばしかしぬへる程に薯にかりひぐらしの
こゑりおどろきて山（ん）のかげ（光ノ影）いかりきりかた
がりぬらんおきましやかふこれ此也るすをぐる
といとおしうてらぐしたしぎがほりすぐ
をしすりていまなしてしまうとりあきんとおがめ
おひすりおましれおくのすてしあがりたる玉を心とる

ひきあげぬへれば、これはさしはさこぬへるなりけりと、
断しうもおこゞましうもおぼゆるにうち思ふて三給
はかう心ぐるしきことなんきけるむすつぶれて一夜の
ことは心ありてきゝ給けるとおぼすまいとおしう心
ぐるしうよべぐるいつはせひあし給けんかふも今
まで山三代ぐるといたんかたなくおぼすいとくるし
げまいふひなくうさまぎらしぬへるさ面まで、お
ぼろけるさあまりてやがくうさぬへつゝんづれか
くてこゝろひのあけつゝんといふべきかたのなければ、
書
女君ぞいとつゝう心うさすゞろまかくあぐへくまで、
いぐ　けぐるりぞやとゞさ面ぐ一身もつゝくすべ

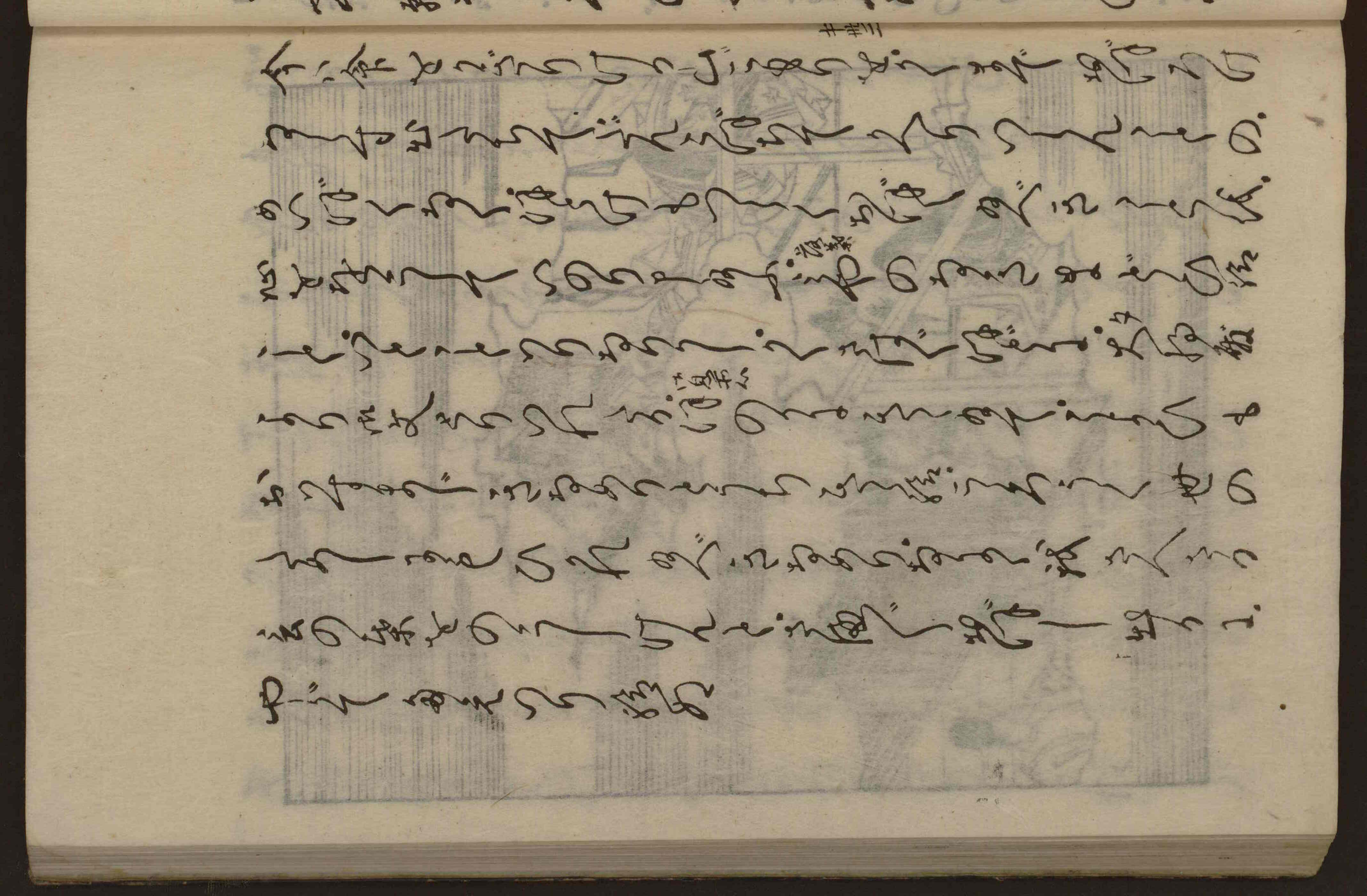
てなきぬべきこゝちしこまふやがていで
こちら海もんとするをこゝろやすく海いめを
あらぎらんもれからひとをうくの給いうなるん
うん同にもありけるをもしら海さうりおもひ
ゆし給りぐあしからんなる紙ありしと紙こそと
うりしき心に言して まづこの此道を学ぶ如ふいと
めづらしきれふる紙がるぐうれしうる給まこの此
とがめ紙なんいうるきゝしめしくることなりか
秋(タ)の学れ草のちげこはもけしうどうり
ねの拾むすびやもとしおきらめ学れさすうも
あやなけれどよべのつゝかひくやごもりなやと

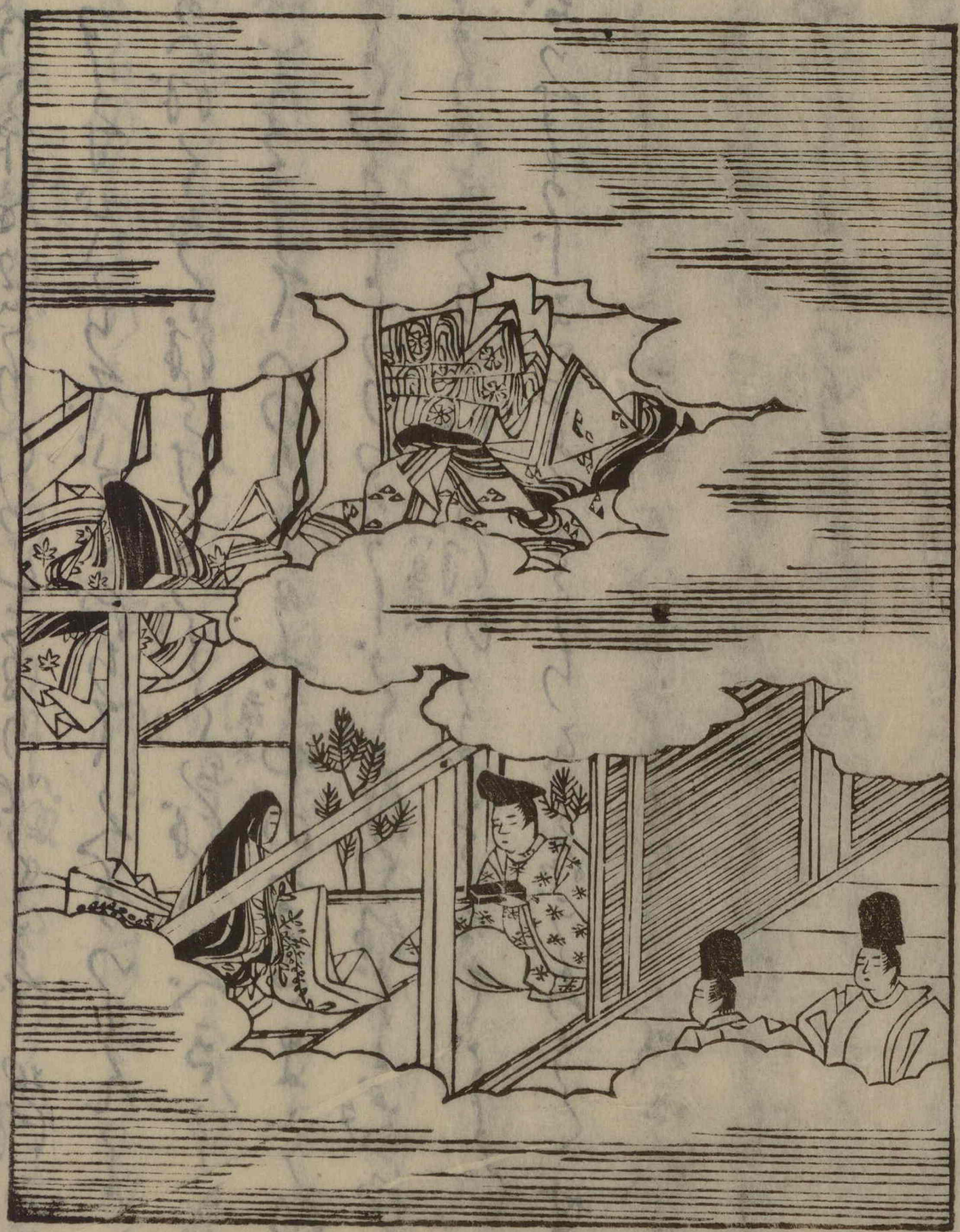


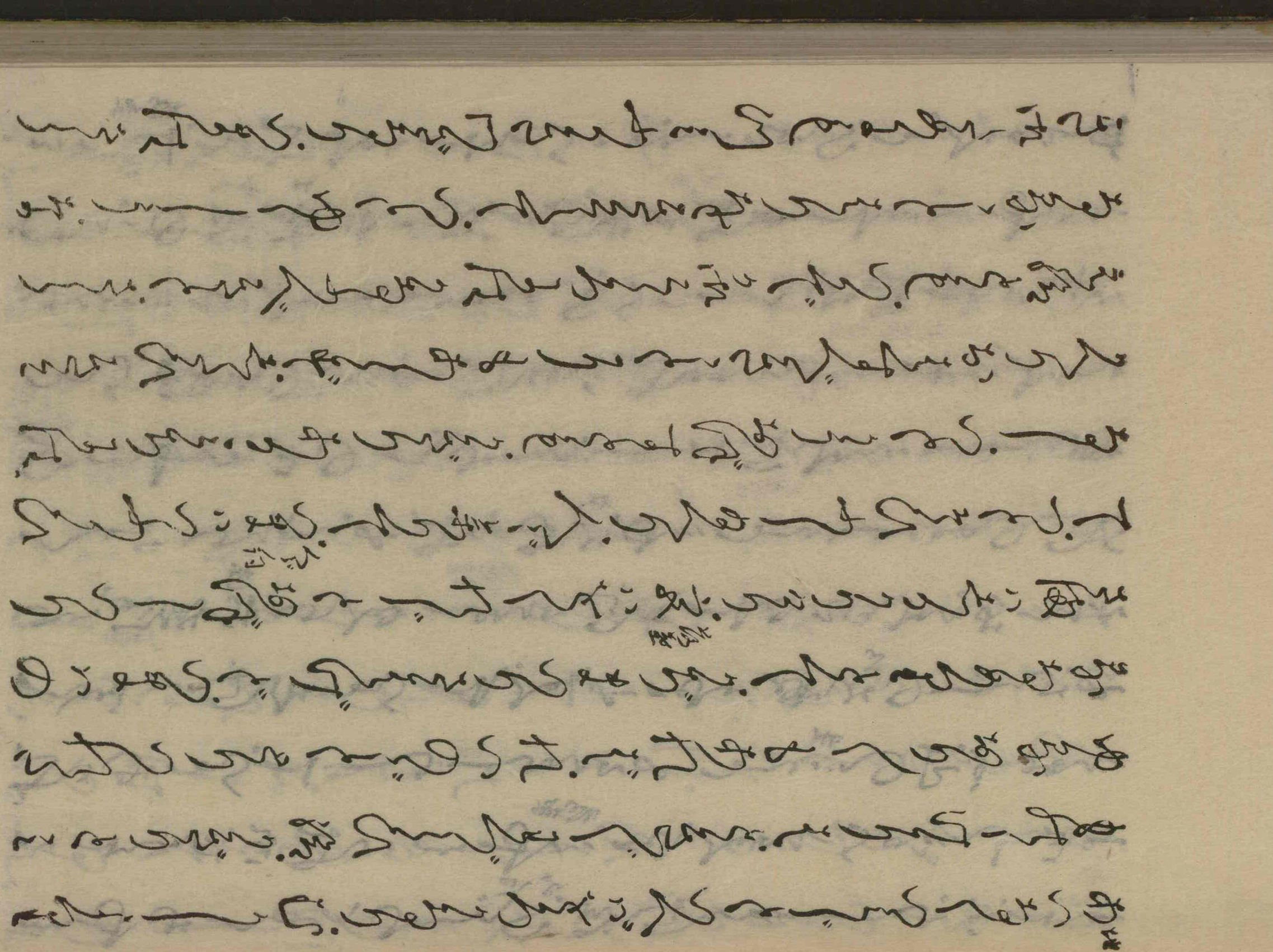


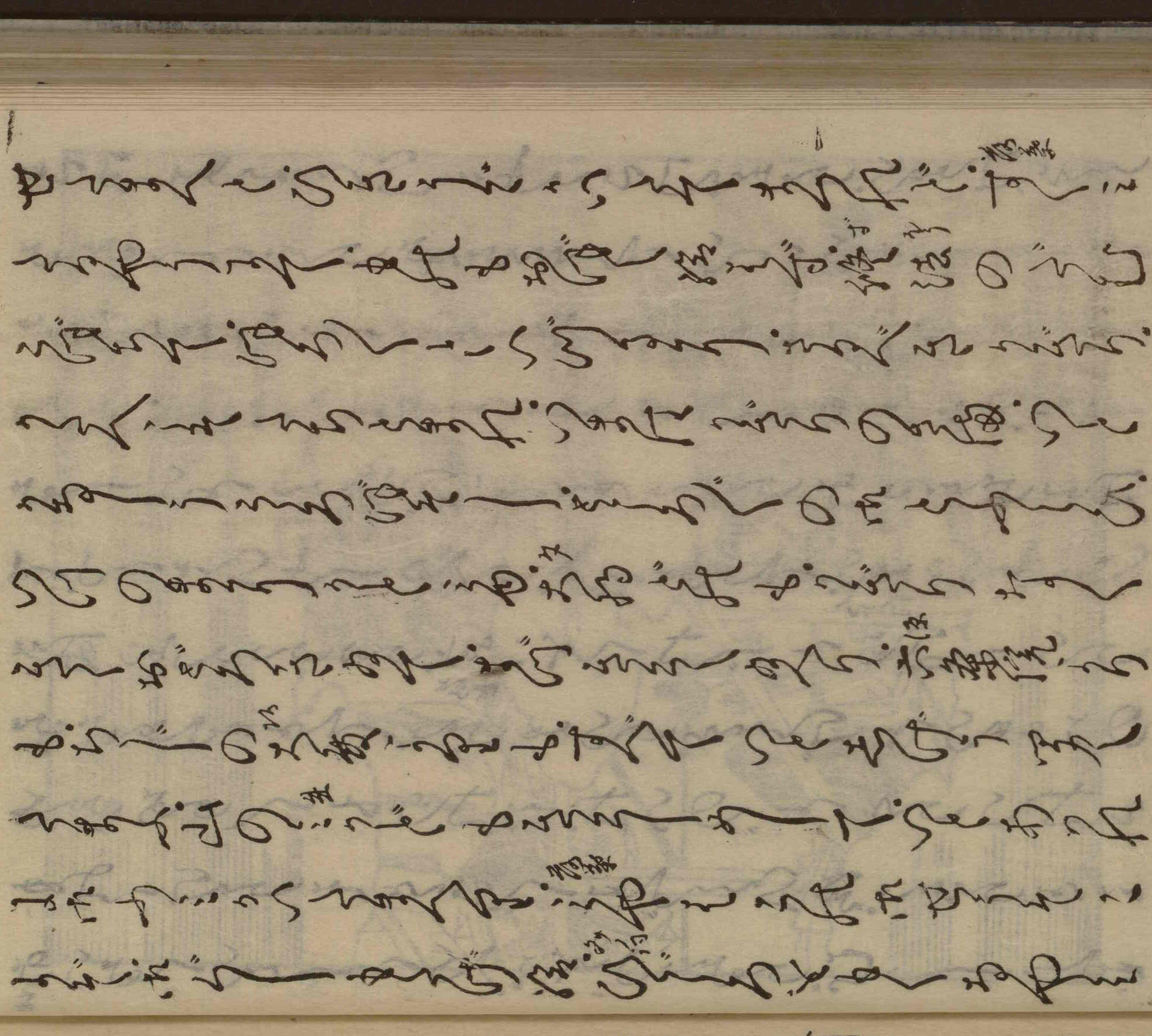
つぬれ事程とさし此もこゝ事りなやこしかど、さら
べきれすくせまこそは院(無)よりりじめまりて、笑し
なびきこのちくおとゞまもゆるひのべきれにしき
ありしまどのれひとりしも心をこそくいかで
もとゝ忘よりなしことなれど、末の世まで抱志き
れありさ面をげがれあやまちなるぬ、ほ[illegible]を
うとちてこゝ事りすぐす代、いとうう人のこゝあ我こゝ
よろげまきこくうりぬべきことれ、おきこゝひぬ
べきがさくもよそのれ名をがきしぬがかまて、よの
つゝのれありさ面まぐるあしばなれげりこゝあり
へんにつけてもなぐさむことものやとせひなし

仰る紙。こよなうなさけなき人の御こころよも侍り
けるかれとつぶくとなき給いとつりなくとし
こゝめての給をおしぶひ（海奥ん）をうけんこと此紫もなくて。
こゝうちなきぬへるさ海。おほそるらうこげなり。
うち（白見云ノ）海もりつゝ。衣なるうとかは。人をとりぬへる
いかなるれすくをまてやしてかしずものをゆゑ
おほすべきちぎりゆゑ。里けんなどの給まゝに。
いらじうろうしうも給。（地）ものくけるどもかゝるは
めよそころうるもれなりかれば。よは（道不ノ）なきいりて。
こゝびそくひえ入ぬふ。律（ヲ）師もさけぎこちこ
まゐて乾（ぶん）などこそのもちりぬふ。嫌かきちらひまて。





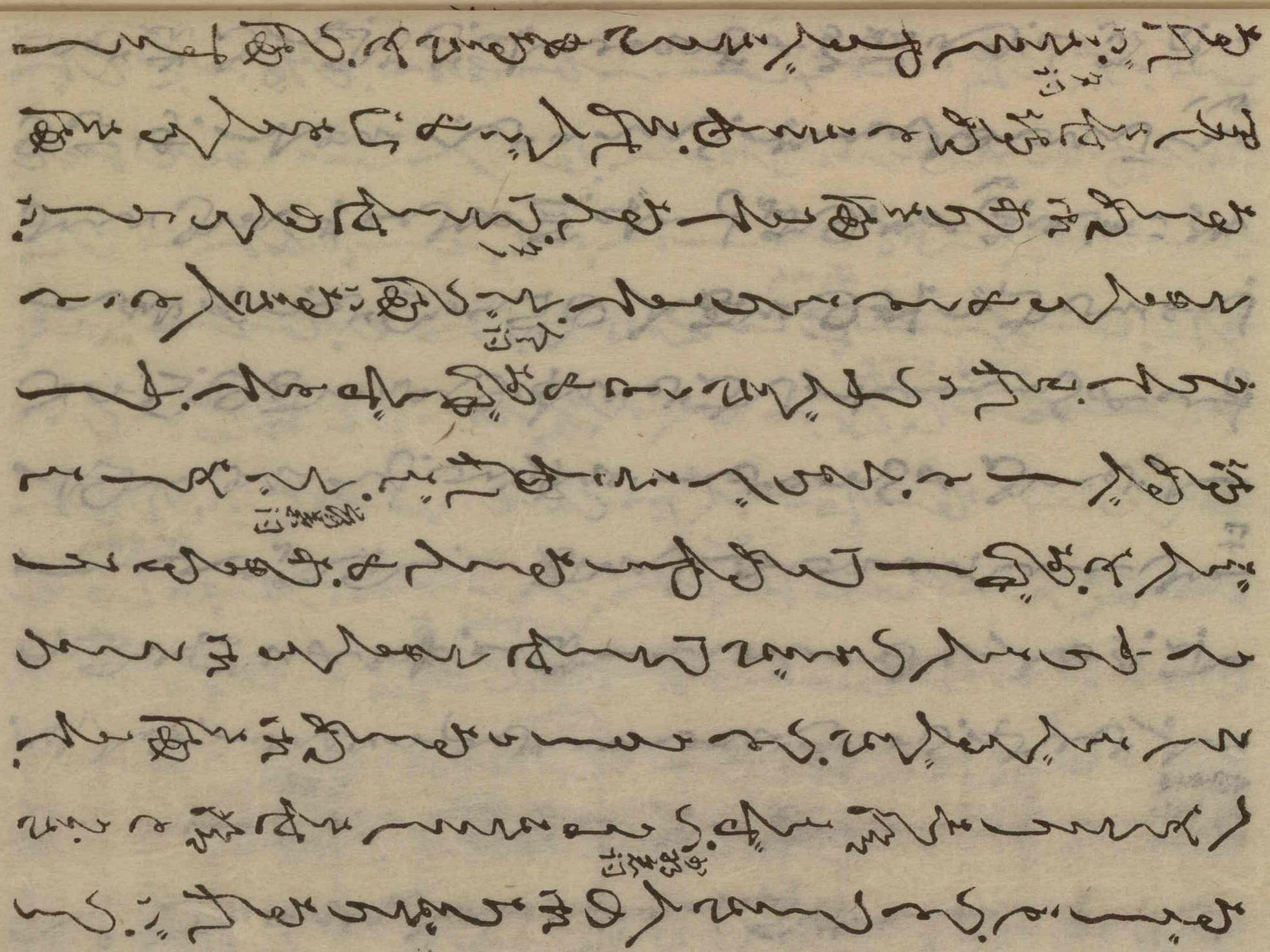




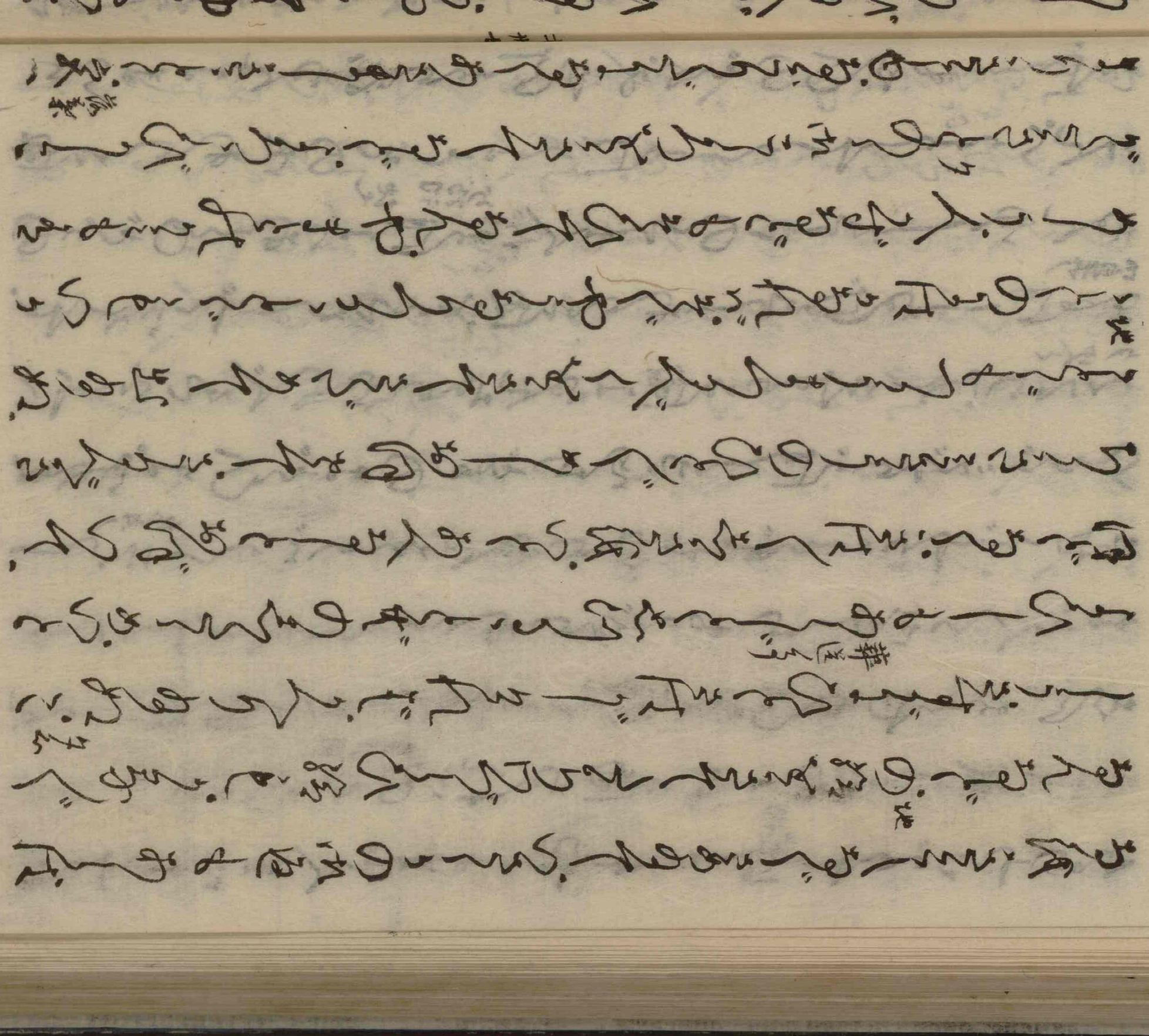
せんまへとひきうぞかいとてまつれど、すくこ
ろやうにて、まれもおぼし給はず、終法のぞむ
こぼちて、ぼろくしいげまり、さるべきかぎり、
かんこそたちとまれ、いまはかぎりのき面、いと
かなしうころぼそしとしろぐのれとゆしひ、
いけのまりうとこゑ、夕ねどれもかぎりなすく
えくおぼろさぬて、すげきえくまへり、六条院より
もちじの大殿こうるもすべていとしげう罪し
たまふ山のこうどもきえしめしていとあかれ
まれふこかいたまへるこうやもこれれせうそこ
よぞれぐしまたげ給ひぐろともくあやま

絵ときくけりつれどれいもあげしうのこ
きくもべりつるなしひりうちゐこてなん
かひなさことなばさるもれまてしなすげい絵
らんありき風をしもうるなんおもれまころ
ゲうしき なべての世のこともりりおぼし
なぐさめこまへとあるめ（彦業）もこえ絵もねど
此也さうし絵つねり（法眞本ノ地）さしてあらめとの絵かう
ことしてかふやゞておさめこてまけ家とて（法眞本）
といのやまとれ（小弱名ノ元之）かこまてありけるぞよろげる
あつひこうしけるかうとぞしこうこ
てまつらんとて（彦業）こやもおしこまて絵かれ

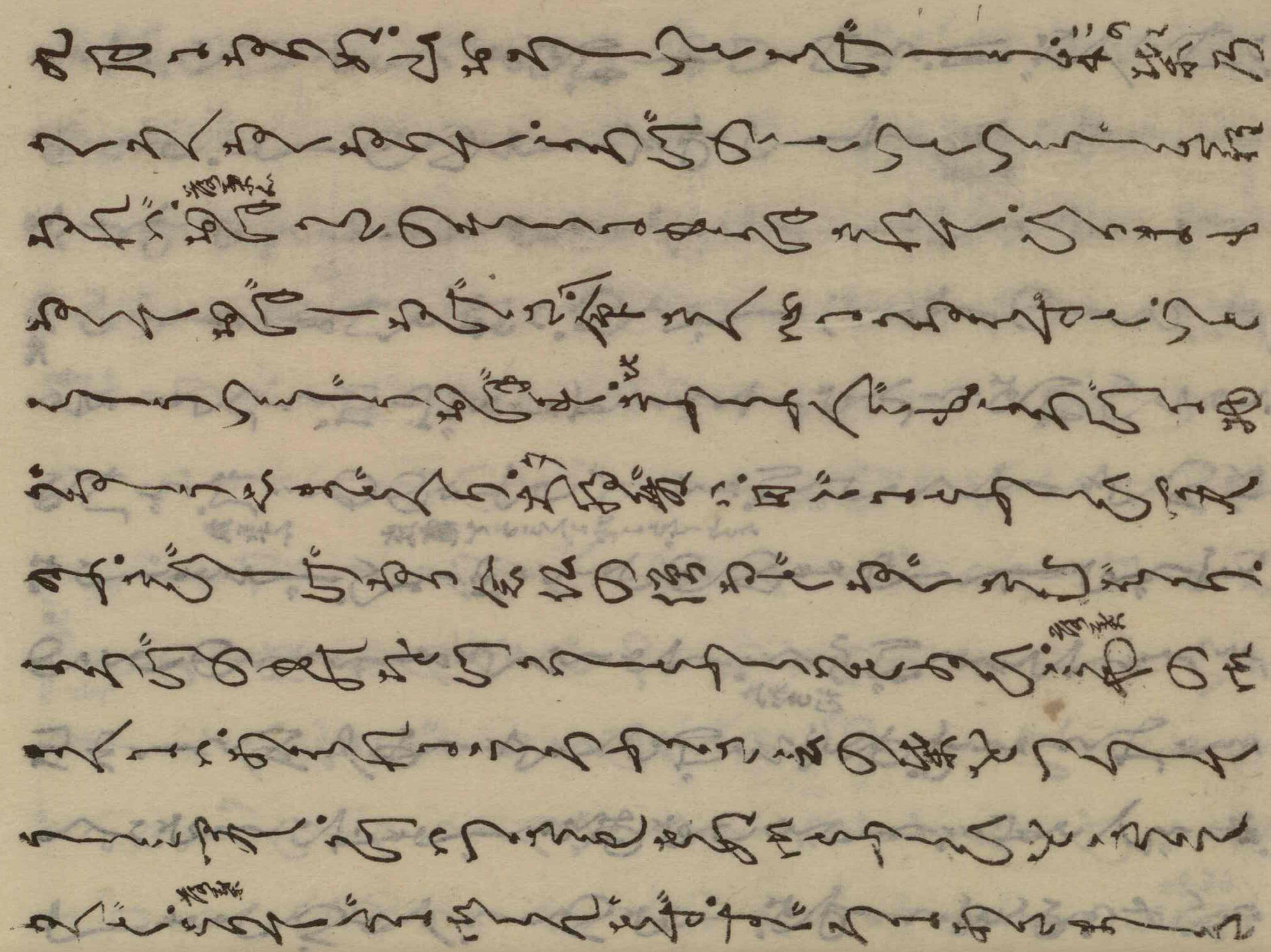
さ世にはおなじ恨心もおきまじけれ行あり。
（タノ）たくひありとはいへるをぞ、うくてかなしくさえて、かれの
思ひは美しく、たのもえの給やらず、涙もろきにかゝる
づまされど、京のさ夜人のけしきなど見し
やるものゝふしにて、つれなき世の中を夜のひとゝ
うへなきぬもいとなうしき姫ありやとかゝりて
（羽）なりしうちそうりのみそ夜にうけ給ひりし
みゆ。かの人とあひしうりし行に、夢もさむるほど
あべきかな。いとあさましうなれとさらしのへに。
（露ノ系乃心）おぼしかりし夜、それにおぼくは（浮見ネノ）れ心もこゞれ。
よしぞうしとおぼすなり、さるべきとはつひ

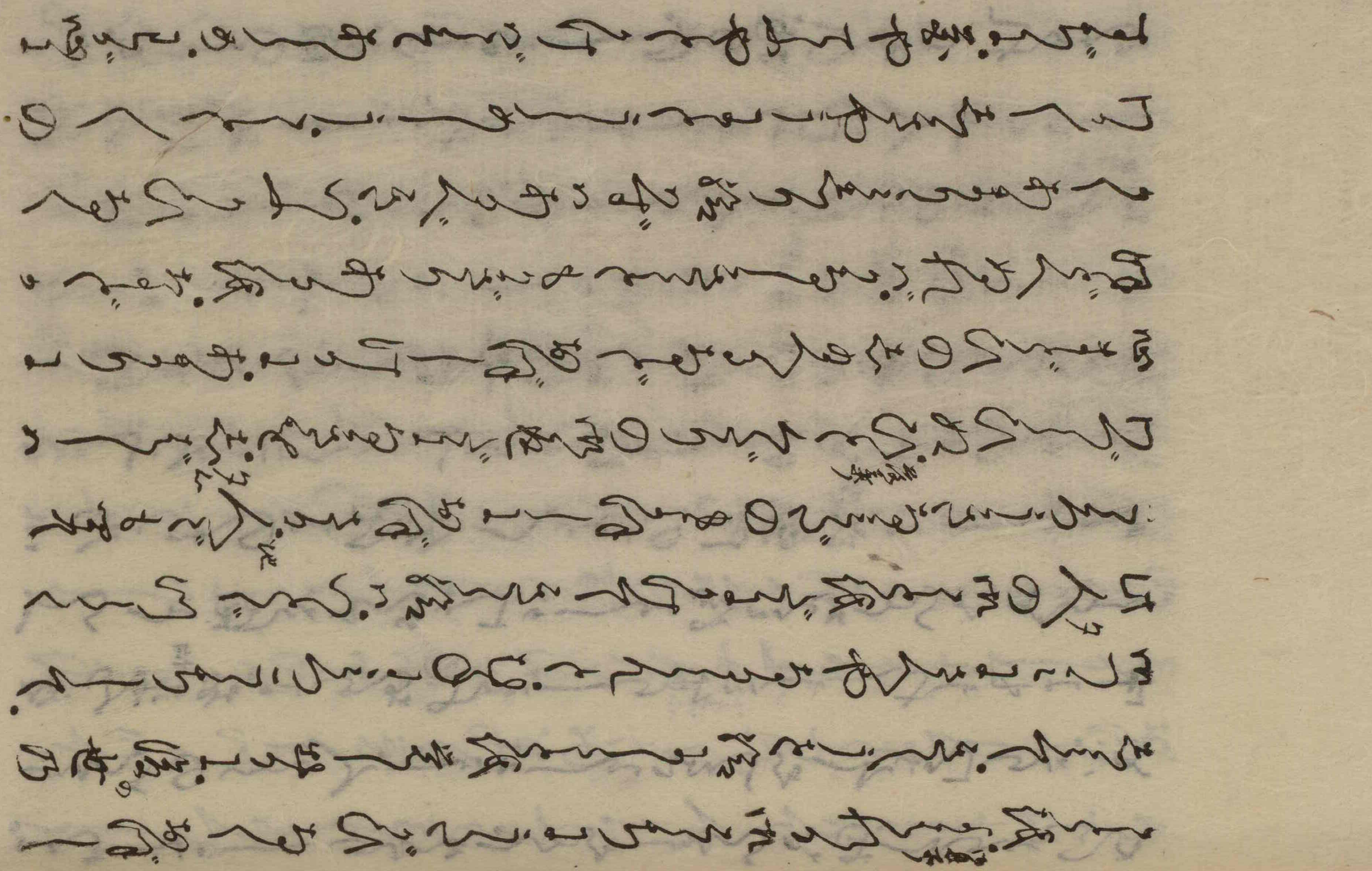


こゝづくもしひのどめ又しげまり給なんままいり
こんいかなりてかしはりなとそのれありさ面
なんゆりしさとのこまへばまほ（か物詞地之）にいあるゐどかの
（四夏ノ）胡もほしなげさしありさ面をうたちしづ罪て
（夕史之）こゝち罪てさすうさ面になんなり給めべきかふハ
いとゞこゝぐりがほしさ心ちどものまどひに罪え
させぐふうことぞも給りなんさしばかく（落葉ノ）罪し
まどへるれこゝちもかざりあるゝとまて すこし
しげましせぬひなんほどに罪てさをうけ給いらん
とて我なもあらぬさ面なれば（タノ詞）のぬひ出ることも
くちふるがりてげ（詞）にそやこままどへる心ちすれ



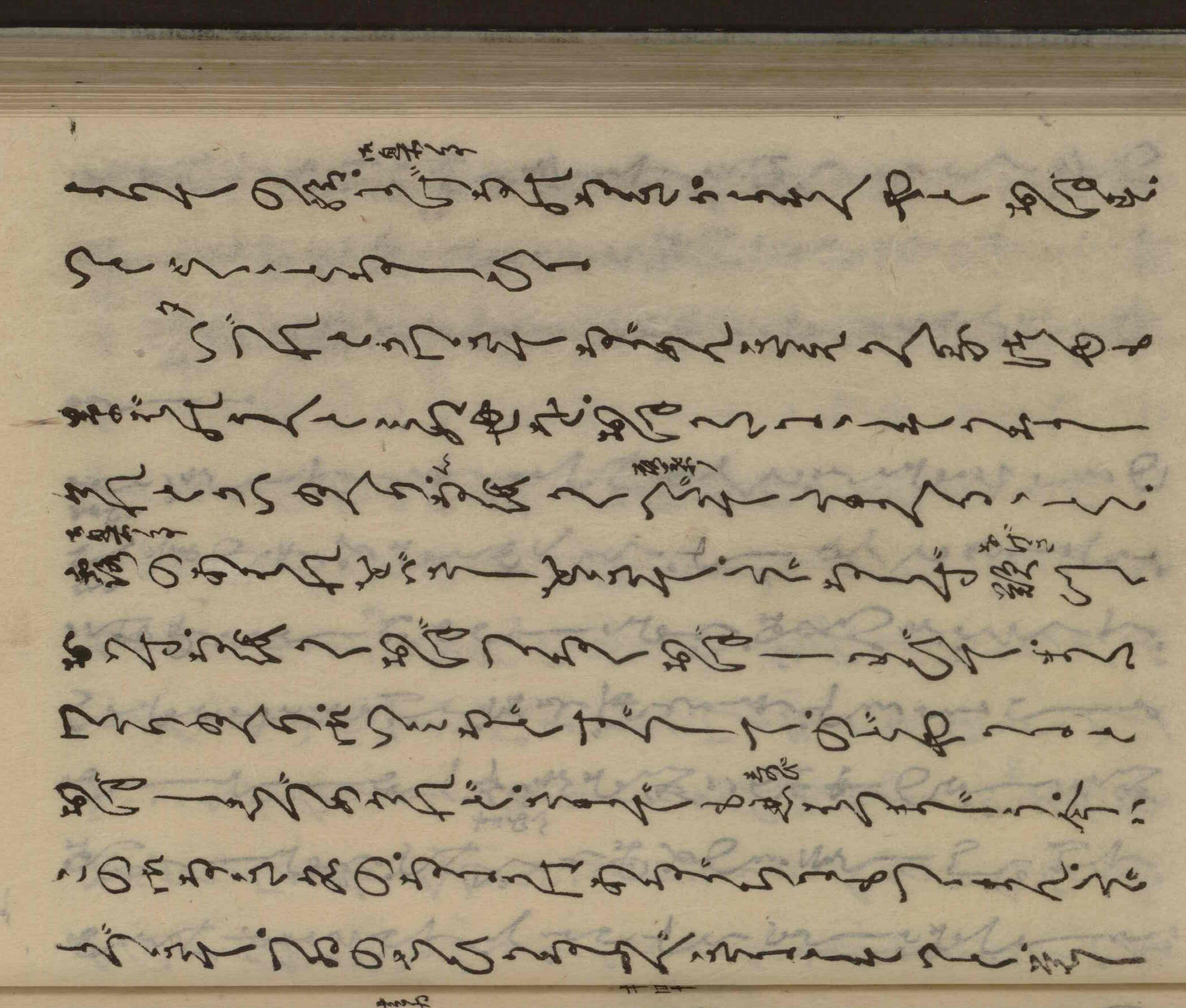
かしまろびかへどうひなしおやと子ゆともいと
くいなしかすまじき物なりかりとこなりへども
此れこと此文ゆしもうなげき罪也やまとれうこ
のうりのことにもしてくめてかく心ばそくてもえ
おりしまさじいとれこころのひまあらじなど子
ゆれど此こ○の々ふりをどこまげちうくてもひむ
きこしえんと此山里にすこもてなんとおぼいうり
此いこまこもれる傍はひんぐしおもてのまゝ歟
志もやなどにまもるまきへぐそしつかすうり
ねうりよしのひさしをやつして文ハおもし
ます おけくりしもおぼしワねど月ばへかれば



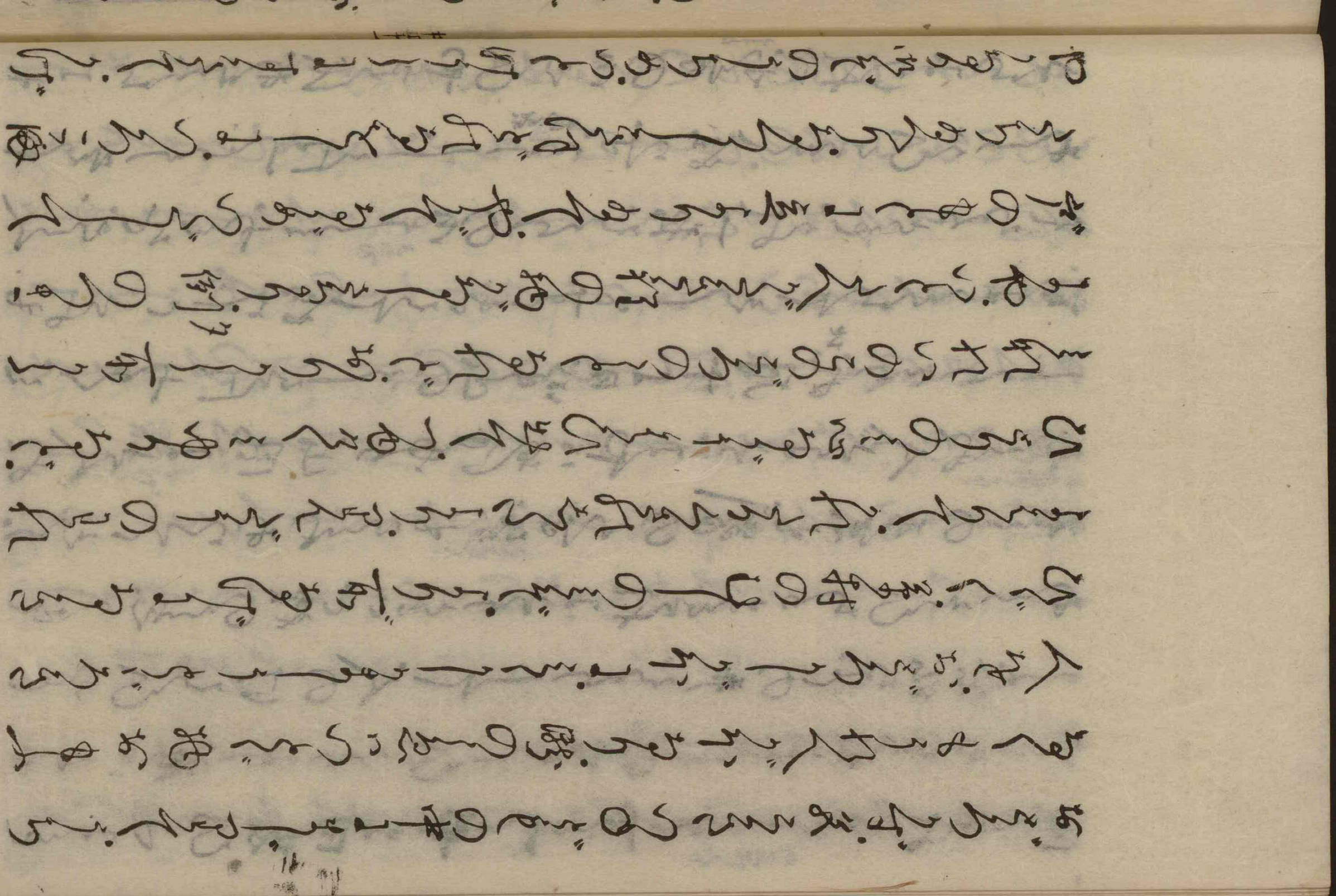


あそれともひ抱なげしさくさざ海のことを。いか
まともふ人ハ。心つましうあそれまこそおほゆれ。
おほ(蓑ノ母)ミやのうとゐへりしを。いとゐるしともちま
もしま。彼(ちじ)仕のおとゞ(ゆ)のさしもさふくまへらず
ことゆりの世のワれま。おほやけくもさ。さほう
ぢりのことをけうじ給しまつしくうろづさ
なりしま。六条院(源)のなかく念じま。のち乃れ
ことをもいとあるこ給ましが。ワがおくさ海といふ
中まもうれしうこなりし。それありま。お来(柏)ゐ
とバさりワきてもつきましぞし。人がこのいふ
ちげまりて抱をいこしもとゞめうりしうろま。

あはれもまさりて。人よりことにおもひしう
おぼしゝるゝ。つれなしと袖のゆへしけて。
あしたのふし。女ごかうゐこの宮中のなしさ
いまはまさりけれ。家もあれそふかくまりしも
こ庵やよし給めりしかど。おもひえがたくて。
夕暮の空をながめ入く。ふしのへるところ。
ものごゝろしてこそまつれのくるちきさうこの
もしは
あはれをもいはまちてはずかんあつや
あいさきさやうなしさ。おぼつかなさそころ
うきれとあれば。ほのこそざん庵ぐまうくこひ



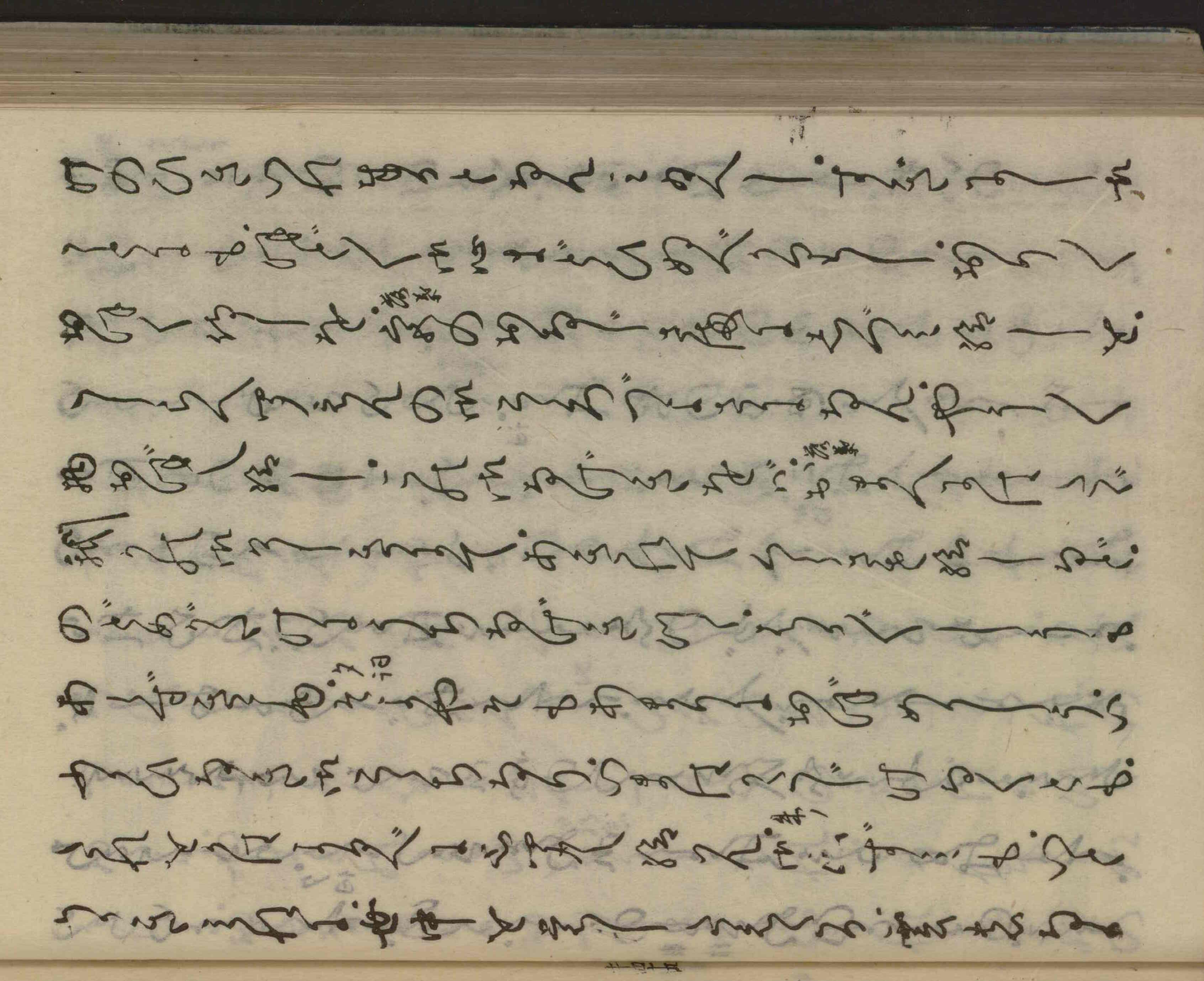
さちまければ小方(まね)のれもひやまぶ。おちぶちにも
あしがひきそく給ひず。さうじ(家系)にはつよう見し
たるらも。かれ一君ぢりのれうしにがきをさんへ
取まかくちて。そしもすぐぎたて給ひじと。これも
しかりかり。此月十五日。此山のうしきはかくこ
しこぬ人ぞまたにやハあげゆり。山風にこんぬ
あぐの事来も。罰のくず紫もうろあつてしり。
あしそひちるまぎれまさうとこど程のゑりまて
うま。念仏などの声ぢりして。人のけもひいと
すくなり。まがしの吹もしひうり。麻にこぐ
雨がきれもとまこずこつ。やま田出ひこまも



おどろかず。笑こえいひどもの中にまじまりて。うち
なくもうれへがかなり。勝のゝ忍いひとゞ地おもふ
人をおどろかしがかに。こゝかしかましうとゞろき
ひゞく。茅村のひしのゝぞより取なげにあるき
よりて。かれたるくされたるより。まんざうのまれ
ひとりのゝ心なげきもひ出て。つゆくゝゆりなど。
これれいのこのごろのことなれどありかし取かる
よやいとこへがたき程の地がなしさなり。例のつま
ざのもとに立よりなて。やがてながめいざして
こちなへりなくしきほどれなをしに。いろこ海
やうなれぞのうちめいとけうしにすゝて。かげ

比タノ手
これこひのちぎりあはまちいべく。ちまし こそのま
ほひまて。かねの声とさうてめしよせそのみ
程もなけれど。おくり人やそひねこんとうちなく
そそえこ俊やうまもゝしひ給ずれ 夕列 ちくてをな
うちつらのひそう。く山かくもけいろこゝろざしそ。
ぞそ御えべくやハ。こうもいとかしやとそてまぶ
ともこいれぬさ俊まやまれゝをちゞめて。ちなれ
ちなとまちまののへ。ぶ 比 すび文の手とすゞれ乃
つまうすそとしまて。すそとひきそばめいく
ねこうやまとれこゝのつ かねこ まうちあれ。ばちられなしね
うらまかきなくようねうしぞ給ふれ。ば。きねの

いろいろとりそへけるぞこのまきのひとまき。ことに
ちゐさくかきつゞきあはれにしはなるまれそ。
こころえんくくちすきれ心のつくしかむかふまじ。こゝろ
むしおもおくれそて。まろ人どもはしとげなき
られ侍ればつまはさるまじのかべきにあし。
いとおほくうしえつゞけのふ。かれ今なれわかされ
さ梅ものゝ絵出て。いにしへうちきさ絵。されん人もまして
いにしへうちきさいつゝ。それ秋の夜あへいし侍り
すゞむうとしをも。いまはうぐひすのゆふろま。やうて
おほしつゝそくいらなし侍びそのうしこそ。
ゆ心ちまどひまけるぞ。さる長めりし。れいのものゝ

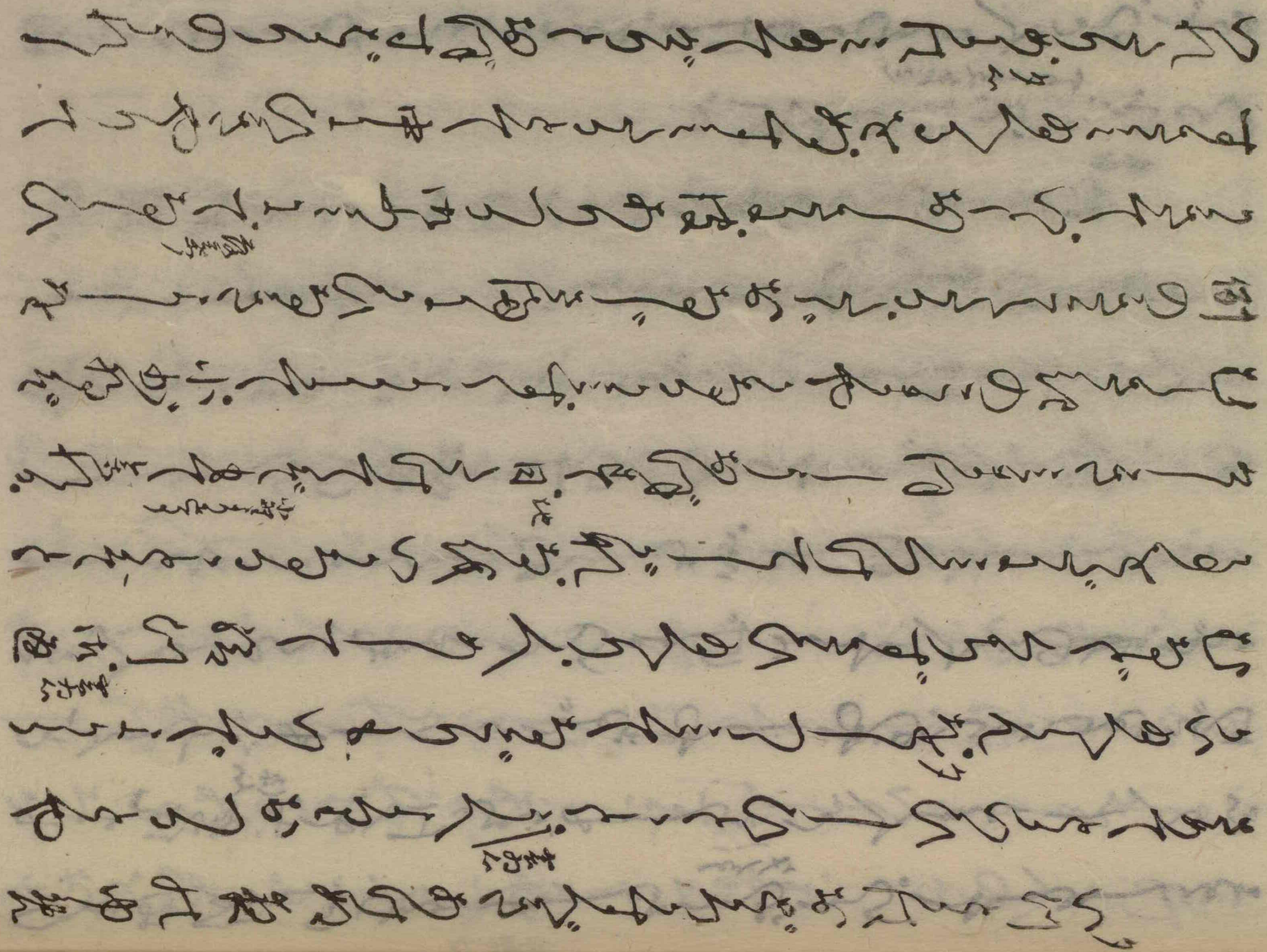


かあればなさしかひ給へることしけれど。いとくハ
うきこれ気色ならしをもんおろげのことなるか
べきにこそ。せにありへどもおぼゆること。ちぐりめ
世ちりぬ。まづハうつれ見れのなうろうりかけぐ。
あるべきことがハちびころげにおぼくのさめへど。
さこゆべきことなりて。うちちけきりくねくらう。
ちられいといくちくを見れねしらかやとて
夕
里と派こ小野のちれのうワけてなそ我も
よろこそ心もおしまる。どのつまへば
かね
哀ころも寂けき秋の山人はちられちくれよ
きなき我しまへつる。よ（世）ありしまゝ。しのびやう

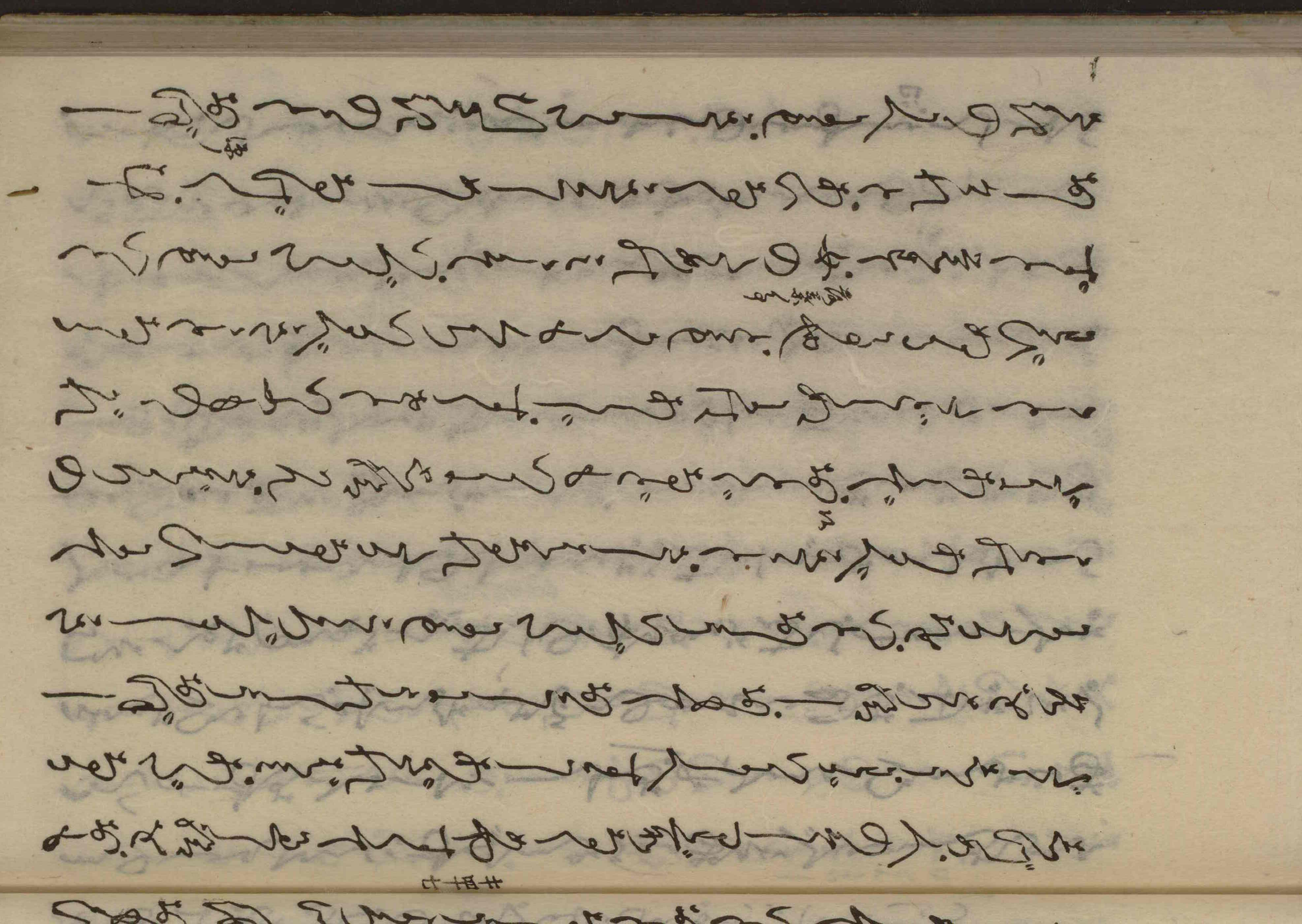
なりこはづひなど紙。よろしうきくなしぬへり。
はせうそことゝうゝ事ぬへど。いまはりくあさまし
き夏の世紙。すうしもしひさますありあらばなん
こえぬはとゝひもこそしやうべきとのゝ。すく
かゝ。いとゝ給いうじういかひなきはうろなり
なりとなげきつゝかへり給。こちすゞしも衣なか
をとながめて。十三日の月いと常やまさし出
ぬれば。をぐらの山もこどうましうおもすうり。
一条の家にこち成りいとゞうちあぞれてひつじ
さうのるのうづれこうをこゝいるれぞはかぐと
おろしこめてひとりげもこゝず。月のゝやつ水の

おもてとあしらはすゝあしらはに尤納言こそ
てあそびなどし給しありくをさ出ぬふ
夕しへのうげすゝそてぬいけ水にひとり
やどもる秋のよれ月どひとりごちつゝ夜になり
ても月をゝつゝぞろいそゝにあくがれぬへりさも
ミぐるしうあらざりしれくをかれとごごちも
よくゝあへりうへいまめやかにうろうくあくがれ
こちぬるれ心なめりもとよりさりなるひ
ぬへる六条院のひとぐとともすればめでこそ
ゝめしにひさ出つゝぞろよりぞあいるぬちなさ
物に出ぬへるわりなしや我もむかしよりしゝ

なしひなましかばくめもなれて中とすべしてま
しせれなましまたけべき此心だくとおやたしから
ようちじめまりめやすきあへ西ましぬへ弘紙
ありくてすゑまたちがましきことやあんなど
いといさうなげいぬくり我(地)もあけがたちくかる
こうしうち出たまふことなくてそむきくり
なげきあしておさぎりれたれまもまるずれいの
文とぞいそぎかきぬふいと(書ぬん)心づきなしとおぼさど
なしやうにもだいぬかずいと(り)こまやかなりきて
うちとさてうそぶきの給志のびぬへどもりて(書ノ)き
きつけらな



さぞいと人まろうりけり。そこもとなくうきこゝ海
へるなど。こゝろ（やりたち文ゐれ也）ぐけのへれば
（荒葉）和夕まなくるをこゝろをの山にこゝろぬ泪や
をとるしの酔。（夕ん）とやとりなすべかんゝ。ふかことなど
もれ也ましげまうさこゝぐりのへる。れくもなまどこゝ
あり。人のうへなどまて。やうのすさ心をひいしまし。
もどかしうまけし心なしぬことまこゝさくし
かど。月のうへまてはげよいとこゝえがたうなべき
けざなりかりおやしやおどかうしもちふんと
ぬかへしこまへどこゝろしもかなはず。六（係ん）条院にも
きこしりて。いとなし（夕ノ多）ちしうよろげ。後おもひ



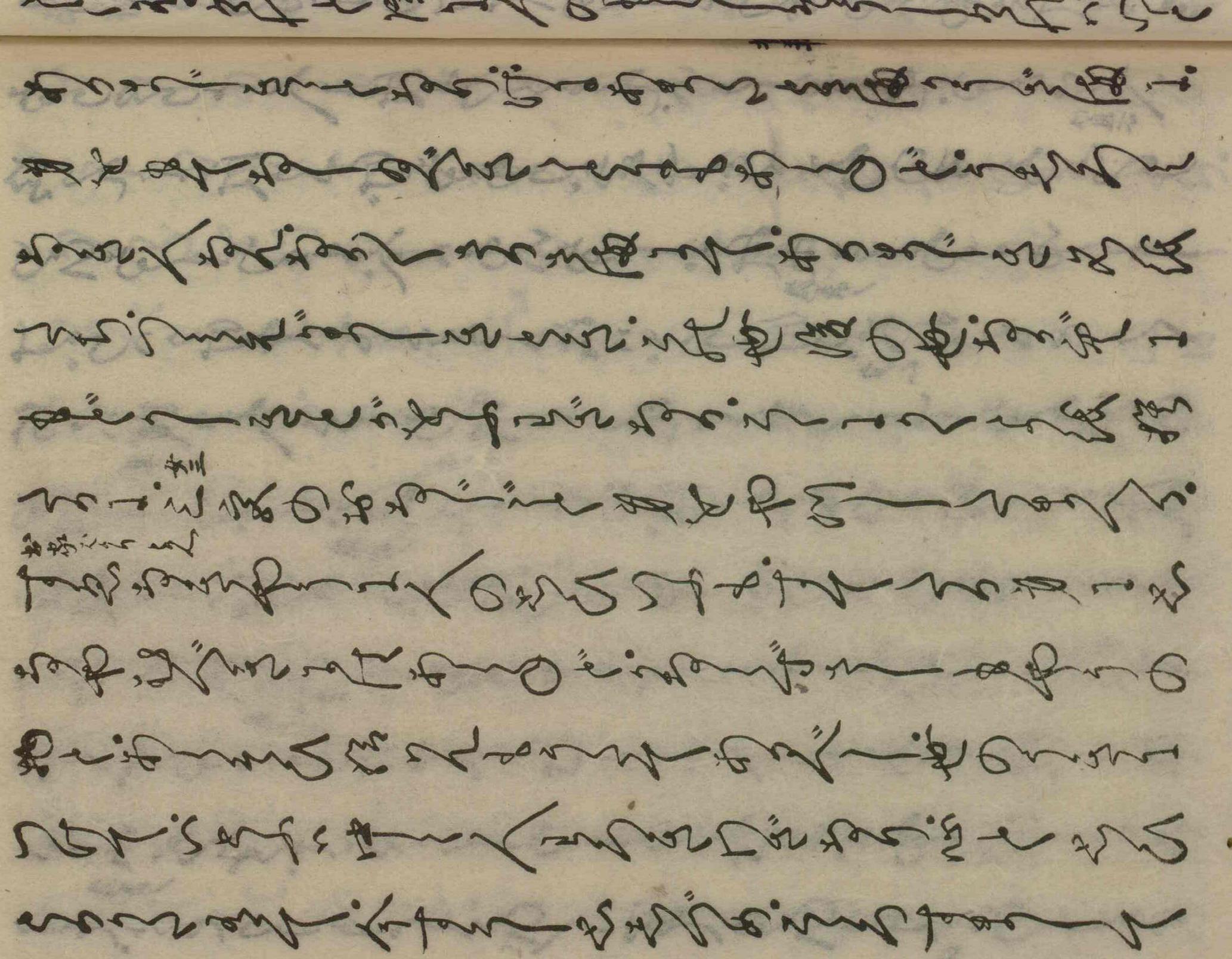
いでつ。(詞)ぞうやうのこゝろしをさくりつけても。
なしんのちうちろめこうしひさゝゆうさ海を
のゆへば。(紫)ぬかうちあらめて。(ふ)ごろうくさまで
とくしゆべきまやとさしこり。女だりまを
もてなすさ海も。一所をうあもれなるべきまれはなし。
地の衰なりなしきことをもこゝちぬさ海にひさ
いりちづこなどすれば。なすくつけてこゝにふるもん
ぞへしさもつれなき世のつれぐをもなぐさむ
べきぞは。なほかくものゝ心をしらずいふひなさ
地になしひこんも。なしこそそんなやもいと
くちなしうべき地にはあらずやこゝろりのこ

こあて。無言太子(むごんたいし)とほうしぞこれにはまさる
すがむしのこゝろのやうに。おもふことゝ
をきひきりなぐしげんれちんもひさひろうしるげ
うちまじりも。ぶそう相に付いでこゝろうべきなど、
そしかぐみも。今はたゞ女一の宮(明石女御ノ御腹)のれいしあまり
夕おもの君と思ひわくるにつのでまたて。心はへん気色も
深ゆうしられど。御(おん)やま形のいとこそぬけなさのみ
わかなと思ふ君には。こそとせうりおもいのとまあき
世をそむかれ。我にはぢなきや。夕(ゆふ)の宮のう家
君のむきばかりいでこれなきりそなうべ[illegible]む
さすそんとそっぬ。ささものどやうまうやうなそも

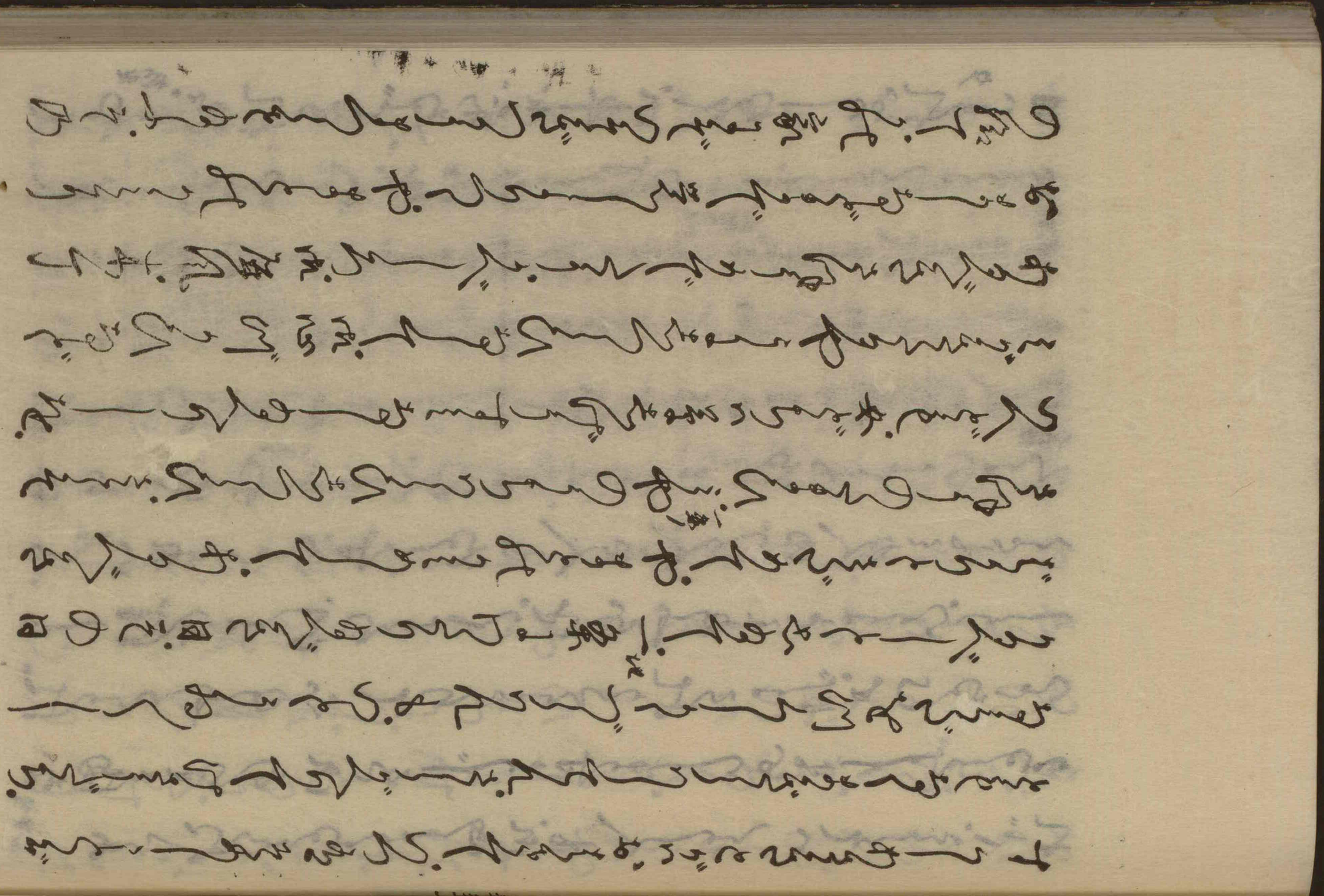
すぐすれいとワろさワぎ女やとのゐふ。夕詞まくとは
おしげちまさひとぐまなれがぎくもはなれうこく。
せふ世まこしそ仍めれなぐ男そて。こやまどころの
四十九日(きくなぬか)のワぎなぐやまとれうこなりがし乃
あそん。ひとりあつひ仍ろ。いと(源詞)あれなりまぎ
なりや。夕詞ちかぐしさよすがちまさひとにいける世の
うぎりまてかろ世のもてこそかなしう仍かれと
きてゐふ。院(源詞集)よりもとゐらりをゐしん。かれみこ(藤葉)
いかませひなげさゐつくん。もやうきしよりに。
このちうき年ごろ。ことまふれてきくこうま。この
更衣(藤葉冊)こそ。くちおしらぎめやすきへのうち女かれ。

おほかたの世につけておしきけぎなりやさてもち
ぬべき人のかうなをゆくを。侘（朱）もいうじうおどろさ
笑しこりかりかれ（茂葉）こゝこそはこゝにまもれし給入
道（女三）の家よりさしつさまはらうたう志（朱ノ）給かれ。人
ざ面もよくおかすべしとの給。此（クノ詞）こゝろ（茂葉ノ字）もいうぶもの
し給へんこゝやせどころもとゝもなりし人の
けもひ心ぞをまちん。志たしうおとけ給はざりし
かどゝもなきことれつのでまなれづらひとれ
よういもあらはなる抱まなん給とさてあて。文（茂葉）の
此ともかけずいとつれなし。（深ム）うぢうりのすくよけ（ウイ）
ごろにぞひそめてんことゝいさめんにまゐはず。

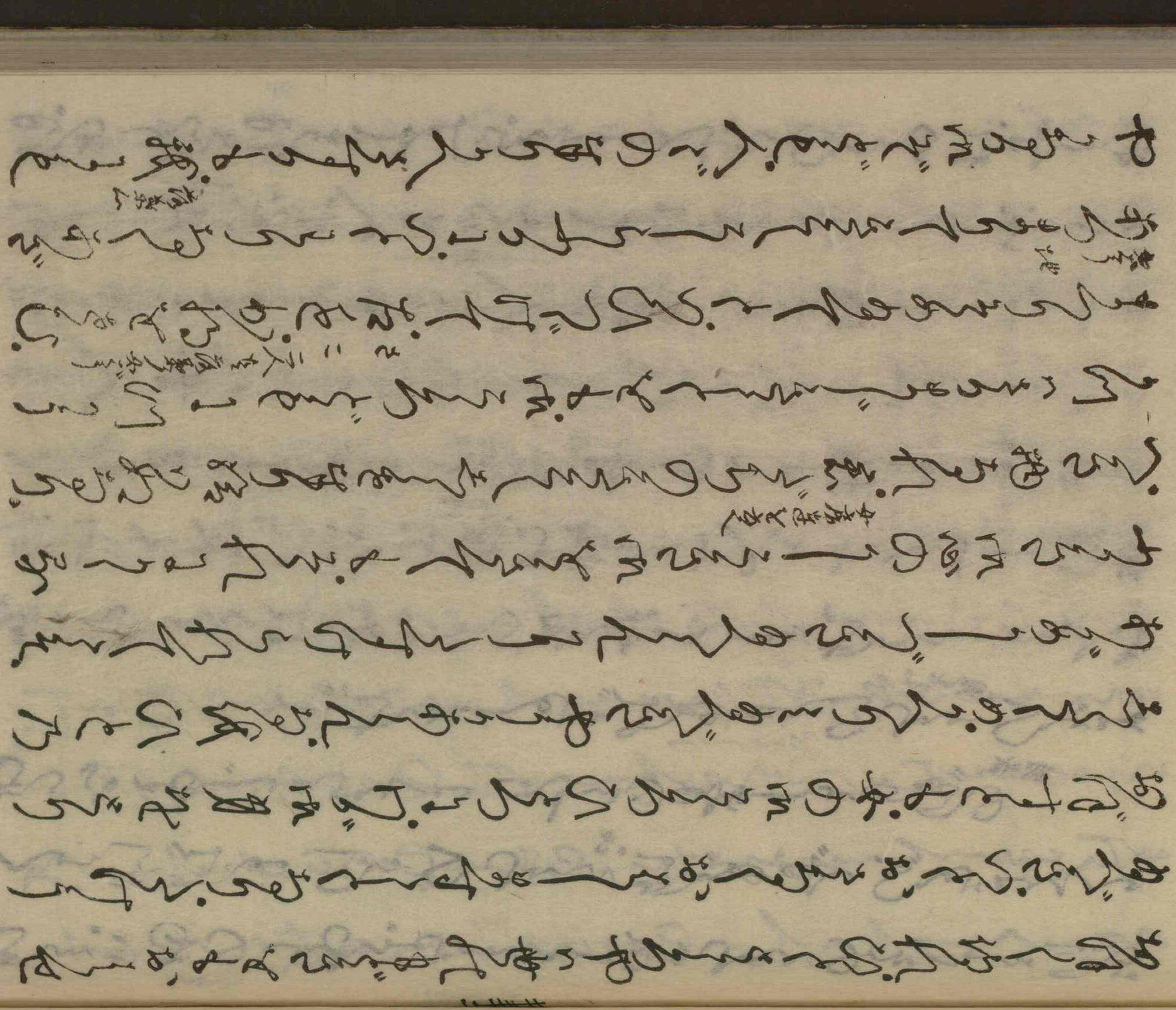
もちねざらん抱かしまれさしかりしといでんも。
あいなしとおぼしてやこぬ。夕地くて出ほうじ。
よろげとりもちてをさせおふ。とのさてをの
づしうくれなければ。如ほ愛などまもこさまてさ
やいあるべきなど。女（蔵葉）がたのころあさきやうり。
おぼしなすぞつりなさや。かれ昔の出心あれど。
（以ノ子達）忘ぞちもまぞとふしひ給ど。強など。愛（以）ふりもいか
めしうをさせおふ。これかれもさ海ぐをとしぞ
志おへれば。時の人のかやうのまぎまととしぞなん
ありける。こ（蔵葉）やいかくてすこそてなんとそしいろ
しきなれど。院（朱）人のもしそうしかれば。（河）ひと

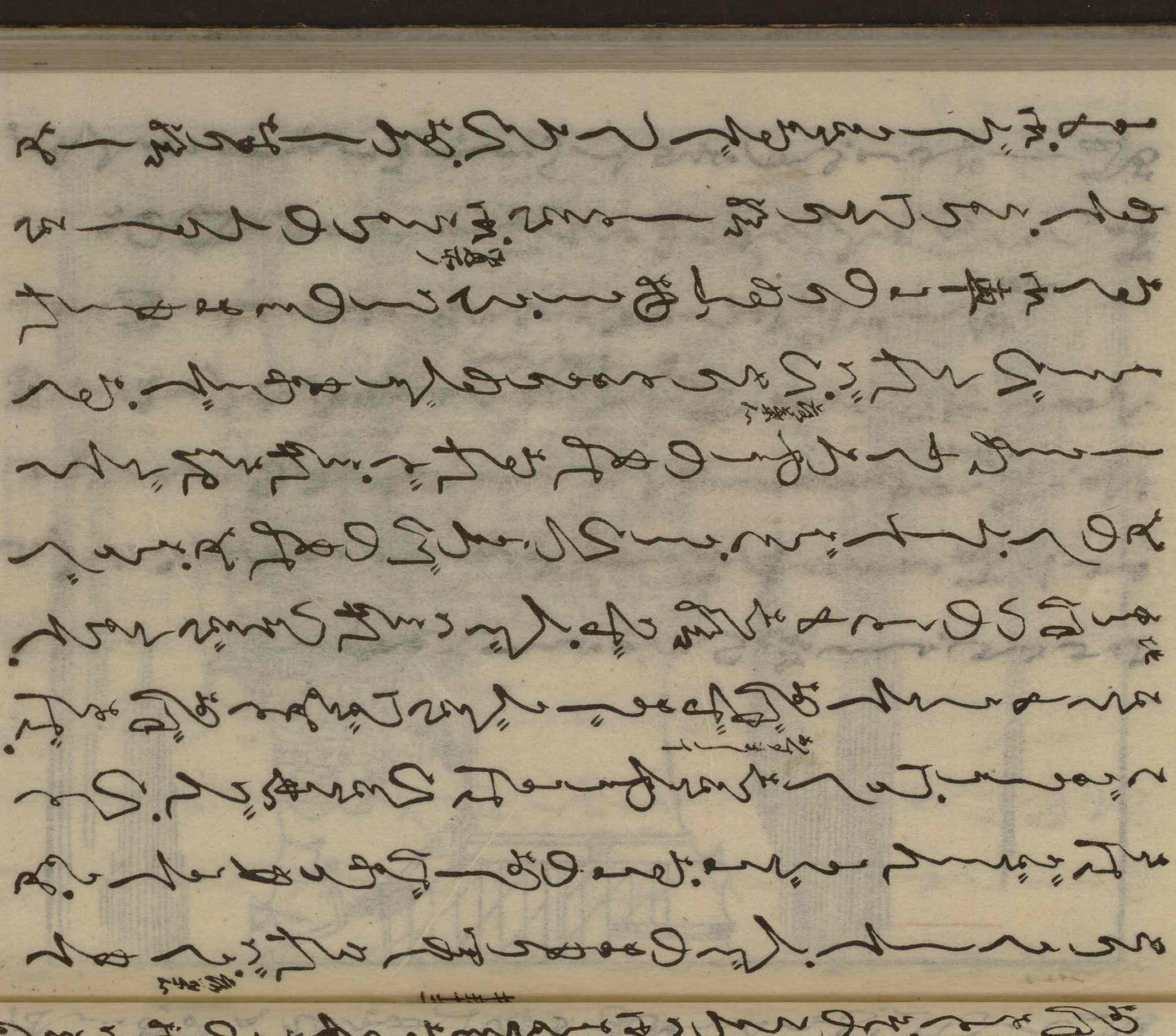


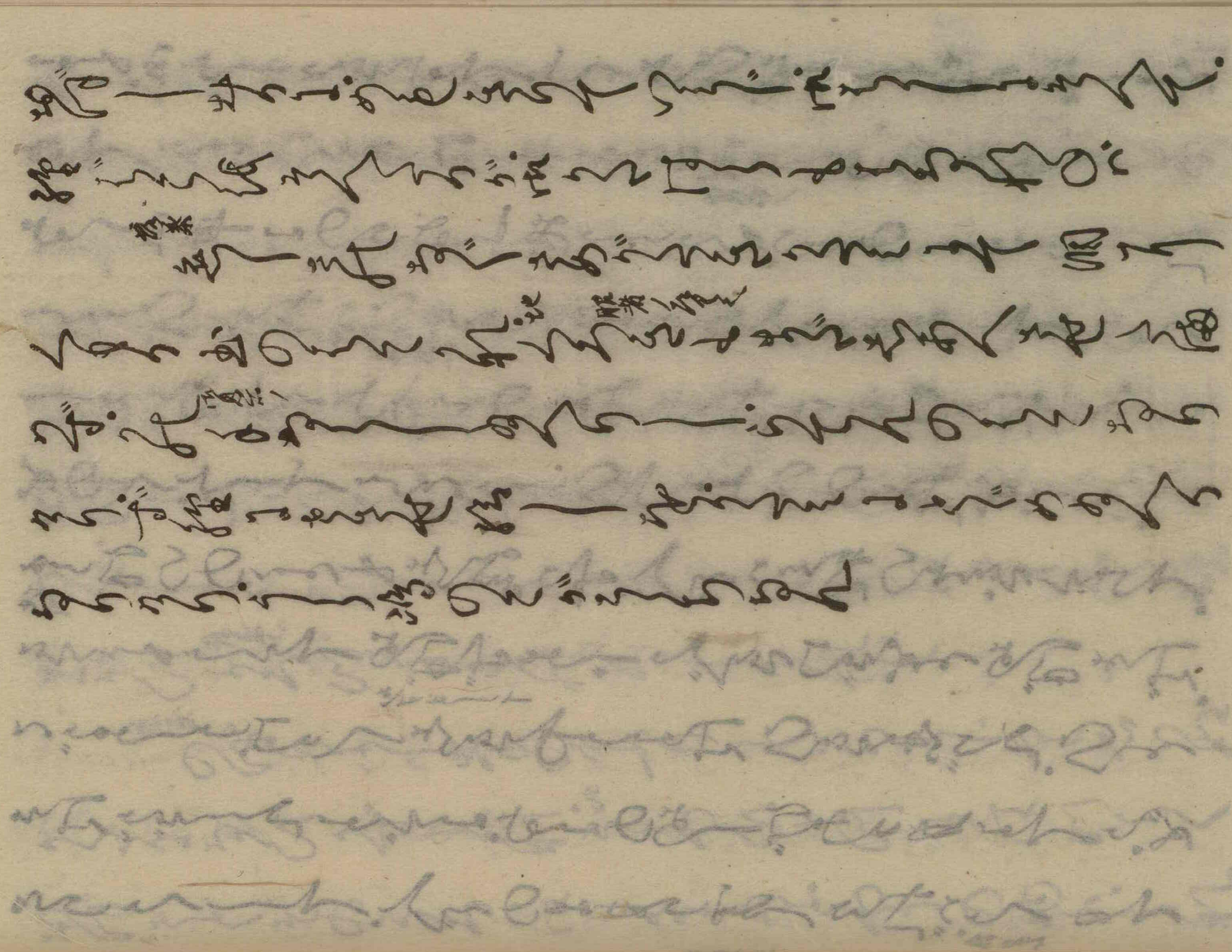
こそ。とも。かうもとこそ。びく。罪なひかり。この(世)うさ
ころ(彦義ノ)れ。みなぞ。こそ。しめしろべき。さやうのことの
さもぞなるまつけて。うむじのへるといふれこ後
ゆんこと後(朱ノ)おぼしてあるかり。さりとて又あらかれて
もれし給ゆんも。あはくしろ心づきなきことく
おぼしなぐらさ(彦義ノ)づしとおぼさんもいとおしこ後。
何かは(朱)我さへきくあはかるんと覚してなん。この
すぢはかけてもきそし給はざりけり。大(タム)我もとく
いひなしつつも。今はあいなし。かれ(彦義ノ)れころまゆるし
給ゆんことはかたげなめり。宮すどころのころしり
なりかりと人にはしらせんいかゞはせんなきくに(仕直示)

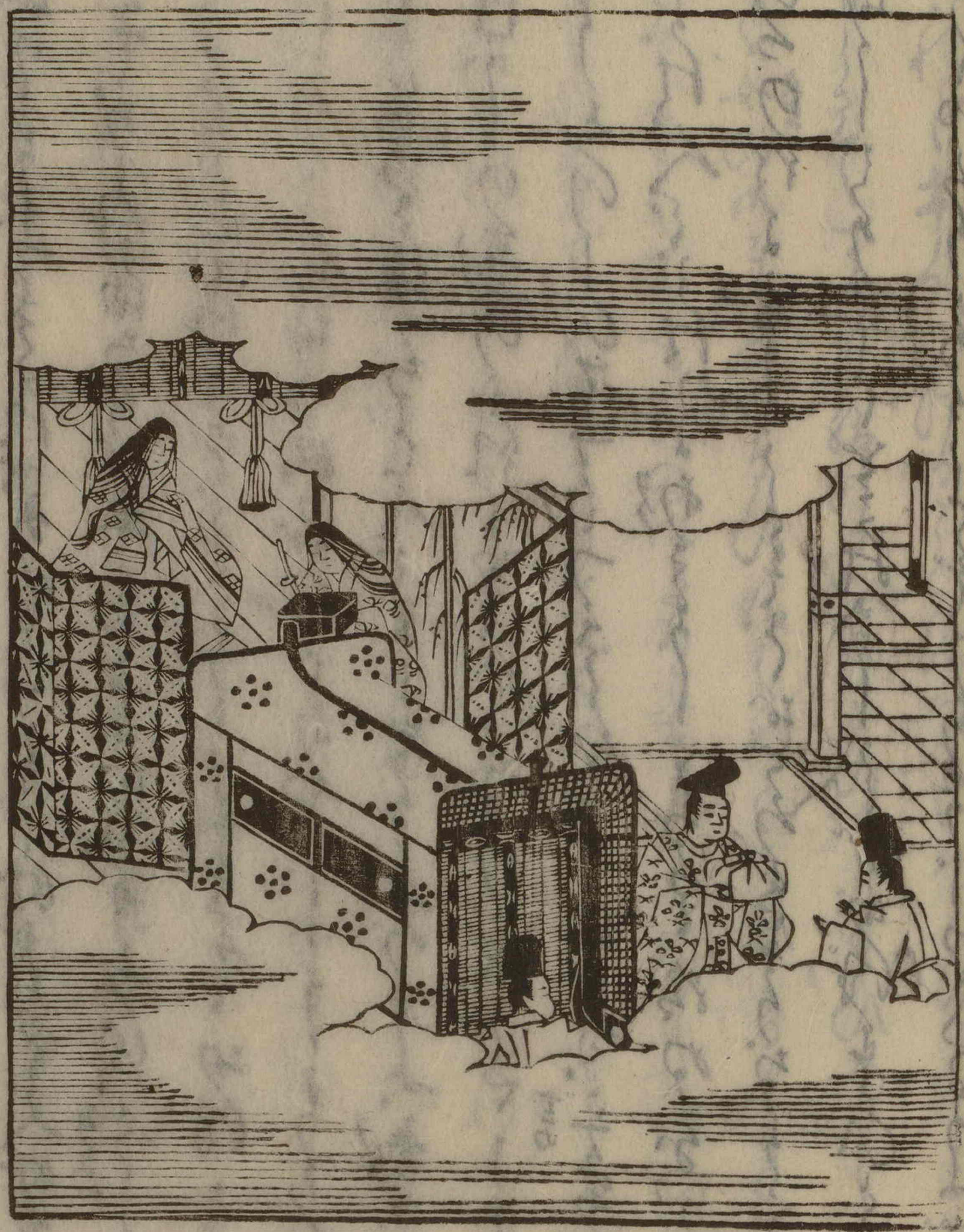


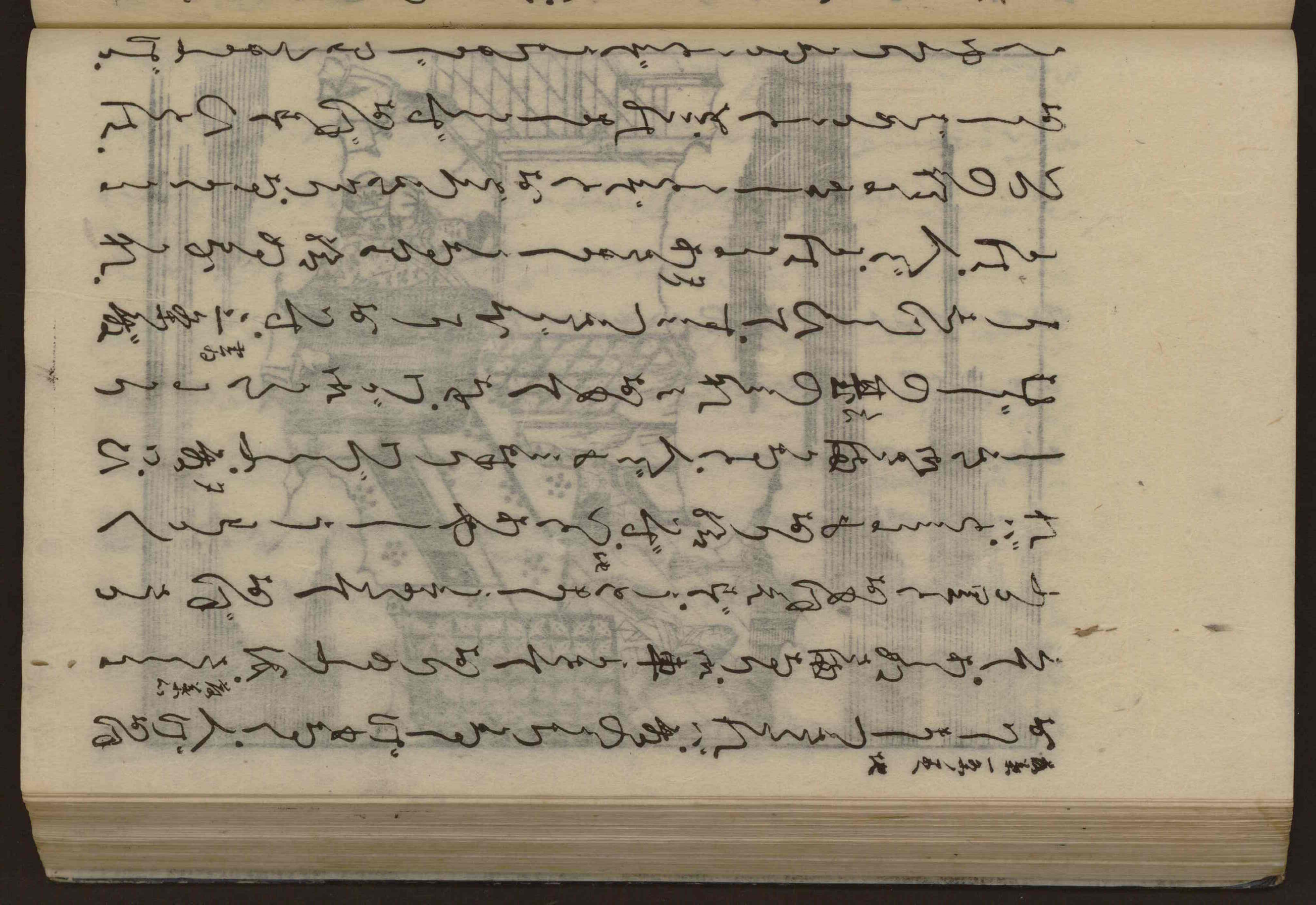
日ハ（タ）まれおりしぬて。此車ハ前ゐどまれ給。（前美）こやも
さしまつらしじとおぼしの給を。人ぐいうじう罪。
やまとれりこもさしまうけ給りしじ。こゝろばそく
（大和物語）
ゐましきれ御程をこまりなげき。この日どれこや
づへハ。こゝろまちるがひてつゝうまけ申ぬ。いまは
（大和國）
くるのことも侍り。まりうぐりぬべし。（一条）こやのうちの
こともこゝぬへゆづるべき人も侍しず。いとゝ無いぐ
しう。いまとこゝぬふるをくよろげまおぼし
いとちむを。げまこれりこゝまとりて心ゆゝうまは。
ゐるぐしもおりしますまじきれあるさ海か
れどこ。さしそハくらしへも。此心ようなれこゝ



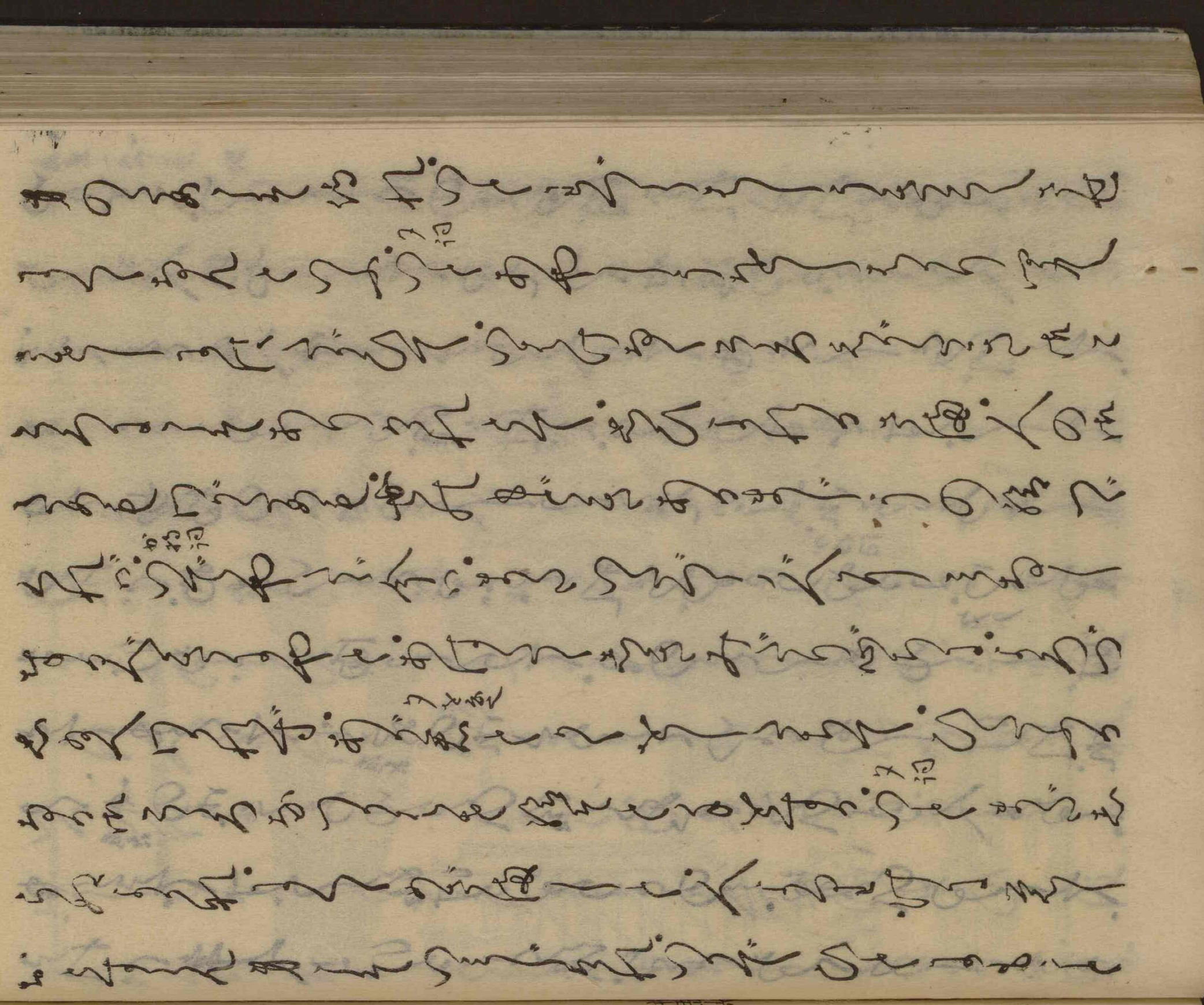


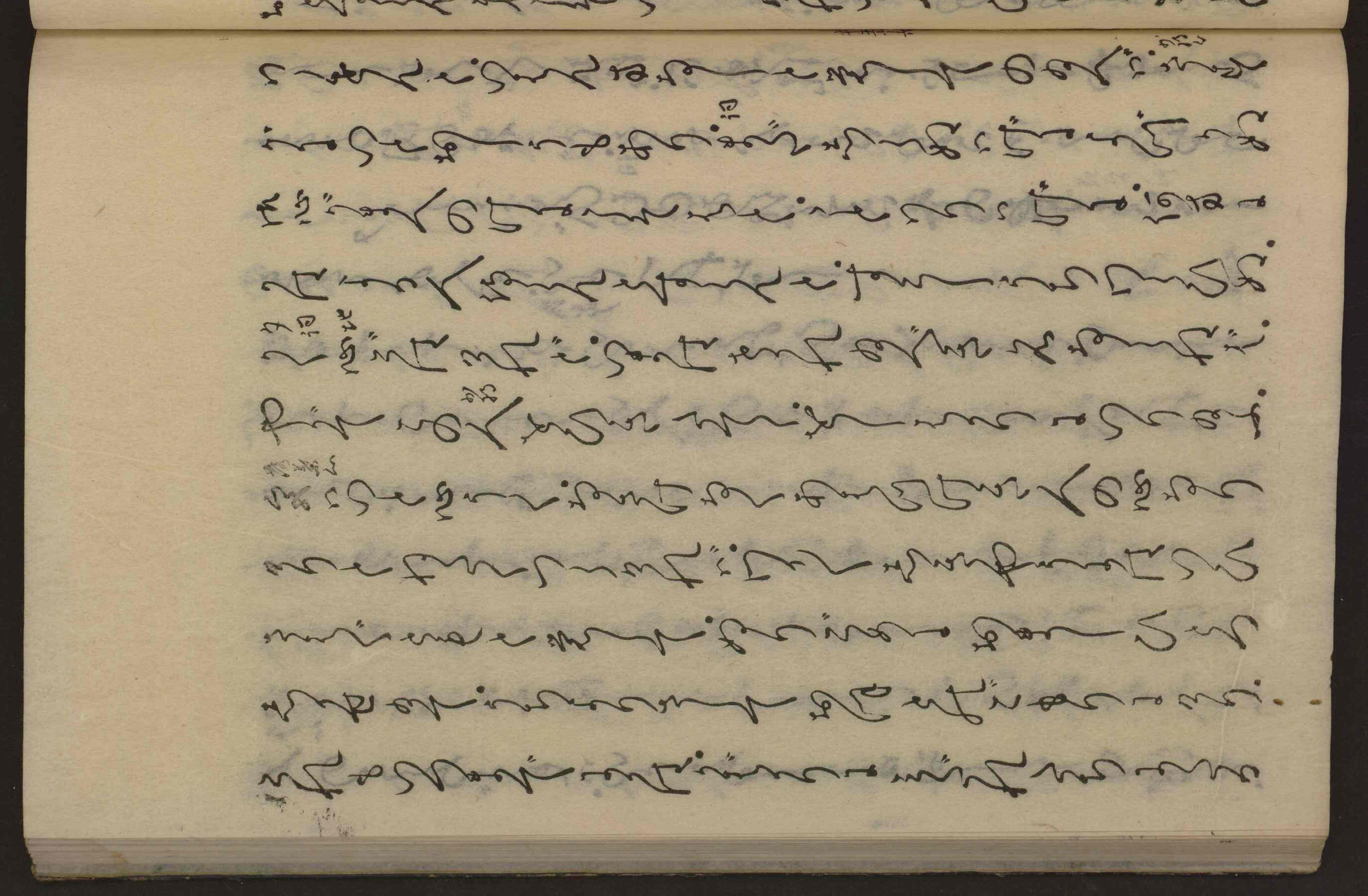






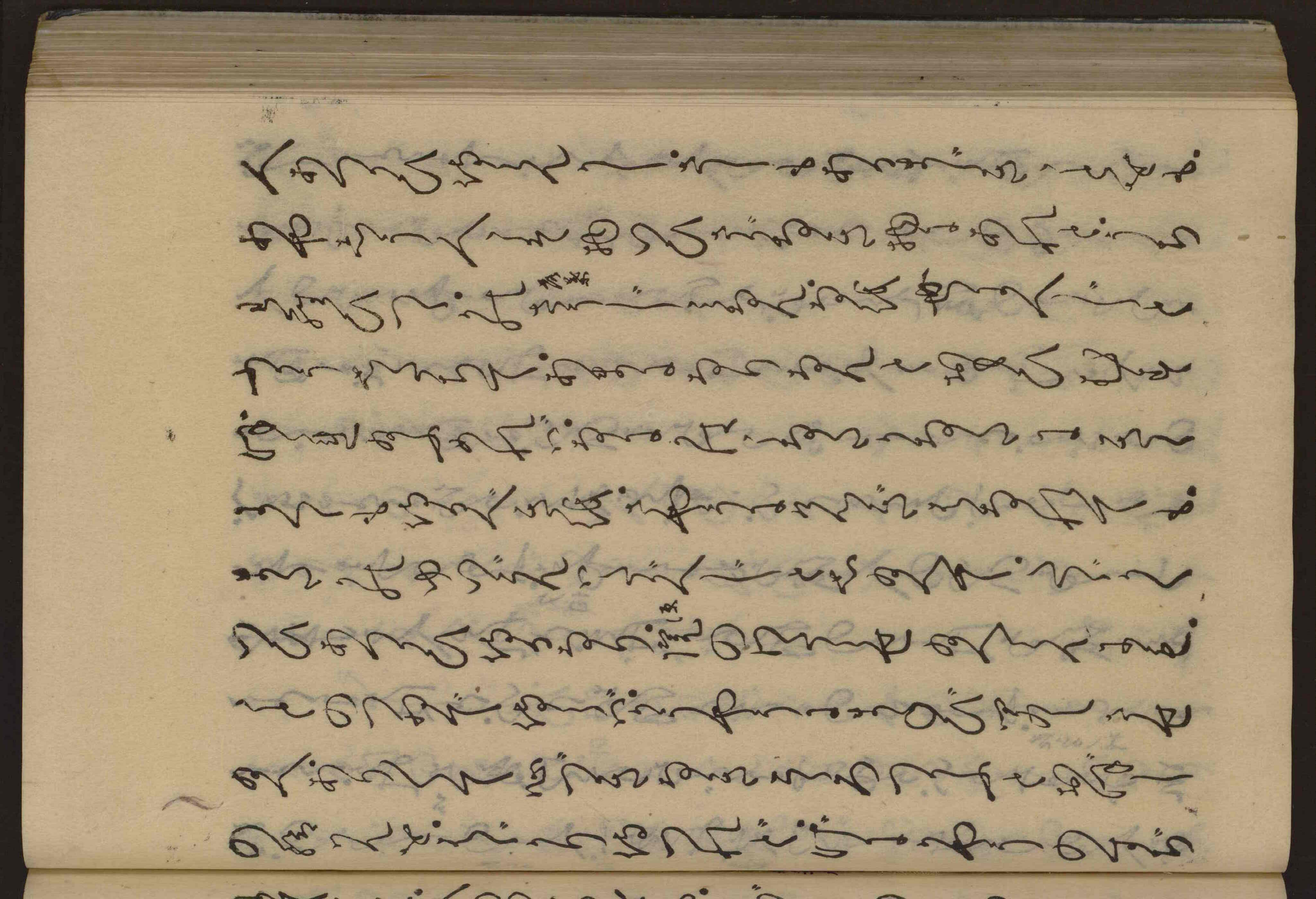
されど年へにけること紙をとなくかしこそ
もしさですぐし給けるなりとのこゝおもひなして
くく女(彦素)のれころゆるひ給ふぬとさひよろ人もなし
とてもなくても女(彦素)のれこゝあそいとおしけれれ
まうけなどさ海うちして。ものたしめゆしげ
なれど抱まいしをなどこれさづまりぬるまつ(タノ)ゐる
のてかねの君をいうじうを先のふれ(かね伺)こころさし
まことになぐうおぼされど。ふあすをすぐして
すしさをぬへ中くこちくりて抱えしさげして。
なさ人のやうまてなんかさせ給ぬるこしらへこそ
ゆるともつくしとのこおぼされこれどなまごとも



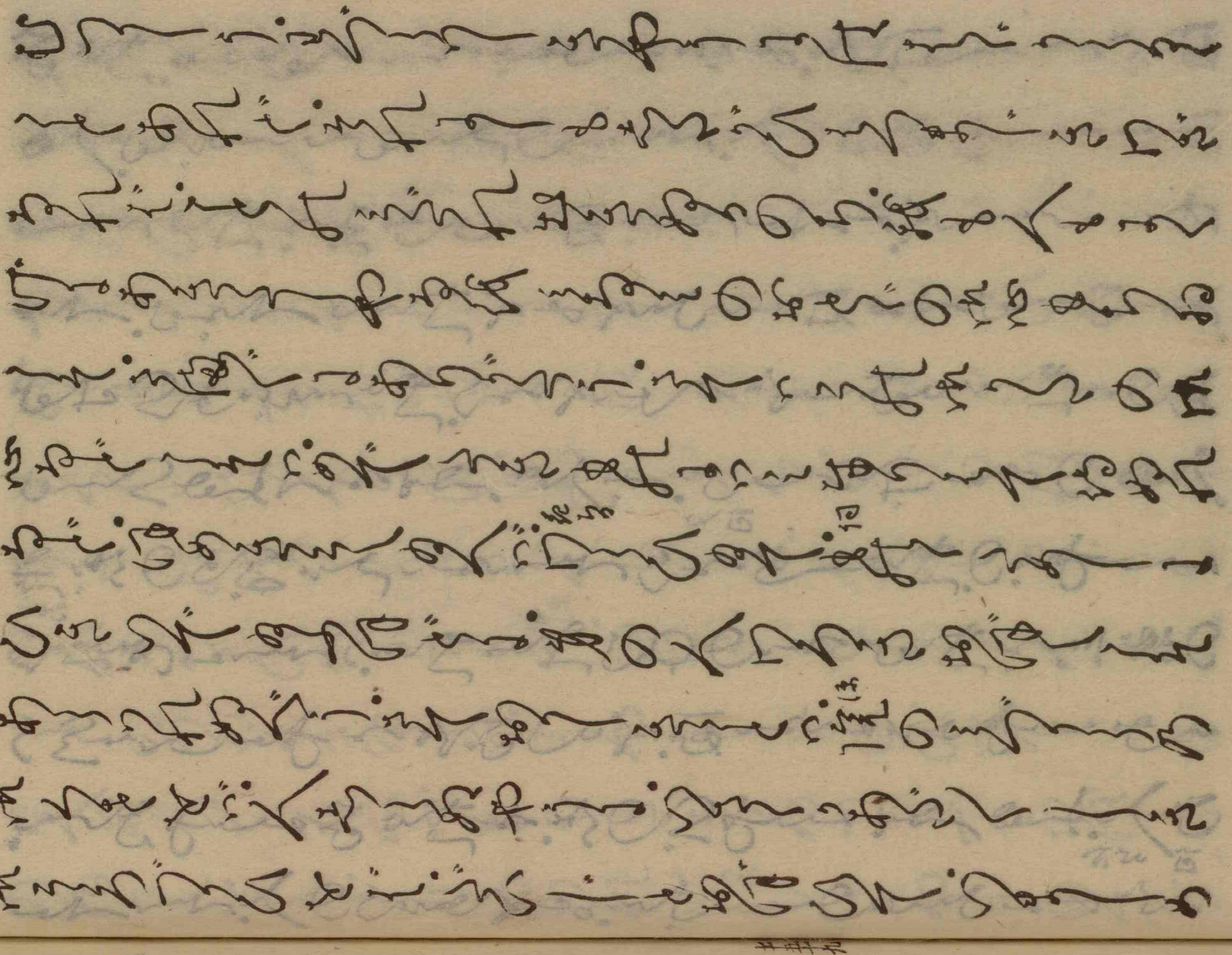


人のころどもいとうるしう口おしうおぼして
おとこ（タん）ぞいめぎ海しうつくしとしひまへど
うぢうりまていおまのまてもちまくことはとのど
うまそして、よろづにしひあしのふ山どりの
こちぞし給けるからうしてぬがこりなりぬ
りてのことくいへば、ひるおまてなるべかれど
出のふとて、こぐいさくれひまとぐまといこじう
きくしのへど、いとつれなし（蔵素ノ）
タうくまびむひあ紀がこき冬の夜にまるさし
まさろ関の岩りど、こそくんかるなきれこころなり
りとなくく出給、六条院まぞかりてやまひ

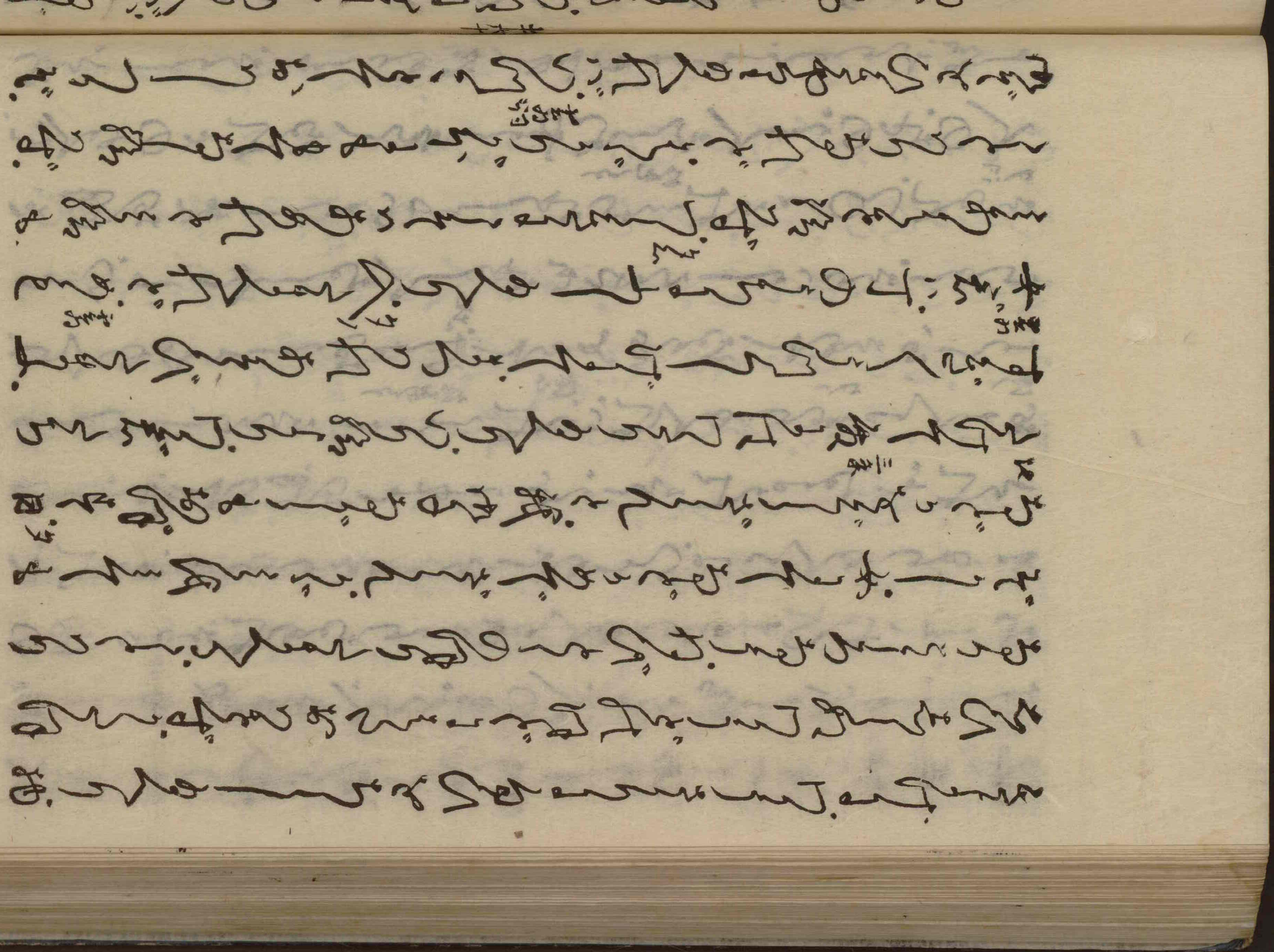
給ひんがしのうへ一条の家にうしまりの人を
ことゝかれ大夫にうりなどまつゆかいりたまふれ
ことまかはといとおほとうまのるまふこゝまて
此事そへこれどそばより御のうまはる紙こえ
こそまつりのふさやうまもる紙人のいひなしつ
べきことは給りこ家まで前にいとこころづようある
まじきさ海にいひたるち給しかどかざりの
さ海にれこゝちのよもりけるに又こゝゆげるべき
人のあるさやうなりけんなりん後のうしろこ
まとやうなることれ給しかばもとよりの心ざしも
給しことまてかくしまへなりぬるとさ海ぐいる

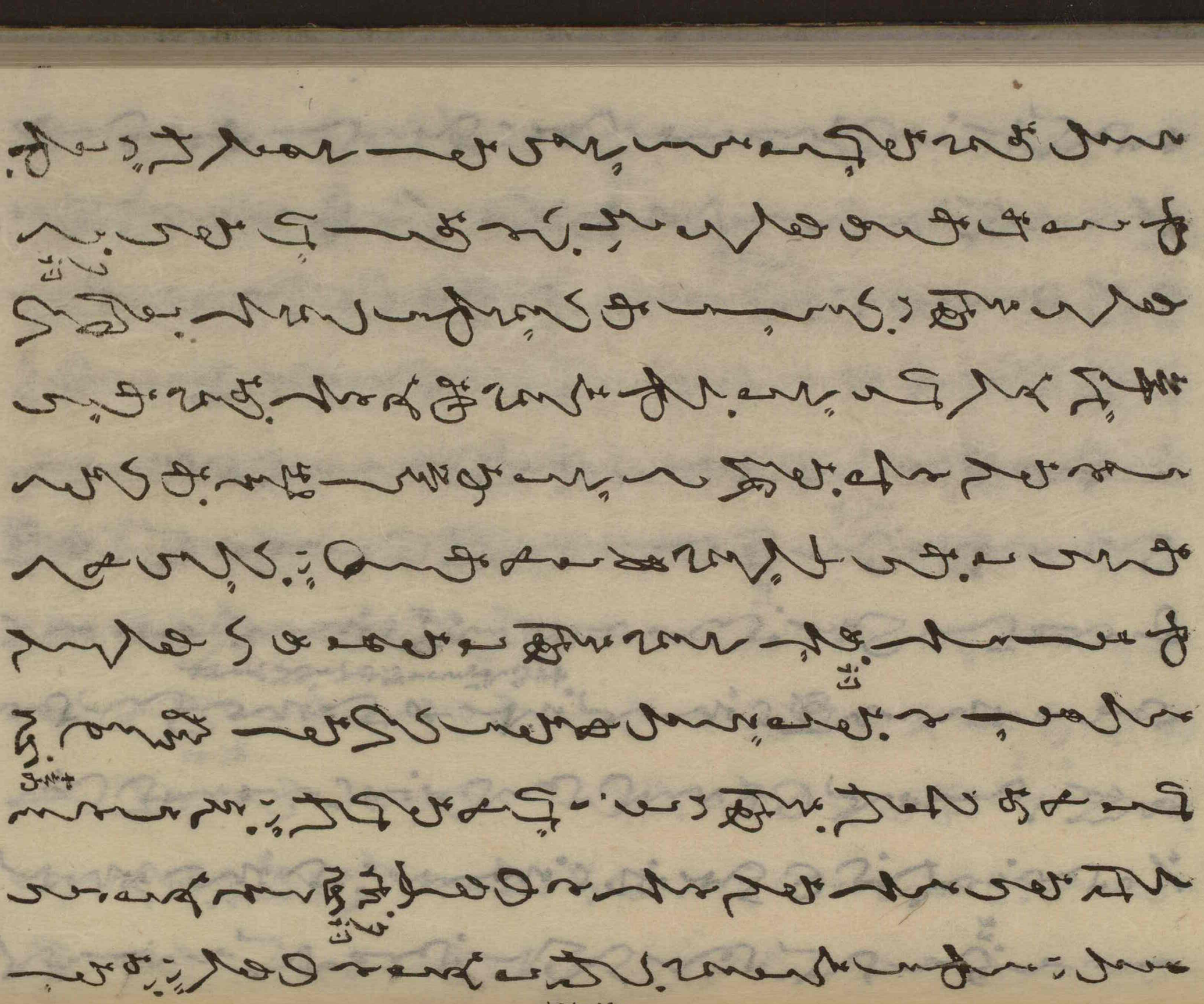


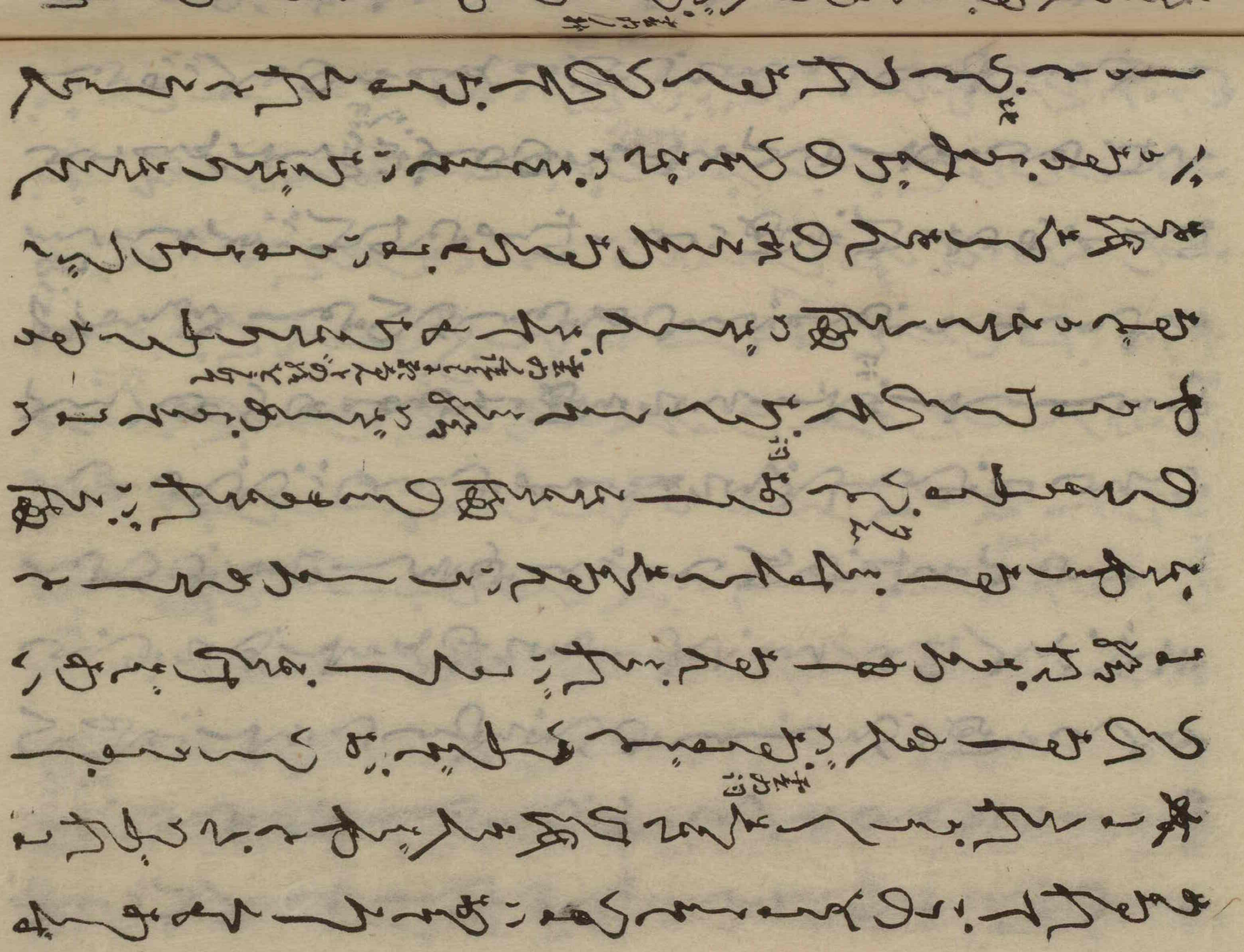
まそこそ人のいさめをもしづこのころまもしる
がしぬやうは侍れと志のびやうは罪しぬふ人乃（花ち 伯）
いけしりまやとも侍つるを海ことまさるやうあり
此氣もまこそいこれよれつ〇のことなれど三条の
姫（宮ね）君のおぼさんことこそいとおしけれのどやうは
なしひぬふてと罪しぬへじらう（夕伯）こげまものぬへ
なすひめざこれいとをくしうけるさぶれもの侍
とそおどそかれをもとろうはまそなし侍ん
りしてかれどれありさ海どもまそもとしたりしせ
ぬへなぐしうなんのことそ人いつゐのことは
侍めれさぶなくことがましきもしばしたち海

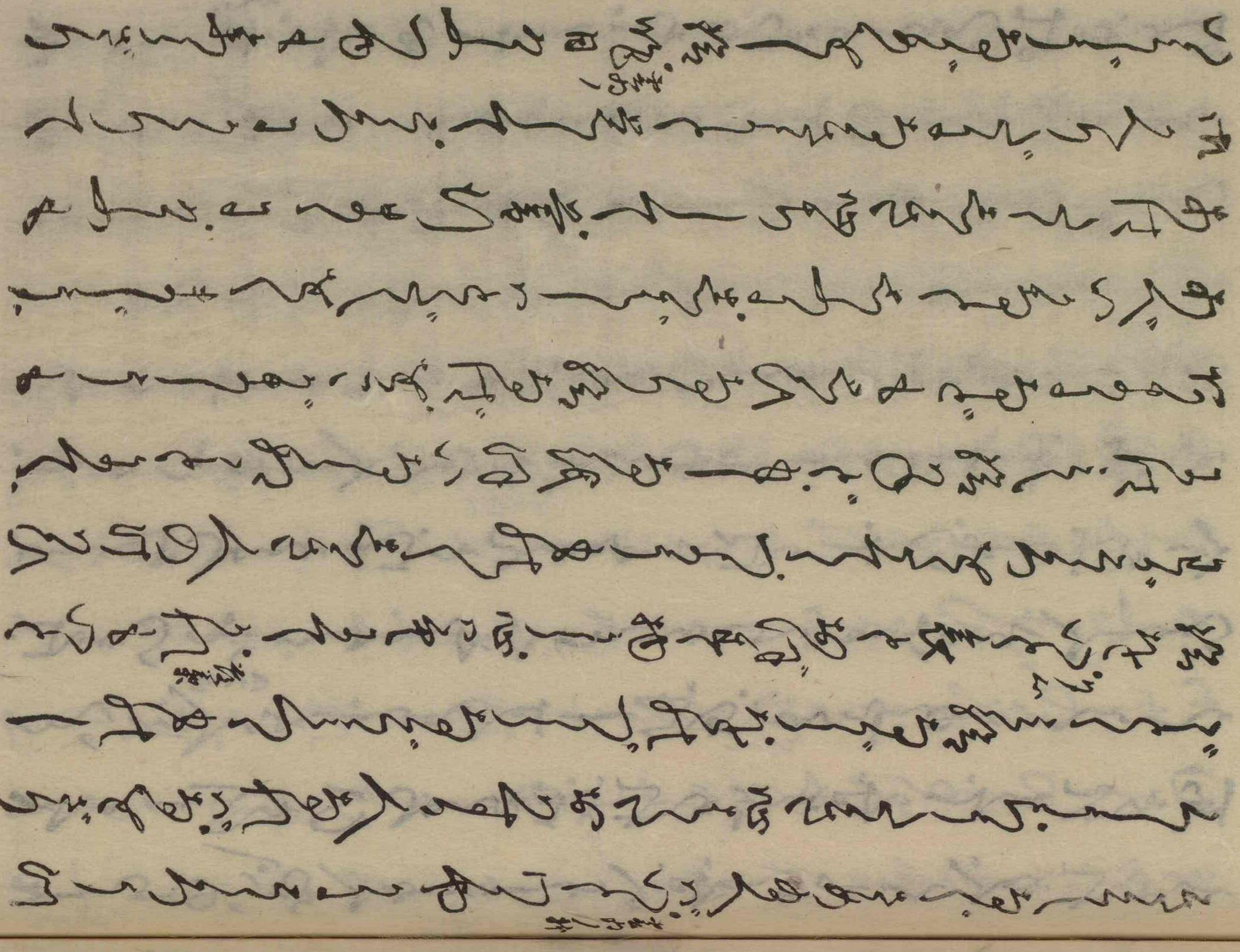


と給ひしごとまもすれ給めりしそぞうしぞう
人のなのがうへしらぬやうまゐし給れとのゆへぞ
さちんつ〇まこれ（笔ノ事）こちなしもいまし先ゆゆを
らうくさうハりしうきゆなしへちしでもいと
くくおさめて給ひ心をとそ（地）げるおしとゆゆへり
おまへる（ゆゆ）来りゆゆれバ（ほム）れことしきうしめし
これどおまゆはきくがゆまもとおぼいそぞうち
まもりゆへるよいとめでたくきうしまこれご
ろこそわびまきりゆへりゆさうりちゆれざるさ海の
すきごと紙し給とも人のもどくべきさ海もし給
ひず。罷神もつゝゆりしのべくおぼやうりもれ









けふまてハいとゝまうちかくしておとろかす音よりる
こあるいぼしのところゝなりしさ夜おとろかの
つらくまてちらし給しる世中のあはれかなしき
えとゝりしうとゝふ人かくこゝろをねんまて宸うし
こすこゝ気色ばかりしあかりとおさてこゝすくすくちに
まて侍いやかなさしもあしじやあん人をまたこし
今さらなにもいそうけさなるんとげふこゝろちかふ
いかしへずるともうりさらとふきこくれどもつまに
うくまくこのゆめもあはしすつましきんべいと
東をにまでうらやみめれバこれこゝろひとつはまて
しあれのべくもおくはぬよしてめんやいのちこそ

きぶめなる世なれとて、うちなる給ことも有。女も
むしのことに出ぬ。衣まもありがたりし
此中のさすがに契ふるまけりれと、おもひ出
ぬふ。なよびたる此ぞどもぬぎのこそ、こゝろこと
なりをとりうきねて、ふさしめのひめでたうつく
ろひけさうじて出ぬ。ふ氏ほかげにいぐして。
志のびがたくなるぶの出られば、ぬぎとめたまへる
ひとへの袖をひきよきて
なるゝ身をうしろんよりは松嶋の所まれ衣に
こちやえましぶ氏うつしびとまでいえすぐす
まじうりうりとひとりごとにのたまふ氏ふち

とまりて。〔詞〕さも心うきれうきれ
〔夕〕まろし夜の一間みれぬれぞぬるれぬとそぬるさ
入りそふ名ところめや〔地〕いふちいそぞそふとちか紙
ちとりや。うしろは。ちか紙さしこもりおくるを。
〔今詞〕ひとりぞうそのこや。いひかくしかくしうりぬ
男も行めべきを。側のれま程まそあるべきも紙
こそまさ様ちあるどころげよ男かれば。さらも
おうもくいおびしちずしいまより後ぞをの男
とも私情心のますぞのしらる我もぞころづきなく。
うらめしうりけるく人のゆかりとおびしきりそぞの
敷もなめし程みずぞすれまゝておそづくる

なりと罪しけくし給。人もいとおしとこまるいさく（薄墨ノ紙ニ）（おれ詞）
うも人心ちするなりあるんにつまれ給ひずに。とも
ううも罪しん。これはづくのほどに一すぢにしひ
こゝろくことなくてゞるすぐさんとなん。ふくく
おぼしの給ひするをうくいとあやまくにしぬ
人なくなりぬめるなる。我いうじうつしき物に罪
まふときも。忘（夕詞）こゝろいえことざ後にうしろやすき
物を。しきぐなりける世かれとけちげきて。例の
やうにておりしまさば。もれぞしなどまてもしこと
ぢうり罪して。此心やぶるべきにもあらずおまうこの
こし月をもすぐしけべくなんなどつきもをず

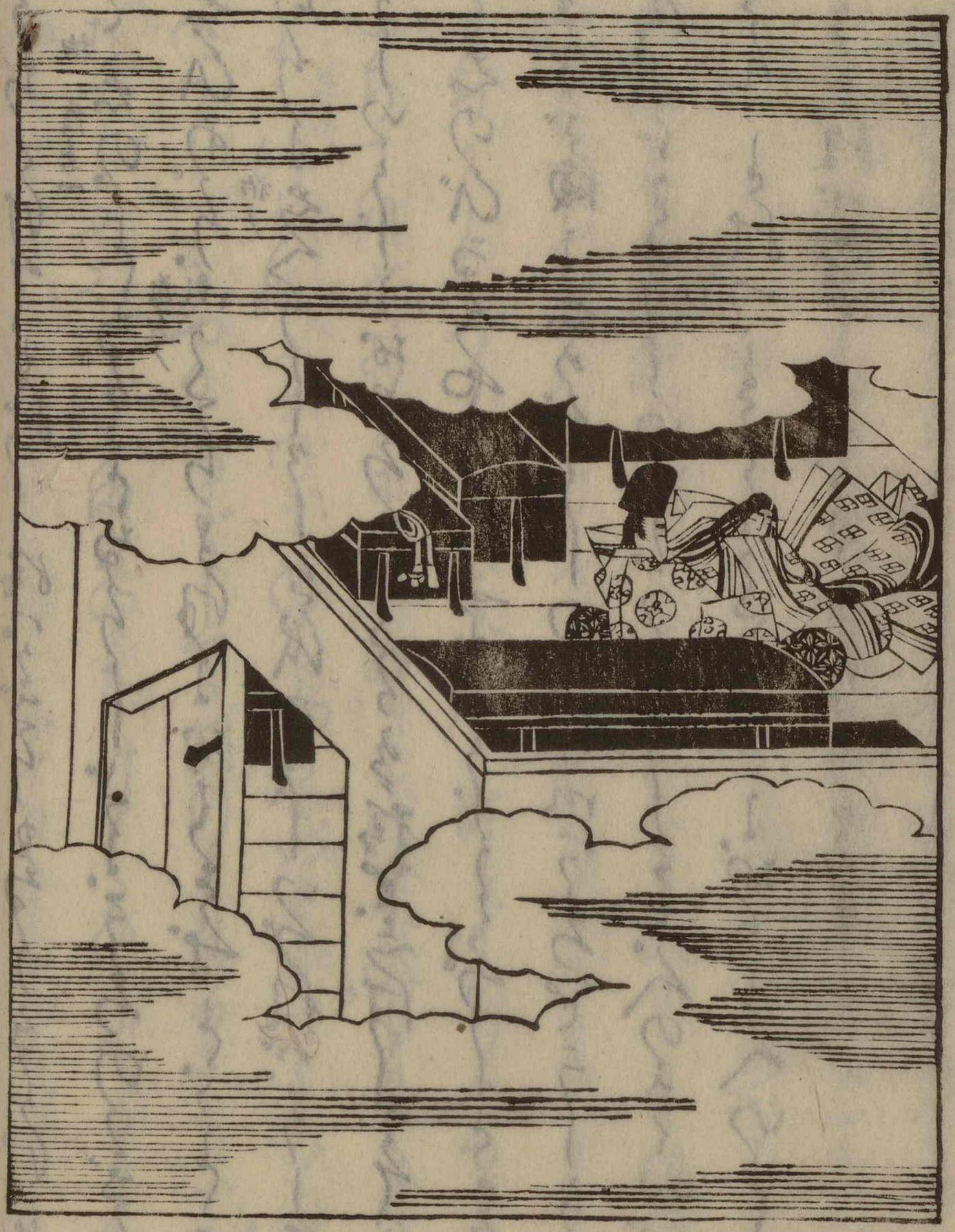
ゆへ、ゆへどぢ(茂美詞)ぬ、ぬくうこぐれまそへて、ぎりなき
れこころなんいこじうつしき人のきくおもんこと、
もよろげまなれめなしぶりけるれうきをばさら他
まてことさしまころうきれ心がまへなりとまる
いひかへしうしこ給つくげうかるのゝもてなし
ゆへりさり(かん)とてくのゝやハひとれきくもしさん
こともことゆりとまくしたるうての人めもおぼせ
ゆへがうち(詞)くの れ心づかひもこれのゆふさ海り
うなひてもしばしいちきけぢまんよげうぬる程
のいとうさてありまるかりとてうきこしぶ
人のれるいうぐもいとおしうなべきひとへり

抱をそして、おさなげなるこそいとおしかれなど。
これ人（かね）をもめぬへだ、げ（ん）にとひこなるも、今は
心ぐるしうかたじけなうおぼゆるさ夜なれば、人
うまりしぬふぬりごめれ、かのくちらりいれ（タと）なりて
がり、いこじ（蔭葉ん）うあさましうつくしと、さふふひと
ともげにうる世の人の心なれば、これらりまさる
めをもこきけべかりかりと、これもしき人もなく
吹きて給ぬる所方を、色くなるしうおぼすおとこ（シク）は、
ようげに見しまるべきことなりをさそしたるを、
云の葉おほうあれまもおしうも笑へつくし、
ぬへど、つくく（蔭葉ん）心づきなしとのこおぼいたり、いと（タ河）

かういはんかたなき抱まなばされかう男のほどは
こぐひなりもづしかれがおりもじきろろのつき
そめかんも心ちなくやもうなばし仍れどもり
かへす抱なしぬうちまおまれこけきれ名まかは
あらんいふかひなく笑しまかれもふまかれもぬ
ときまをちぐうこめしも仍りなりを。こぐうろ心
ざしを。ふりきふちまなずしへのそすてつう男と
なばしなせとしてしのふ。ひ（落葉）とへのゆぞをひき
くしてこけきことは孫氏なき結さ海の。
ころふくいとおしかれだいと（夕詞）こそいう
なればいとうなばすしんいうじうもふくも。

うちうりまちりぬれば、それづしゆるふにしきも
あるをいきまよりけまちびきがくきは、鞍をきうて、
まくしなどせふやうあちるを、さやなげすらんと
せひよりまおまりなれば心うくて、三条の志の志
のふくんこといかしへもなまぞろもなうあひ思
ひきしたりしよれこと、年ばいまいとうしなさ
さ海まうちゐゐとけくまへる海をせひ出りを、
ワが心もていとあぢさなうしつけられだ、あれ、
がちまもそしらへ罪給いずなげさあし給川、
りうのゑせれがましうて、出いんもあやしければ
はふいとまりてころのどうまおもすぐくさへひ海

うらとけてもれし給はかぎりもあらはさまげや
こ志の（拍 後葉ハ）ことなりしごとこころのうぎり
しひあぐり此（後葉ノ）ちまほまおもまぎとこと乃
おりまし（拍ノ）しりしき紙そしいづれがましてし
うういうじうおもろへまろうを様をしげしまても
こしのびなんやとしふもいうしうもづしとき海
ううぎ海にしめぐしつゞけこころをこしらへ
給こぐるはしいうこしこもしこもへのさくおぼ
さんことれつこさしんくるなきにおりさへいと心
うれがちぐさめがくさなりなる

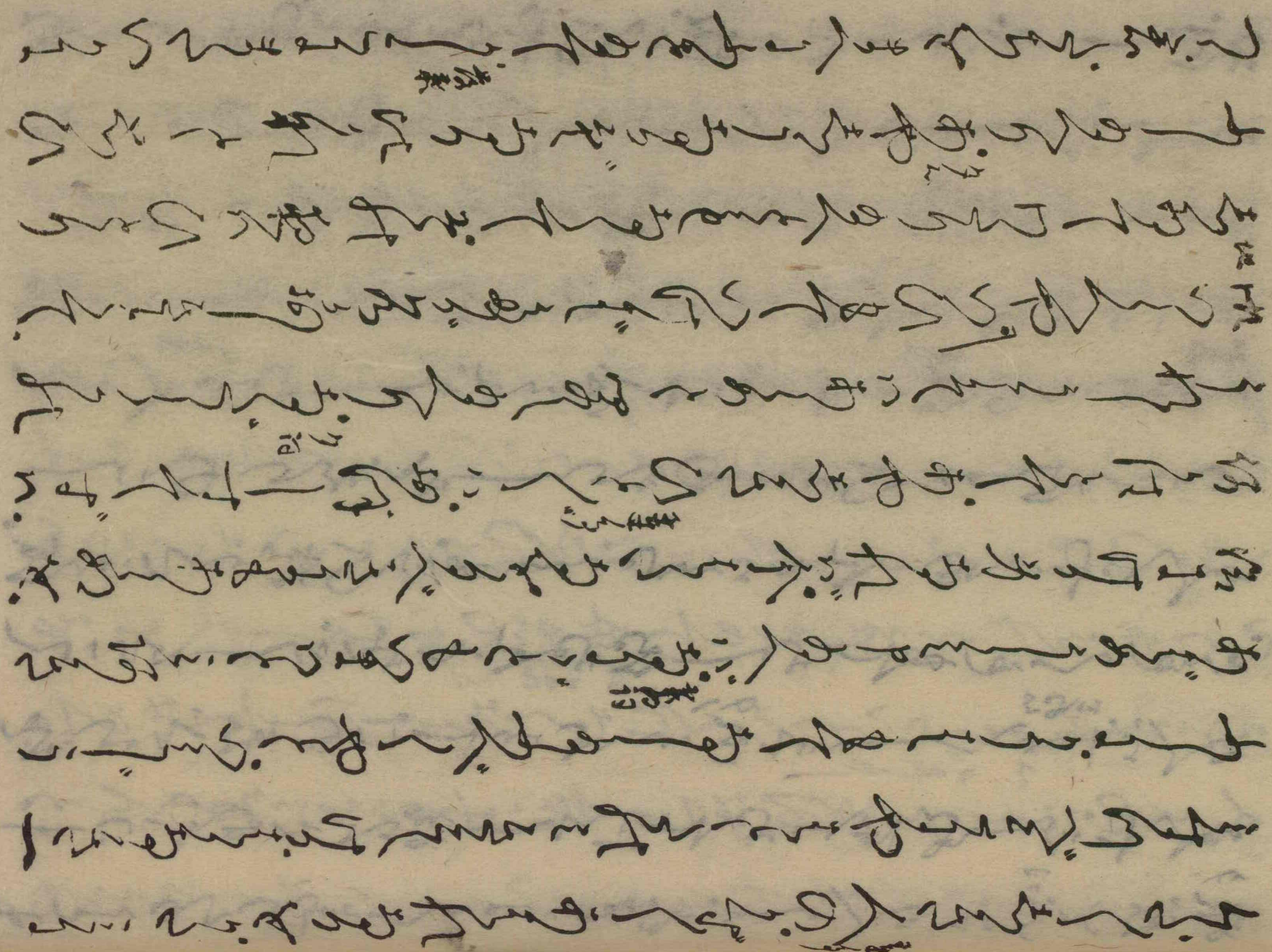


れてうづれりもなど。別のおましのるまゝ事れり。色こと
なるれしてしひもい面くしきやうなれば。ひんがし
おもてハ屋風をしてしかもやのきゆまりうぞ。ゑん乃
れ五丁などことくしきやうしまゝえぬ。ぢんしき
よりいなどやうのをしてしうろぐへまてしてしひ
たりやまとれかゝのしまざ女々り。人ぐもあざやう
なしぬいろのやまづきかいつりうなきぬ。なをこび
など紙こゝへさをうすいろのもおをくちぞなど
をさくまぎらりしてれざのしまいり。女ざろこて。
しどけなくよろげのことなしひこうなのうちる。
まさ面こゝろとぐめてしまげかなるしもべをもいひ

とのへごの人（大鷲）ひとりのみあつかひをこなふかく
おぼくぬやんごとなきまからう（タ）とれおかすかときて、
もとつとめざりけるけいしなどうちつけに来りて、
まぐろなどいふうるさふしひていとなみたり。
うくをめてもこなれ（タノ）がかつかりぬふほど、三条（宝ぬん）殿が
ぎりなめりとさしもやもとこそかけいとれみ
れ。まめべのうろうちろいおぼぐりなくなんと
きくしハ海ことなりかりと世をこうろみもつ
ぬちして、いつき海にしてこれなめげきをうじと
見しかれば、おほ（ハ）とのへ方ぐへんとてけり
海にけりを、女（こきでん）れの此里におもしすりほどなどは

多いめしめてずうし抱たひはうけ前におぼされて
れいのやうにもいそぎつかり給ひず大将殿もこゝ
めてされぼよいとさうにもれし給ひどちりこの
おとゞもたゞおとなしうのどめこゝろ
さすがにあらいとひきぎりに菓やいのへる人ぐ
まてめぎ面しうじきうじちとひかく先さ
ことぞ志いで給ひべきことかどろうれぬて三条殿に
ひとりぬへれば君ごちもうへたとまりぬへれば
姫君こちさていとおさちまさとをぞゐており
まけるこうけてよろこびむつれおりハうへを恋てて
さうりてうれへあまさ給を心ぐるしとおぼせ

きうそこしたびく罪そ。じんへまなれさまへど。
此世りぶこはしかくかくしはしうかぐ。
しれよやと。もれ志う言しぬへど。おとゞのこさ
給ひん取もあれば。くくしてこづくし来りぬへり。
志ん殿まちんおりするとて。例のわたり給ひ
ごぶちのこさふふけ。君たちぞめれとよそひて。
おりしけるいまさらはわかくしのれまじらひ
や。かくな人をこくりしてまおとしなきぬて。
あぞ志ん殿のれまじらひいふきけしうしぬ此こ
ろのすぢとは。ごしぜこしまされど。さるへきまや。
むかしより心まもちれがたうむこさてて今いかく



おぼしえざるらんさ海さひやを冥しやまてうらぬ
こゝろげらしなれがいかなる人がうやうなること
おしうおぼゆらんなど抱こうしぬべうおぼし
ゆふ明ぬれば人(夕付)のこゝろさうんもわかくしき後
(言ハリ)うざりとの給(言ハ)まてがさて心えんがしこなる人(重ニ)ども
らうしげまこひ言ゝめりしをえりのうし
かへるやうあらんとはこゝろがしも思ひ捨がたき後
ともかくもまてなし仰なんとをどしきこゝろ
かへがすかしき(言ハ)れこゝろまてこの君ぞちを
さへやしきれ所なおてわしけるんとあやうし
娘君(夕)といざかへりしぞまりまうくまりらることも

もしさちければ、つれまもまいりうじ、かしろにも
人ぐのらう、さき紙おなじ所にてぐまうまらんと
きこえ給ふ、まぐいとゝいろけなくおしげにておりす。
いとあはれとこまりまして、毋君の御をしへにな
うなひ給そいとこころうくさひとうくなるさ心
あるはいとあしきまぎなりといひしらをまりのふ。
おとぐうらこと紙字まして、人ゆられなるやうに
そしなげくさばしいさてもこ給ひで、どのづら
さふところもれをこらんね紙女のくひきぐす
なるもかくりていうるくおばゆるゆぎなりよしく
いひそめけとなしばなるはおれてふとしも

人のりきこころもしへ
えなんとの給ひきて、このこやにぞ人のかねの
君と使ひてなりぬふ
ちぎりあれや君低こゝろにとゞめをきて衣
とゞひこゝろしとゞきく。ちぎ低こゝろしもちぎし
とあるれふこ低。かねもて、おりてぞいりにへぬふ。
これこおもてのすれこにゆこぞさし出て、人ぞ
地こゝてしよくし。交ハましてまびしと思ひ、この
こゝは中にいとゝうちよくめやすき海にて
のぞやうにこまはしていましへを出さゝる高色
なり。紫りあれにこゝろしてゞねくし

りぬまさも作らんしゆりさずまやあらんなど
ぢりぞくすめぬふ作也（彦栗ム）しいときてまくて。
（訂）まれいさしまえくまじとのこまへば作（今詞）こころ
ざしもうそつかくしきやうまをじがきたる
冥さすべきまやいとあつまりて冥さすれむ（彦栗）ま
づうちなきて（ム作見栗）こうへおいをましゆばいりまころづき
ちましとおばしちがくもづゝ後くい給いましと
ちしぬふまおまうぶの水ぐきまさ紀ぶつ心ちして。
うきやつき給いず
（彦栗）なまゆへゆ世まゆずちくぬ力ひとつをうし
とをちひゆちしとをこくと（地）のゝ常しけりまくま。

うきもとぢめ給ちぬやうにてとしつゝそいぐし
給つ。(拍ノ才)が拍は人ごと物語して。(詞)時ぐさふしふにかゝる
ふ寸のまへはこゝろぎなき心ちし侍りを今よりは
よすがあり心ちして。つゐに第るべしかいげなども
ゆりされぬべきさしばのさりしあらられ侍り心ち
なんし侍ちど。(地)かしさばをさて出のひぬ。(前義)いとぐ
しく心よりしぬ所なも色。(クノ)あくがれまどひのふほど。
(は)大殿の(雲ヶ内)君は日ころふりまくに。おぼしなげくこと
きげし。(惟光ノ女)間侍のすけ。かゝりこと紙きくに。これを
よしくまゝゆりさぬ物にの(書ノ)給なりよかくなかづり
まくきことも出きまけりとともてふしたまどは

時ぐそてまつれば、きそくしたる

内侍 うぎなるしが男にしたれましられたる人乃
ふあにもぬる寸袖かれ、雲ゐ海けやうしといふのへど、
ものゝあはれなるほどれ川きぐにかれもいと
ぐにはなぼしじとなぼすかる心ぞつきにける

雲ゐ 人の世れうき氏衣とうしかぜ男にんん
とはしたぐらし氏、とのゝあるをなぼしけるまゝと
衣ゝうろ、比このむりし内中ダとゆゑ雲ゐノごえのほどには、これ
なりしのゝこそ、人しれぬもれにしひとめぬへりし
うど、ことあるゝあて後はいとゝ海さるにつれなく
なりまさりぬひて、さすぐにしたぐちはあまるに

此まそり。此れ（書ね）もしるまハ。右（こ）良（ら）ぞ。三良ぞ。四良ぞ。六良ぞ
ぬほい君。中の君。四の君。五の君とおもひ。内侍ハ
三の君。六の君。次良ぞ。五良ぞとぞおりしけ。すべて
十二人が中ま。うへほなうなく。いとおしげまとり
どうまおひ出給ける。内侍ぢしの君ぐちしもなん。
うちおしうろぢせうどありて。これすぐれ
たりける。三の君。二良ぞ。ハひんぐしのおとぐよぞ。
さりつきてうしづきまりぬふ。院（源）もこまれまて。いと
らしくし給。この此なりしひのこと。いひやな
うるなくとぞ

69038
6AP78